教育関係共同利用拠点
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」
Joint Educational Development Center
“Educational Development Core in International Cooperation”

2013 年度
教育関係共同利用拠点事業報告書

Joint Educational Development Center Project Report 2013

東北大学高等教育開発推進センター
大学教育支援センター
Center for Professional Development (CPD)
in Center for the Advancement of Higher Education (CAHE)
Tohoku University

2013 年度教育関係共同利用拠点事業報告書

目　　次

1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について……3

2. 2013 年度活動報告 ……3

2-1. 計画の目標及び運営の基本方針……3

2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題……4

2-3. 学内外への宣伝・広報……5

2-4. 調査研究活動……5

① 大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究

② 大学教員準備プログラム調査研究

③ 知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究

④ 大学教員による授業準備に関する調査

2-5. プログラム開発・実施……7

2-5-1. 大学教育力開発（高度教養教育）（2013 年度実施分）……7

2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）……7

2-5-3. 東北大学 新任教員プログラム（Tohoku U. NFP）……9

2-5-4. 履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム（EMLP）」……10

2-5-5. 大学職員能力開発プログラム（SPD）……12

2-5-6. PD（専門性開発）セミナー……13

2-5-7. PDPonline（専門性開発プログラム動画配信サイト）……14

2-6. 研究成果の発表・出版……15

2-7. 他機関との連携……17

2-8. 2014 年度以降の課題……17

3. 参考資料

3-1. 大学教育力開発事業（高度教養教育）……21

3-2. PDP（専門性開発プログラム）……23

3-2-1. PD（専門性開発）分野一覧……23

3-2-2. PD セミナー実施一覧……24

3-2-3. PD セミナー参加者アンケート結果……36

3-3. CPD 教職員組織……70

3-4. 共同利用運営委員会委員一覧……71

3-5. CPD 教職員の活動……72

1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について

東北大学高等教育開発推進センターは，2010 年 3 月に教育関係共同利用拠点の認定を受け，この事業を担う大学教育支援センター（Center for Professional Development; CPD）では，これまで 4 年間の事業を推進してきた。2013 年度は，①組織開発と教職員個人能力開発の 2 つを柱に，②大学教員の専門性を 4 ゾーン 14 カテゴリーに区分して包括的な専門性開発プログラム（Professional Development Program; PDP）を提供，③キャリア・ステージに対応して，大学教員をめざす院生向け大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP），大学のこれからを担うフロント・ランナーとしての新任教員プログラム（New Faculty Program; NFP），履修証明プログラム大学教育人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP），大学教育の運営力を高める大学職員能力開発プログラム（Staff Development Program; SDP）の 4 つのプログラム・コンテンツを拡充して提供，⑤PDP 動画配信サイト（PDPonline）におけるセミナーの動画配信を拡大した。

また，大学間連携共同教育推進事業（信州大学他）や他の教育関係共同利用拠点，大学 IR コンソーシアムなどとの連携を強め，全国的な普及に努めるとともに，2012 年度に行ったオーストラリア・メルボルン大学，アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校の専門家による評価を反映させて事業を実施した。

2. 2013 年度活動報告

2-1. 計画の目標及び運営の基本方針

(1) 拠点事業 4 年目に入り，各活動の質を高め，6 年目以降の持続的な拠点事業の基盤を構築する。

(2) 高等教育開発推進センターの第 2 回外部評価及び外国人専門家による拠点事業外物評価を反映させる。

(3) 海外派遣をもとに，PFFP の日本型プログラムとしての確立を目指す。

(4) 特に，取り組むべき重要課題は次の通り

①キャリア別をベースに提供プログラムを整理し，4 ゾーン・14 カテゴリーにバランスよくセミナー類を配置し，体系的に提供する。

②大学教育マネジメント人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）を，履修証明プログラムとして発展的に改編し，試行的に実施する。

③大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP）は，全国共同利用拠点事業の性格を強め，他の研究大学の協力を得て，院生交流会を実施する。

④新任教員プログラム（New Faculty Program; NFP）は，メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを組み込む（11 月実施）。

⑤新任教員向け PDP は，NFP と結びつけて体系化を図り，メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを実施する（11 月実施）。全国共同利用拠点事業の性格を強めるため，他大学の新任教員参加も組み込む。

⑥セミナーの動画化と配信を拡大する。

⑦他の教育関係共同利用拠点，大学間連携共同教育推進事業（信州大学他），大学 IR コンソーシアムとの連携を強め，大学教育学会大会への支援など，全国的な大学教育改革への寄与を行う。

⑧大学管理職調査など現在進行中の研究を進め，東北大学高等教育開発推進センター全体が参加

できる次期5年間を見据えた共同研究（科学研究費基盤A）の企画を進める。

⑨拠点事業4年目を迎え，組織体制に変動も生じること，東北大学高等教育開発推進センターの改組などの動向を視野に入れ，専門性開発活動全般を東北大学高等教育開発推進センターの使命・役割に改めて位置付け直すと共に，各種プログラムに参加した人材を積極的に活用し，持続的な運営が可能な体制作りを進める。

⑩PFFPの一般経費化，平成27（2015）年度以降の特別経費プロジェクト（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）及び，教育関係共同利用拠点事業の構想を検討し，今秋以降，申請の準備を進める。

2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題

(1) 目標

①事業専任教職員組織のみならず，研究開発員および共同研究員の協力を得て，業務量のバランスを図りながら事業の質を向上し，持続可能な体制作りを進める。

②大学教育支援センター定例打合せ，部門長会議，コア会議を効率的に行い，円滑な運営を進める。

③他の教育関係共同利用拠点，大学教育関連学会大会への支援など，全国的な大学教育改革への寄与および連携を図る。

(2) 実施状況

・**教員組織の整備**　これまで兼務としていたプログラム開発部門長に研究開発員として事業に関わってきた教員が就き，新規研究開発員を3名増員し，研究開発員は計28名（内，東北大学高等教育開発推進センター教員24名〔内，外国人教員3名〕）となった。内2名の事業専任教員は6月末と3月末に他機関へ転出したが，本拠点事業終了まで約1年となるため，教員は補充せず，支援職員で補うこととした。共同研究員には，カナダ・クィーンズ大学教員1名を増員し，共同研究員11名（内，国外研究者5名）の体制となった（参考資料3-3）。

・**事務体制の整備**　7月より，転出した教員分の補充として，教育研究支援者（准職員）1名を雇用し，従来の運営体制を継続できるようにした。

・**組織運営の改善**　部門長会議による運営を基本とし（10回），コア会議は半期ごとに開催，全体的な意見集約と基本方針決定に重点をおいた。定例打ち合わせ（38回）を開催した。7月12日に共同利用運営委員会を開催した。

・**他組織との連携強化**　海外とは，オーストラリア・メルボルン大学，アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校，カナダ・クィーンズ大学と引き続き提携したほか，国内では，4教育関係共同利用拠点及び広島大学高等教育研究開発センターと共同で行った「大学の組織運営とマネジメント人材育成調査」に関する研究会を合同開催した。行動規範教育推進のため，大学間連携共同教育推進事業「研究者育成の為の行動規範教育の標準化と教育システムの全国展開」（CITI Japan プロジェクト，信州大学他）と連携し，CITI Japan プログラムを PD プログラムに組み込み，提供を行った。大学IRコンソーシアム（全国国公私立20機関）に継続して参加し，2012年度末に実施した本学学生調査を活用して分析を行い，報告書を発行した。

2-3. 学内外への宣伝・広報

(1) 目標

①パンフレット，プログラム用ポスター・チラシ，ホームページを充実，情報発信手段としてソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の活用について検討する。

②PDPonline の拡大に伴い，多様な提供方法に対応できるよう，発信力，利用に関する情報収集力を高める。

③教育関係共同利用拠点活動における学内者の理解と認知度を高める。

(2) 実施状況

・**広報物の作成**　「2013 年度プログラム案内」（10,000 部）を作成し，PDP 全体の構造と説明を併せたパンフレットとした。また拠点事業の全体像及び大学教育支援センターのチラシ（10,000 部），「PDP 2013 年度開講科目一覧」（7,000 部）を作成し，開催セミナー，国内外における各種集会，訪問調査等で活用した。

・**ホームページの活用**　学内外への広報として，高等教育開発推進センター，大学教育支援センター，東北大学，広島大学高等教育研究開発センターホームページを活用し，各種プログラム・セミナー等の情報発信を行った。PDP 2013 年度開講科目一覧はデータ版をホームページに掲載し，ダウンロード可能とした。

・**拠点メーリングリストの改善**　拠点メーリングリストの管理機能を改善し，より発信しやすい環境を整えた。

・**ポスター等による情報発信**　セミナーやプログラムの広報ポスターを都度異なったデザインにすることを継続して情報発信を行った。（参考資料 3-2-2）

・**学内への広報**　学内ではポスター掲示が有効であることから，教員および学生用掲示板用には紙媒体にて広報を行っている。また，ウェブ情報共有ツール「東北大学ポータルシステム」を活用し，学内の教職員への情報発信及び各種セミナー等への広報を行った。

(3) 評価及び課題

・**広報活動の改善と推進**　各キャリア別プログラムの参加および展開事業としての広報にも力を入れ，チラシ・パンフレットをプログラム別に作成し（各 7,000 部），各セミナーや学会，他機関での講演等において配布した。広報手段の拡大の必要性が問われているものの，SNS の着手には至らず，次年度への課題を残すこととなった。

・**ホームページのユーザー分析**　昨年度課題とした大学教育支援センターホームページのユーザー分析には着手できなかったが，PDPonline の充実化に伴いサイト分析アプリケーションを導入し，視聴者数の分析を開始した。

2-4. 調査研究活動

(1) 目標

①　すでに実施した調査は，学会発表，論文，出版など成果を公表する。

・他の教育関係共同利用拠点及び広島大学高等教育研究開発センターと連携した大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究（大学管理職調査）は，秋に研究会を開催し，学会発表を行う。

・PFFP 研究は，日本型プログラムの在り方につながる成果の取りまとめを行う。

・CPD メンバーの研究として，大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育

効果に関する調査研究（立石），大学教員の授業準備に関する調査（今野）を年度内にまとめる。

②3 年目以降の研究課題として，高度教養教育に関する科研費の申請を行う。

(2) 実施状況

① 実施状況および成果

・**大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究（大学管理職調査）** 2013 年 7 月 27 日に「大学マネジメントに求められるもの―期待される能力と人材育成―」を東北大学東京分室で開催した。その後取りまとめて出版するには至っていない。

・**大学教員準備プログラム調査研究** 東北大学 高等教育開発推進センター，広島大学 教育学研究科，京都大学 高等教育研究開発推進センター，立命館大学 教育開発推進機構，一橋大学 学生支援センターキャリア支援室 大学院部門，北海道大学 高等教育推進機構の共催で「大学教員を目指す大学院生の全国交流会」を 2013 年 9 月 23 日に東北大学東京分室にて実施した。本交流会の目的は，(1) 各大学の大学教員準備プログラム等に参加している院生，または過去の参加者を集め，院生の目線からプログラムに対する提案をしてもらい，今後の大学教員準備プログラム等の取り組みを改善する手がかりとすること，(2) 大学教員というキャリアに対する準備として必要なことを院生の目線から探り，大学教員準備プログラム等の共通項を明確にすることとした。上記 6 大学から，それぞれ大学教員準備プログラム経験者 1 名とプログラム主催者 1 名が参加し，各大学のプログラムの内容と位置づけを共有した後，各大学のプログラム経験者によるプログラムへの評価，提案と，プログラム主催者からのコメントを発表した。引き続いて行われたディスカッションと意見交換では，各大学から忌憚ない意見や提案が示され，主催者側の運営意図や課題意識と突き合わせながら議論を行うことで，各大学の置かれている状況の共通性や特殊性などが際立ち，有意義な議論が展開された。各大学の性格やニーズにより，求められるプログラムの在り方が異なることが明らかになったが，その一方で，他大学の実践から学ぶ側面も大きく，こうした全国的な意見交換や集約の場の重要性を改めて認識する結果となった。詳細については，「東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム 2013 年度報告書」を参照されたい。

・**大学教員による授業準備に関する調査** 2011 年度に実施した質問紙調査の結果をまとめ，その一部を，国際会議（IEEE Region 10, Humanitarian Technology Conference 2013）にて発表するとともに，CAHE TOHOKU Report 53「大学教員による授業準備に関する調査報告」として刊行した。調査結果からは，例えば授業内容の決定においては，職階や専門分野により異なる方法がとられており，文系分野では，授業設計に取組む場合，「何を教えるか」が出発点になる傾向にあるのに対し，理系分野では，学科・研究科の要請や指針，合議の内容の確認，まわりの教員とのコミュニケーションや，前任者の授業内容を踏まえることから始め，「どう教えるか」を中心に設計に取り組む傾向にあることを念頭におく必要があることなどがわかった。次年度も，引き続き，調査結果の分析と，論文の執筆，発表を予定している。

・**震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究** 『高等教育研究叢書 126 災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果』（広島大学高等教育研究開発センター）として共著で刊行した。

・**知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究** 学外の研究者も含め，科学研究費（基盤 B）で進めていた「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究」（2011-13 年）は，成果報告書を 2013 年 6 月に

刊行した。

・**教育・学習マネジメントに関する調査研究**　平成 25（2013）年度高等教育の開発推進に関する調査・研究経費による「外国語教育の質保証を促す教育マネジメントの開発に関する調査研究」を，高等教育開発推進センター語学教育室及び東北大学国際文化研究科所属の教員とも協力して実施した。外国語教育のマネジメントとして，(1) 効果的マネジメントのための組織体制，(2) 外国語教育における到達目標の設定，(3) 教員の能力開発と評価（処遇）の実施状況，の 3 つの観点から，広島大学外国語教育研究センター及び筑波大学外国語センターを訪問して関係者への半構造化インタビュー及び関連文献の収集を行った。外国語教育マネジメントとして一定の成功を収めている事例として，外国語教育を専門とする教員集団をセンター化して理念の共有化を進めるとともに，カリキュラム設計や時間割作成を主導した上で，教養教育の企画・実施組織との信頼醸成・協働を進めていることが明らかとなった。調査結果は，東北大学高等教育開発推進センター2014 年度紀要に報告される予定である。

②次期の拠点活動を視野に入れ，学内外の研究者による「グローバル化社会におけるコンピテンシーを具体化する高度教養教育の開発研究」（基盤研究 A, 2014-17 年）を申請し，採択された。

(3) 評価及び課題

・ほぼ初期の目標を達成したが，大学管理職調査については，大学マネジメントの在り方についての関心と必要性が高まっているにもかかわらず，十分に成果を発信していない。2014 年度以降に取り組むことが必要である。

2-5.　プログラム開発・実施

2-5-1.　大学教育力開発事業（高度教養教育）

『大学教育力開発事業（高度教養教育）』として，国際問題などを取り上げ，留学生と日本人学生とが共に学ぶ国際共修科目，専門分野全体を統合する視点を身に着ける分野総合科目，社会科学と自然科学双方のアプローチからの複眼的思考を培う学際・融合科目，科学的知見だけでは解決できない複雑な問題解決に取組むトランス・サイエンス科目，その他，高度教養教育にふさわしい内容を備えた科目となる授業開発の学内公募を行った。8 部局より計 11 件の申請があり，内 10 件（総額 3,880 千円，内 3 件 282 千円は 2014 年度継続実施）を採択した（参考資料 3-1）。これらの成果は，東北大学高等教育開発推進センター2014 年度紀要に成果報告される予定である。

2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）

2013 年度 東北大学 大学教員準備プログラムには，文学研究科 5 名，教育学研究科 1 名，法学研究科 1 名，経済学研究科 1 名，東北アジア研究センター1 名の計 9 名が参加し，下記に示す達成目標，プログラム活動に取り組んだ。

【達成目標】

- 生涯にわたり専門性を高めるために，効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割，仕事を理解し，展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ，自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

【プログラム活動】

- オリエンテーション「PFFP／NFP へようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計する–授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる–マイクロティーチング」
- セミナー「諸外国の高等教育を知る」
- バークレー集中コース
- ワークショップ「自分の授業をみつめる–模擬授業」
- リフレクティブ・ジャーナルの作成
- 先達教員による個人コンサルテーション
- 課題論文の提出

図表 1　PFFP のスケジュール

	日時	概要
オリエンテーション「PFFP/NFP へようこそ」	2013 年 10 月 19 日（土）10：30～17：00	参加者顔合わせ, プログラムの目的, 大学教育の課題と教員の役割に関する講義，比較教育学の視点を組み入れたワークショップ，本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など
授業の基礎知識を得る「大学の授業を設計する—授業デザインとシラバス作成」	2013 年 10 月 24 日（木）15：00～18：00	大学の授業における目標・活動・評価について，事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える
先達から学ぶ「授業を見る聞く学ぶ」	2013 年 11 月～12 月	授業経験豊かな教員の授業を参観し，授業後のディスカッションを通して，教育活動について考えるヒントを得る
自分の授業をみつめる—マイクロティーチング	2013 年 11 月 15 日（金）13：00～17：00	一人 7 分間のマイクロティーチングの実践とファシリテータ, 他の参加者からのフィードバック, および授業リフレクションの実施
自分の授業をみつめる—模擬授業	2014 年 2 月 12 日（金）13：00～18：15	一人 17 分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック，および授業リフレクションの実施
比較の視点をもつ「大学教育制度と役割について考える～日・米の比較」	2014 年 2 月 18 日（火）14：00～17：30	アメリカの高等教育について学び，バークレー集中コースに向けて準備をする。参加者同士のディスカッションを通して，日本の高等教育との比較を行った
バークレー集中コース出発前案内	2014 年 2 月 18 日（火）16：30～17：30	バークレー集中コースに先駆けて，出発前案内として旅程, 日程の確認, 危機管理と質疑応答を実施した
先端的 PFFP で学ぶ「バークレー集中コース」	2014 年 2 月 23 日（土）～3 月 2 日（日）	カリフォルニア大学バークレー校において, 1 週間の集中コースに参加
先達教員コンサルテーション	2014 年 3 月 14 日（金）14：00～18：00	先達教員による個人コンサルテーションとグループディスカッション
参加報告会／修了証授与式	2014 年 3 月 21 日（金）13：00～17：00	参加者による報告と，プログラム OB との質疑応答，先達教員からの激励

【評価および課題】

参加者へのアンケート調査の結果からは，プログラムは概ね有効であったとの評価を受けた。特に今年度から本格導入に取り組んだ「授業を見る聞く学ぶ」（授業参観）と「先達コンサルテーション」に対する評価が高く，昨年度と比較し，特にリフレクティブ・ジャーナルの執筆，先達との関わり合いで評価が大幅に改善した。しかしながら，バークレー集中コースにおいて，なぜバークレーに行くのか，海外の大学で研修を受けるという活動が，本プログラムにおいて，どういう位置づけであるのかについて十分に理解されていない様子が観察された。これについては，海外研修出発前に「諸外国の高等教育を知る」と題してセミナーを実施し，なぜ外国から学ぶのかについて講義やディスカッションを行っているが，それが効果的に位置づけられていない可能性が高い。また，国内セミナーのみでも充分学びがあったとの評価がなされており，それ自体はよい兆しであるといえる。しかしながら，「アメリカの大学に就職するわけでもないのに」「GSI制度の話が多すぎる」というコメントもみられ，自分の置かれている環境の相対化や，グローバルな視点での「市場」における自身のキャリア，訪問先の取り組みを通して自大学のしくみを見直す機会の提供といった側面が共有しきれていなかったことが推測される。これらのことから，来年度は，バークレー集中コースの位置づけについての説明をもう少し丁寧に実施する必要性が伺われた。

2-5-3. 東北大学 新任教員プログラム（Tohoku U. NFP）

2013 年度 東北大学 新任教員プログラムには，農学研究科准教授 1 名，同助教 1 名が参加した。また，メルボルン大学の講師を招いての合宿セミナーには，全国から 5 名が参加した。NFP は，基本的に PFFP と合同で実施し，海外研修は行わずに，国内合宿セミナーに参加するという内容となっている。

【達成目標】

- 生涯にわたり専門性を高めるために，効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割，仕事を理解し，展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ，自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

【プログラム活動】

- オリエンテーション「PFFP／NFP へようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計する–授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる–マイクロティーチング」
- 国内合宿セミナー「教育を科学する（メルボルン大講師による）」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる–模擬授業」
- リフレクティブ・ジャーナルの作成
- 先達教員による個人コンサルテーション
- 課題論文の提出

【評価および課題】

参加者からのプログラムに対する評価は高かったが，参加者数が少なく，期待していたような新任教員同士の情報交換や交流が十分に行えなかったことについて，改善してほしい旨が示された。前年度までメルボルン大学で実施していた 1 週間の集中コースに代えて，メルボルン大学の講師を日本に招いての 2 泊 3 日の国内合宿セミナーを開催した。この合宿セミナーは，全国公開とし，他の大学から 5 名の教員が参加するとともに，過年度の PFFP／NFP 経験者 2 名にファシリテーターとしての参加を依頼した。

国内合宿セミナーの参加者へのアンケート調査では，全てのセッションにおいて，全員が「有益だった／とても有益だった」と回答しており，実施時期や国内合宿形式での実施についても好評であったことがわかった。また，懸念していた参加者の負担感については，事前課題については 1 名，セッションの内容・分量に対しては 3 名が負担を感じたとの回答を寄せていた。セッションの内容や分量については，過度な負担にならないように配慮して設定していく必要があるといえる。自由記述の内容からは，ファシリテーターの手厚いサポートが内容の理解に役立ったことや，他の参加者との交流が学びに影響したことが伺われた。また，海外から講師を招いての国内合宿という形式についても，国際的感覚が得られる，英語力について自己研鑽の機会になる，日本人教員より素直に意見交換ができるといった指摘が得られた。

2-5-4．履修証明プログラム　大学教育人材育成プログラム（EMLP）

2011 年度から始まった大学教育マネジメント人材育成プログラムは，2013 年度から新たに履修証明プログラムに再編し，履修期間も 2 年間（計 120 時間以上）とした。本プログラムでは，各種セミナー・ワークショップで大学教育の教育・学習活動やマネジメントに関する知識を広く学ぶこと，各参加者が各所属機関の教育改善・改革の「課題」を持ち寄り，相互に情報交換しながら議論を行うことを通して，改革案を有効で実現可能なものに高めて実際に実施すること，その経験を通して各機関レベルで改善・改革を担えるリーダーへと成長していくことを目指している。

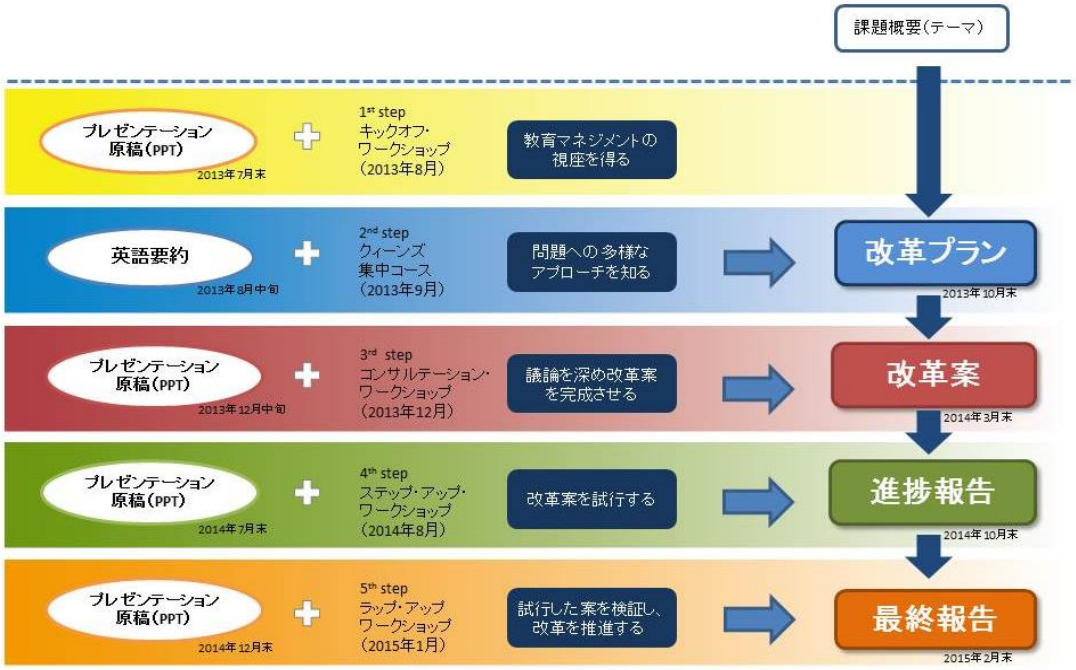
そのために，本プログラムでは，セミナーを通して，高等教育の動向や教育・学習のマネジメントについて基礎的・発展的に学ぶとともに，ワークショップにおける議論を通して，参加者の改革案が実行可能なものになることを企図して構成している（図表 2）。

本プログラムは，2013 年 8 月から 2015 年 3 月までの 2 年間の実施期間となる。参加者は，教員 4 名，職員 4 名の計 8 名（東北大学 1 名，東北大学を除く国立大学 1 名，公立大学 4 名，私立大学 2 名）が参加している。プログラムの活動内容・日程等について以下に示す（図表 3）。

【プログラム活動】

- 1st Step：　キックオフ・ワークショップ～教育マネジメントの視座を得る～
- 2st Step：　Queen’s – Tohoku Joint Program　～問題への多様なアプローチを知る～
- 3rd Step：　コンサルテーション・ワークショップ～議論を深め改革案を完成させる～
- 4th Step：　ステップアップ・ワークショップ～改革案を試行する～
- 5th Step：　ラップアップ・ワークショップ～試行した案を検証し，改革を推進する～

図表２　大学教育人材育成プログラム（EMLP）の構造と進め方



図表３　プログラムのスケジュール

プログラム名	日程	概要
キックオフ・ワークショップ	2013 年 8 月 2 日（金）～8 月 4 日（日）	プログラム趣旨説明，カナダ教育事情，データの分析・解釈の技法，大学教育論，リーダーシップと意思決定等に関するセミナー受講，及び参加者の課題の発表とディスカッション。カナダ派遣に関する連絡等
Queen's-Tohoku Joint Program	2013 年 9 月 21 日（土）～9 月 29 日（日）	カナダ・クィーンズ大学における 1 週間の集中コースに参加し，教授学習やマネジメントに関するセミナー受講。また，参加者各自の課題について現地調査を行い，課題の整理や問題分析。
コンサルテーション・ワークショップ	2013 年 12 月 21 日（土）～12 月 22 日（日）	大学管理運営論，データに基づく教育改善に関するセミナー受講。また，クィーンズでの学習を踏まえて作成した改革プランの発表とディスカッション。
ステップアップ・ワークショップ	2014 年 8 月 23 日（土）～8 月 24 日（日）	比較から見る世界の高等教育，SD/PD 論に関するセミナー受講。また，参加者各自が取り組んできた改革の進捗状況の発表とディスカッション。

ラップアップ・ ワークショップ	2015 年 1 月 11 日（日） ～12 日（祝・月）	これまでの改革案に関するこれまでの成果と課題を整理するとともに，さらなる改革推進に向けた今後の活動の展望について発表しディスカッション。

【評価および課題】

EMLP は，2011 年度からの 2 年間におけるプログラム提供の経験を踏まえつつ，2 年間の履修証明プログラムとして学習時間及び内容を拡大・発展させたことで，各参加者が所属機関で直面する課題を真正面から深く掘り下げて議論し，フィージビリティの高い改革課題に鍛え上げることが可能となった。また，その結果，大学における教育・学習の実践と改善，マネジメントやリーダーシップのありようについて，参加者が広範かつ多面的に学ぶ機会が充実し，アプローチすることが可能となった。

こうした点から，プログラムの内容や運営に対する参加者からの評価は高い（各ステップ後のアンケート結果)。とりわけ参加者による自由記述内容からは，大学の教育学習及びマネジメントの改革・改善に造詣の深いアドバイザー3 名から厳しくも的確なコメントをもらい，さらに参加者同士でも互いの課題を共有し議論を繰り返すことで，各参加者が自らの改革課題を深く掘り下げていくだけの力や姿勢を獲得していることが判断される。

運営面では，課題であったプログラム開始の早期化について，8 月初旬にキックオフ・ワークショップを行うことで，参加者の 2nd ステップ (9 月後半) への準備に余裕を持たせることができ，それによって運営体制の負荷も減少させることができた。

EMLP の履修証明化に際しては，コンセプトの明確化を図り，各ステップの目的について記述改定作業を行った。2012 年度に「負担軽減のため，（コンサルテーション・ワークショップにおける）発表言語を日本語に統一し，部分的に負担が軽減されたが，英語能力を発揮する機会が減少した」という反省から，本年度は，クィーンズ大での調査について，出発前から各参加者がクィーンズ大学のファシリテーターと英語でメールのやり取りを行うことを積極的に促し，その上で現地調査を行うようにした。また，クィーンズ大でのディスカッションでも参加者は英語での発言を積極的に行い，かなり改善が見られた。

参加者らは，多忙な日常業務の傍らメーリングリストや SNS を用いて相互に交流を図り，各自の課題を含む関連情報を交換し合い助け合うなど，広い意味でのプログラムの目標達成に向けて積極的に取り組む姿勢が観察された。2 年間という履修期間のなかで，参加者の着実なステップアップが目に見える形で表れてきている。

前述の通り，参加者らからのプログラムへの評価は全体的に高いものの，参加者各自が取り組む改革課題が多様であるために，120 時間という限られた時間内で，課題解決に直接的に応用可能なセミナー・ワークショップを提供することには自ずと限界もある。こうしたプログラム内容の成否については，2 年目（2014 年度）の終盤に参加者からの総合的評価を得て検討する必要がある。

2-5-5. 大学職員能力開発プログラム（SDP）

2013 年度は若手職員を対象としたセミナーの企画・実施に重点をおき，以下 3 つのセミナー・ワークショップを行った。

「若手職員のための大学職員論」（2013 年 7 月 13 日開催）では，東北圏の大学で経験を積んだ 3 名の中堅職員が前半セミナーで話題提供し，後半ワークショップで若手職員が今後どのようにキャリア形成し，学び働いていけばよいのかを考える機会を提供した。同企画の第 2 段となる「若手職員のための大学職員論（2）～先達からのメッセージ～」（2014 年 10 月 26 日開催）では，東北圏の課長レベルの大学職員 3 名を講師に迎え，普段交流することの少ない他大学の先達の経験に触れ，ワークショップを通じて若手職員のキャリアを形成し，学び，行動していけばよいのかを考える機会を提供した。また，学内職員を対象とした「私のなりたい東北大学職員」（2014 年 1 月 11 日開催）では，本学職員に求められる自らが主体的に学び成長していく力の獲得支援として，ワークショップを行った。

これら 3 つのセミナーは，東北圏 6 大学 7 名（「若手職員のための大学職員論」），東北大学 4 名（「私のなりたい東北大学職員」）の若手・中堅職員とともに企画・運営し，自らがファシリテーターとしても参加してもらうことで，東北圏の大学職員の成長に寄与するのみならず，各メンバーの所属機関でも SDP が企画・運営ができるよう，人材育成の機会としての役割も果たした。

過去 2 年間の SDP と比較すると，今年度は若手・中堅職員に対象を絞ったことで継続的・実践的に実施することができたが，まだ体系的内容や必要とされる能力など構造的な展開ができてはいない。次年度は，マネジメントが絡む係長レベル以上の職員を対象とし，他のキャリア別プログラムや調査研究等において議論を進めているリーダーシップについての要素を取り入れたプログラムを展開する予定である。

2-5-6．PD（専門性開発）セミナー

・**コンセプトと構造の明確化**　PD セミナーの企画にあたっては，キャリア別をベースに提供プログラムを整理し，これまでの「PD（専門性開発）分野一覧」（参考資料 3-2-1）にバランスよく企画・配置し，セミナー構成を精選する方向で一層の徹底を図った。

・**実施状況**　2013 年度は，計 35 件のセミナーが実施された（参考資料 3-2-2）。PD 分野一覧のゾーン別では，高等教育のリテラシー形成関連（コード：L）が 9 件，専門教育での指導力形成関連（各専門分野）（コード：S）が 3 件，学生支援力形成関連（コード：W）では保健管理センターが主体となって継続的に実施している「健康科学セミナー」4 件含め計 7 件，マネジメント力形成関連（コード：M）が 10 件，枠組み外として昼休みの時間帯に短時間でスポット的に実施した「ランチタイム FD」が 2 件，また，共催を含めその他が 4 件であった。2013 年度は，大学マネジメント，リーダーシップ，IR など，大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究でも提議されている課題を取り上げたセミナーを開催した他，単発で行った SDP（職員能力開発プログラム）など，多様なセミナーの提供をマネジメント枠で実施した。

・**参加者による評価**　実施セミナー40 件の内，25 件については受講者アンケートによる評価データが収集された（参考資料 3-2-3）。受講者数で重みづけた受講満足度の平均値は 3.55 点（4 点満点）であり，昨年度に続き高い評価を得た。PD セミナーの評価は，4 ゾーンで開講されるすべてを同一の項目で評価しているため，「新しい技術について学んだ」の数値がやや低いが，技術を重視したセミナー（8 件）での数値は，3.61 であり，満足度も 3.83 と十分な効果を上げていると判断できる。

・**次年度以降に向けた課題**　専門性の構造とキャリア・ステージをふまえた PD プログラムの体

系化は，4 年間を通じて進展し，アンケートの結果と実際に参加している運営スタッフの評価によって調整を図るスタイルがほぼ確立した。一方では，大学教育を通じた学習成果の検証が問われている中で，もっとも重要な専門教育での指導力形成関連（コード：S）が十分な展開を見ていないという課題があり，調査研究などの理論的活動の強化も含め，次年度以降取り組んでいく必要がある。

2-5-7．PDPonline（専門性開発プログラム動画配信サイト）

PDPonline は，東北大学インターネットスクール（ISTU）の公開動画機能を用いて配信を実現している。各セミナーの動画は，トピックの内容毎にチャプターとして分割し，10～15 分前後の動画として順を追って再生できるように編集している。2012 年度には 6 つのコンテンツを公開していたが，2013 年度には，コンテンツの更新や追加を行い，19 件の公開を実現した。公開しているンテンツを図表 4 に示す。

図表 4　PDPonline における動画コンテンツ一覧（2014 年 3 月）

	セミナー名	講師（所属は講演当時）
1	世界の高等教育政策	杉本 和弘 准教授 （東北大学高等教育開発推進センター）
2	大学教育論： 教養と専門の二項対立を越えて	小笠原 正明 教授 （北海道大学名誉教授）
3	認知科学と学習の原理・応用	佐伯 胖 教授 （信濃教育会教育研究所長，東京大学名誉教授）
4	Designing Your Courses for More Significant Learning	Dee Fink 教授 （高等教育コンサルタント）
5	授業作り：準備と運営	邑本俊亮 教授 （東北大学 災害科学国際研究所）
6	研究不正と学問的誠実性	羽田 貴史 教授 （東北大学高等教育開発推進センター）
7	授業デザインとシラバス作成	串本 剛 講師 （東北大学高等教育開発推進センター）
8	大学教授職とはどのような職業か	羽田 貴史 教授 （東北大学高等教育開発推進センター）
9	Classroom English: Pronunciation and Expressions	トッド・エンスレン講師 （東北大学高等教育開発推進センター）
10	Classroom English: Pronunciation and Expressions	ヴィンセント・スクラ 講師 （東北大学高等教育開発推進センター）
11	Finding Common Ground	Sophie Arkoudis 准教授 （メルボルン大学高等教育研究センター）
12	Managing internationalisation	Richard James 教授 （メルボルン大学）
13	IR を活用した教育改善へのステップ	鳥居 朋子 教授 （立命館大学）
14	データに基づく教学改革をどのように進めるか	山田 剛史 准教授 （愛媛大学）
15	リーダーシップと意思決定	吉武 博通 教授 （筑波大学）
16	オーストラリアにおける研究倫理政策と実践	Marc Fellman 教授 （豪州ノートルダム大学）
17	研究と実践のインタラクション	山田 礼子 教授 （同士社大学）

18	学術分野の男女共同参画のポジティヴ・アクションの課題	辻村 みよ子 教授 （東北大学大学院法学研究科）
19	研究者育成と研究倫理教育の課題	市川 家國 教授 （信州大学）

図表 5　PDPonline のトップページ（http://www.cpd.he.tohoku.ac.jp/PDPonline/）

【評価および課題】

2013 年度は，前年度からの課題であった，講演依頼時における動画化についての説明と依頼項目の明確化，動画化マニュアルの配布，著作権への配慮を依頼する文書の配布，運営担当者用のチェック項目の作成等を実施することができ，スムーズに動画の撮影から編集，公開を実現することができた。PDPonline については，他大学の教職員からの問い合わせも多く，「どのようなしくみで実現しているのか」，「これらの動画を学内でどのように利用しているのか」，「これらの動画を利用して，反転授業スタイルの教職員研修を実施してみたい」といった反響があった。2012 年度には担当者と学生アルバイトで実施していた動画コンテンツの編集について，2013 年度からは外部業者に一部を委託し，作業の効率化を図ることができた。一方で，臨機応変で柔軟な編集作業がやや困難になったことや，編集データが手元に残らないという欠点も明らかになった。次年度はこれらの課題を踏まえて，PDPonline を継続，発展させていくための体制の見直しを行う必要があるといえる。

2-6.　研究成果の発表・出版

(1) 目標

① 研究的出版及び主に実践的な内容を中心にした PD ブックレットを継続して刊行する。

② 研究成果を学会や研究会等で発表し，社会に還元する。

(2) 実施状況

・研究成果の出版　2013 年度は，高等教育ライブラリ No.8『「書く力」を伸ばす―高大接続にお

ける取組みと課題』は，第18回東北大学高等教育フォーラム「「書く力」を伸ばす―円滑な高大接続のために―」（2013年5月24日開催）の記録および，より議論を深める内容を加えて展開された叢書として刊行することができた。また，大学教員調査研究（2010-2012年）の延長として，北米最大の教育開発専門職団体（POD: Professional and Organizational Development Network in Higher Education）より，教育開発担当者に求められる役割，知識・スキル，部局や教員との関係づくり，大学の種類に対応した取り組み，教員を支援するプログラムの具体例を詳しく解説理論と実践が融合した教育開発の基本図書である「A Guide to Faculty Development」の翻訳本「FDガイドブック―大学教員の能力開発」（玉川出版，2014年2月発行）が出版された。

・**ブックレットの刊行**　これまでの大学教員調査研究や大学管理職調査研究等およびプログラム開発・実施においても論点となっていた大学教職員のリーダーシップについて，豪州連邦教育省学習教育局によって刊行された「*A Handbook for Executive Leadership of Learning and Teaching in Higher Education*」の全訳に解説を加え，PDブックレットVol.5「高等教育における教育・学習のリーダーシップ」として刊行した。学内准教授以上の教員および課長補佐級以上の職員，全国の高等教育機関等，各種セミナー等で配布した。

・**学会・研究会・講演等の活動**　2013年6月1・2日に，「教育から学習への転換」を統一テーマに大学教育学会第35回大会（大会委員長：羽田貴史）を東北大学にて開催し，高等教育開発推進センター教員を中心に構成された大会企画委員会によって，公開シンポジウム「教育から学習への転換を支えるもの―カリキュラム・空間・マネジメント―」の企画・実施のほか，東北大学における多様な教育実践（自然科学総合実験，英語多読法，留学生向けアカデミック・ライティング）に関するワークショップ等も開催した。

また，2011年度から教育関係共同利用拠点及び広島大学が共同で実施してきた管理職調査（大学の組織運営とマネジメント人材育成調査）の成果に基づく研究会「大学マネジメントに求められるもの―期待される能力と人材育成―」を東北大学東京分室にて開催した（2013年7月27日）。研究会では，当該調査結果の分析，同種関連調査の結果報告，海外の取組事例の報告を行い，議論を行った。

さらに，PFFPについては，大学教員準備プログラム等を実施している東北大，広島大，京都大，立命館大，一橋大，北海道大において当該プログラムに参加している大学院生（過去参加者含む）が参加しての「大学教員を目指す大学院生の全国交流会」を東北大学東京分室にて開催した（2013年9月23日）。プログラムに対する院生からの提案に基づくプログラム改善に向けた議論を行い，大学教員準備プログラムに求められる共通項目についても検討を行った。

その他，学外からの依頼に応じて，各種セミナー・講演会にて発表や講演を行っている（参考資料3-5）。

(3)評価及び課題

2013年度は，拠点事業専任教員2名が転出したこともあり，新規調査研究は推進されなかったが，継続中の活動の考察・成果については，EMLPをはじめ各キャリア別プログラムやPDセミナー等へ反映・提供したことが評価できる。これまで実施してきた調査研究活動（研究会開催含む）を，一対一の関係に限られた成果ではなく，総合的に媒体を通して発表できており，評価できる。また，毎年今日の大学教育で課題となっている多様なテーマでPDブックレットの刊行を行っており，学内外からニーズも高く，評価されている。

2-7. 他機関との連携

2011～2013 年まで 4 年間の事業の蓄積から，海外との連携，他の教育関係共同利用拠点との連携，学内との連携が順調に進み，大学教職員の各キャリア・ステージに対応したプログラムを構造的に提供することができた。また，科研費で調査研究を推進している「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究」をはじめした行動規範教育では，大学間連携事業「研究者育成の為の行動規範教育の標準化と教育システムの全国展開」（信州大学他）との連携により，ICT を活用した「CITI Japan プログラム」の提供を開始し，また，日本学術振興会が進める行動規範教育の普及および発展への連携・協力を行った。学士課程教育における学習成果測定開発推進として，2012 年度より大学 IR コンソーシアム（同志社大学・北海道大学他）に参加しており，全国国公私立 20 大学が加盟する同組織において，IR の推進を通じて連携大学間の「相互評価」を活かした教育の質保証の枠組み整備に貢献している。

2-8. 2014 年度の課題

1. 計画の目標及び運営の基本方針

(1) 拠点事業の最終年度として，各活動の質を高め，まとめを行うとともに，6 年目以降の拠点事業を進める新たな構想を検討する。

(2) 特に，取り組むべき重要課題は次の通り。

①キャリア別をベースに提供プログラムを整理し，4 ゾーン・14 カテゴリーにバランスよくセミナー類を配置し，体系的に提供する。

②履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）を完了し，その成果をまとめ，汎用性のあるプログラム案を作成する。

③大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP）の成果をまとめ，全国的に共有できるプログラムの指針をまとめ，理論・実践の双方を含む図書を出版する。

④メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを含む新任教員プログラム（New Faculty Program; NFP）を継続する。

⑤東北大学新任教員研修の内容改善を図り，実施する。

⑥セミナーの動画化と配信を拡大する。

⑦他の教育関係共同利用拠点，大学間連携共同教育推進事業（信州大学他）「CITI Japan プロジェクト」，大学 IR コンソーシアムとの連携を強め，大学教育学会大会への支援など，全国的な大学教育改革への寄与を引き続き行う。

⑧大学管理職調査など現在進行中の研究をまとめ，その成果を学会等で発表する。

⑨平成 27（2015）年度以降の特別経費プロジェクト（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）及び，次期教育関係共同利用拠点事業の構想を検討し，申請する。

参考資料

3-1．大学教育力開発事業(高度教養教育)

大学教育力開発事業（高度教養教育）の公募要項

１． **公募事業の目的**　学士課程教育及び大学院教育における高度教養教育を開発し，東北大学の教育を充実させるとともに，全国の大学にモデルとなる教育実践を提供すること

２．**高度教養教育の内容**

専門分野を超えた鳥瞰力，問題発見・解決力，異文化・国際理解力，コミュニケーション力，リーダーシップ，組織力を育成する目的を持ち，内容および方法的に次のような取組を含むもの

(1) 内容

・国際問題などを取り上げ，留学生と日本人学生とが共に学ぶ国際共修科目

・専門分野全体を統合する視点を身に着ける分野総合科目

・社会科学と自然科学双方のアプローチからの複眼的思考を培う学際・融合科目

・科学的知見だけでは解決できない複雑な問題解決に取組むトランス・サイエンス科目など

・その他，高度教養教育にふさわしい内容を備えた科目。

(2) 方法

・建設的協働学習，問題解決型学習，課題探求型学習など学生の主体的能動的学習を取り入れたもの

３．**事業の対象となる科目**

(1) カテゴリー1

現在開講されている授業科目（全学教育科目，学部専門教育科目，大学院教育科目を問わない）において，上記２に該当し，調査研究，教材の開発，資料収集等事前準備を行い，授業の改善と充実を目的とするもの

(2) カテゴリー2

現在は開講されていないが，平成 26 年度第 1 セメスター以降開講予定の授業科目（全学教育科目，学部専門教育科目，大学院教育科目を問わない）において，上記２に該当し，調査研究，教材の開発，資料収集等事前準備を行うもの

(3) カテゴリー3

正規の教育科目ではないが，上記２に該当し，平成 25 年度に実施する教育プログラム（例：学生による国内外の訪問交流学習等）

４．**応募締切**　平成 25 年 11 月 18 日（月），書類審査、ヒアリングを経て 11 月末決定

５．**応募資格**　本学教員で，東北大学高等教育開発推進センター教員との共同事業であること。なお，高等教育開発推進センターとの共同体制についてご相談の方は，大学教育支援センターにてサポートします。(要問合せ)

６．**応募要領**　指定した書式に必要事項を記入して学内便あるいはメールで提出すること

７．**課題の採択について**　応募された課題についてヒアリングを含めた審査を行い，可否を決定する。全学で 8 件程度，1 件あたり 50 万円程度の開発・実施費を提供する。予算は年度内に執行の上，具体的な成果等について報告書を提出すること。

８．大学教育力開発事業（高度教養教育）　採択科目一覧

	申請者氏名	職　名	所　属	事業名称	H25 年度 配分予定額 （円）
1	村上　祐子	准教授	文学研究科 国際交流室	科学を論理的に伝えあうための文系向け授業開発	500,000
2	出江　紳一	教授	医工学研究科	「コーチング概論」授業開発事業	498,000 H25:384,000 H26:114,000
3	杉本　和弘	准教授	高等教育開発推進センター	地域連携を活用したフィールドワーク型国際共修科目の開発	400,000
4	水松　巳奈	助手	グローバルラーニングセンター	韓国における短期海外研修（スタディアブロードプログラム）開発	490,000
5	石井　誠一	准教授	医学系研究科	「よくある症状から患者さんへのアプローチの仕方を学ぼう」:　医学科１年次の新しい融合型 PBL カリキュラム導入	500,000 H25:360,000 H26:140,000
6	工藤　成史	教授	工学研究科 応用物理学専攻	「生命倫理」、「医の倫理」のネット配信を目指した映像記録	500,000 H25:472,000 H26:28,000
7	本江　正茂	准教授	工学研究科　都市・建築学専攻	スタジオ形式によるデザイン教育先進事例調査	500,000
8	猿渡　啓子	教授	経済学研究科	国際共修科目によるコンピテンシー開発型授業の調査	492,000
				総額	3,880,000

※平成 25 年度配分予定額：3,598,000 円

※平成 26 年度配分予定額：　282,000 円

3-2. PDP（専門性開発プログラム）

3-2-1. PD（専門性開発）分野一覧

ゾーン	カテゴリー	エレメント
高等教育のリテラシー形成関連 コード：L (Literacy)	高等教育論 L-01	高等教育の歴史，大学の理念，大学制度 ・ 組織，入試制度，関連法制，管理運営，国内外の動向など広く高等教育に関する知識・教養に関するもの
	大学教員論 L-02	大学教師の役割 ・ 責務，倫理，キャリア形成など大学教員に関する知識
	教育内容 ・ カリキュラム論 L-03	教養教育論，カリキュラム論など教授する教育内容の教育論に関するもの
	教授技術論 L-04	授業の設計，シラバスの書き方，学習と教授の心理学，教育測定の原理と方法，プロジェクトベースラーニングの進め方，論文・レポート執筆の指導など教授技術に関するもの
専門教育での指導力形成関連 （各専門分野） コード：S (Specialty)	学習指導法 S-01	専門分野の学習方法の指導法
	実験指導法 S-02	実験の計画，準備，実施，結果の整理，施設 ・ 設備 ・ 機器類の使用，危険の防止，倫理的ガイドライン等についての指導法
	研究指導法 S-03	研究テーマの設定方法，関連文献の検索方法，プレゼンテーションの方法，論文のまとめ方，研究費の申請方法等についての指導法
学生支援力形成関連 コード：W (Health & Welfare)	学生論 W-01	現代学生論，大学生の発達と学習，学生の生活問題，学生理解とカウンセリングなど学生理解と指導に関するもの
	学生相談 W-02	大学コミュニティへの適応支援の技術，カウンセリングの基礎,コンサルテーションの基礎，グループワークの基礎，人間関係調整法等の指導
	キャリア教育 W-03	進路選択の支援方法，キャリア形成の支援方法，経済的自立の指導
	健康教育 W-04	健康な生活習慣形成の指導法，趣味や余暇活用の指導法
マネジメント力形成関連 コード：M (Management)	組織運営論 M-01	大学の管理運営，大学のリーダーシップ論，危機管理
	大学人材開発論 M-02	FD/SD 論、教職員開発プログラム作成，キャリア・ステージ論
	教育マネジメント M-03	質保証，入口管理，カリキュラム・マネジメント，出口管理

3-2-2. PD セミナー実施一覧

No.	開催日	事業名	ポスター
高等教育のリテラシー形成関連　コード：L（Literacy）			
1	5/24	「第 18 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える［10］）　「書く力」を伸ばす —円滑な高大接続のために—」 日時：2013 年 5 月 24 日（金）13:00～17:00（受付開始　12:30） 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 2 階マルチメディアホール 基調講演　「高校・大学の双方で育てたい『書く力』」 島田　康行（筑波大学アドミッションセンター長/教授） 現状報告 1　「阿部次郎記念賞を通じて見た高校生が好む文体と主題」 岩田　美喜（東北大学大学院文学研究科・准教授） 現状報告 2　「高等学校国語教育における書くことの指導」 古口　のり子（栃木県総合教育センター・指導主事） 現状報告 3　「小論文指導＋α　－E 判定からの合格だけでなく－」 鈴木　勝博（岩手県立黒沢尻北高等学校・教諭） 参加者数: 180 名(学内: 25 名・学外: 155 名)	
2	6/1	「大学教育学会公開講演・シンポジウム：教育から学習への転換を支えるもの」 日時：2013 年 6 月 1 日（土）14:10～18:10 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 2 階マルチメディアホール 基調講演　“Designing Your Courses for More Significant Learning” Dee Fink（高等教育コンサルタント） 報告 1　「カリキュラムの観点から」 松下　佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授） 報告 2　「学習環境の観点から」 山内　祐平（東京大学情報学環・学際情報学府・准教授） 報告 3　「マネジメントの観点から」 沖　裕貴（立命館大学教育開発推進機構・教授） 参加者数: 389 名(学内: 55 名・学外: 334 名)	
3	7/5-6	「Planning and Managing Active Learning in English」 日時：2013 年 7 月 5 日（金）～6 日（土） 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A306 講師：Laura Hahn（University of Illinois at Urbana-Champaign・Director） Todd Enslen（東北大学高等教育開発推進センター・講師） Daniel Eichhorst（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 参加者数: 21 名(学内: 15 名・学外: 6 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
4	7/19	「授業づくり：準備と運営」 日時：2013 年 7 月 19 日（金） 15:00～17:00 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 M401 講師：邑本　俊亮（東北大学災害科学国際研究所・教授） 参加者数: 25 名(学内: 19 名・学外: 6 名)	
5	7/26	「授業デザインとシラバス作成」 日時：2013 年 7 月 26 日（金）15:00～18:00 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 M401 講師：串本　剛（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 参加者数: 21 名(学内: 10 名・学外: 11 名)	
6	8/3	「大学教育論：教養と専門の二項対立を越えて」 日時：2013 年 8 月 3 日（土）10:00～12:00 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A101 講師：小笠原　正明（北海道大学・名誉教授） 参加者数: 56 名(学内: 25 名・学外: 31 名)	
7	10/8	「認知科学と学習の原理・応用」 日時：2013 年 10 月 8 日（火）13:00～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：佐伯　胖（信濃教育会教育研究所・所長） 参加者数: 25 名(学内: 15 名・学外: 10 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
8	11/20	「世界の高等教育政策」 日時：2013 年 11 月 20 日（水）15:00～17:00 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A401 講師：杉本　和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 22 名(学内: 15 名・学外: 7 名)	
9	11/29-12/1	「教育を科学する－先端的プログラムで学ぶ（兼）NFP 合宿セミナー」 日時：2013 年 11 月 29 日（金）～12 月 1 日（日） 場所：宮城蔵王ロイヤルホテル 講師：Sophie Arkoudis（University of Melbourne・准教授）， Chi Baik（University of Melbourne・講師） 参加者数: 16 名(学内: 11 名・学外: 5 名)	
専門教育での指導力形成関連（各専門分野）　コード：S（Speciality）			
10	9/6	「PBL 教育の原理と応用−公募制・教養教育 PBL 同志社大学プロジェクト科目を中心に−」 日時：2013 年 9 月 6 日（金）14:00～17:００ 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 M401 講師：山田　和人（同志社大学 PBL 推進支援センター・センター長） 参加者数: 36 名(学内: 19 名・学外: 17 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
11	12/12	「Classroom English: Pronunciation and Expressions」 日時：2013 年 12 月 12 日（木）16:00～18:30 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A401 講師：Todd Enslen（東北大学高等教育開発推進センター・講師） Vincent Scura（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 参加者数: 30 名(学内: 28 名・学外: 2 名)	
12	3/12	「ライティング支援者を育成する」 日時：2014 年 3 月 12 日（水）13:30～17:30 場所：東北大学青葉山キャンパス総合研究棟 101, 201, 205 講演 1「ライティング・センターで書き手を育てる」 佐渡島　紗織（早稲田大学ライティングセンター・教授） 講演 2「文系チューターが指導する理系英語アカデミックライティング: 駒場ライターズスタジオの実践」 片山　晶子（東京大学駒場ライターズスタジオマネージャー） 講演 3「分野横断的なアカデミック・ライティング指導　－留学生の日本語クラスでの実践から－」 佐藤　勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授） WS1「書き手を尊重するライティング支援」 佐渡島　紗織 WS2「IMRAD の英語科学論文を指導してみよう　－実践チューター訓練」 片山　晶子 WS3「論文の展開パターンを見出し、使ってみよう」 佐藤　勢紀子 参加者数: 68 名(学内: 51 名・学外: 17 名)	
学生支援力形成関連　コード：W（Health & Welfare）			
13	10/17	「キャリア指導の理論と実践」 日時：2013 年 10 月 17 日（木）15:00～17:00 場所：東北大学川内北キャンパス管理棟大会議室 講師：船津　静代（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・助教） 参加者数: 32 名(学内: 18 名・学外: 14 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
14	11/26	「発達障害のある学生と大学教育 －アスペルガー障害と注意欠如・多動性障害（AD/HD）を中心として－」 日時：2013 年 11 月 26 日（火）15:00～17:30 場所：東北大学川内南キャンパス教育学研究科 11 階大会議室 「発達障害の特性と課題」 川住　隆一（東北大学教育学研究科・教授） 「発達障害学生への支援」 田中　真理（東北大学教育学研究科・教授） 参加者数: 46 名(学内: 26 名・学外: 20 名)	
15	2/4	「学生支援の動向 －修学支援とキャリア支援－」 日時：2014 年 2 月 4 日（火）15:00～17:10 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 B 棟 B20 1 「大学における修学支援の現状と動向」 沖　清豪（早稲田大学文学学術院・教授） 「大学におけるキャリア支援の現状と動向」 望月　由起（お茶の水女子大学学生・キャリア支援センター・特任准教授） 参加者数: 21 名(学内: 12 名・学外: 9 名)	
マネジメント力　コード：M（Management）			
16	4/5	「米国高等教育における学習成果の診断の実際—米国での IR 実務経験から—」 日時：2013 年 4 月 5 日（金）13:30～17:00 場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 M401 講師：本田　寛輔（メイン大学オーガスタ校・Institutional Research Officer） 参加者数: 36 名(学内: 14 名・学外: 22 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
17	7/13	**「SDP 若手職員のための大学職員論」** 日時：2013 年 7 月 13 日（土）12:30～17:30 場所：東北大学附属図書館会議室 講演 1「大学職員としての『キャリア形成』とは」 石沢　友紀（岩手大学研究交流部国際課国際教育グループ） 講演 2「『学び』を支える大学職員になるために」 佐藤　恵（東北学院大学図書部図書情報課） 講演 3「『教職協働』の本質とは」 亀谷　純（宮城学院女子大学教育研究支援グループ入試広報担当） ワークショップ「ともに考える」 石沢　友紀 佐藤　恵 亀谷　純 杉本　和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 稲田　ゆき乃（東北大学高等教育開発推進センター・教育研究支援者） **参加者数: 25 名(学内: 9 名・学外: 16 名)**	
18	7/27	**「大学マネジメントに求められるもの —期待される能力と人材育成—」** 日時：2013 年 7 月 27 日（土）13:00～17:30 場所：東北大学東京分室会議室 A・B 報告 1「マネジメント人材が求められる背景と研究会の趣旨」 羽田　貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授/大学教育支援センター長） 報告 2「マネジメント人材に求められる能力とは －5 大学共同管理職調査からー」 大塚　雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター長/教授） 報告 3「大学経営に求められるもの －東京大学 大学経営・政策研究センター『大学における意思決定と運営に関する調査』」 両角　亜希子（東京大学大学院教育学研究科・准教授） 報告 4「サブ・リーダーとしての副学長・理事像 －2 つの調査からー」 夏目　達也（名古屋大学高等教育研究センター・教授） 報告 5「専門分野と大学運営能力 －5 大学共同管理職調査から」 山田　剛史（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・准教授） 報告 6「大学経営人材養成に関する現状と課題－『教職協働時代の大学経営人材養成方策に関する調査』」 山本　眞一（桜美林大学大学アドミニストレーション研究科・教授） 報告 7「海外のアカデミック・リーダー育成プログラムから見る日本の課題」 杉本　和弘(東北大学高等教育開発推進センター・准教授) **参加者数: 54 名(学内: 5 名・学外: 49 名)**	

No.	開催日	事業名	ポスター
19	8/3	「リーダーシップと意思決定」 日時：2013 年 8 月 3 日（土）13:00～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A101 講師：吉武　博通（筑波大学大学研究センター長・教授） 参加者数: 53 名(学内: 25 名・学外: 28 名)	
20	10/8	「オーストラリアにおける研究倫理政策と実践―今後の展望を探る」 日時：2013 年 10 月 8 日（火）10:00～11:45 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：Marc Fellman（豪州ノートルダム大学・Director） 参加者数: 10 名(学内: 8 名・学外: 2 名)	
21	10/26	「SDP 若手職員のための大学職員論（２）」 日時：2013 年 10 月 26 日（土）13:00～17:40 場所：東北学院大学土樋キャンパス 8 号館第 2 会議室 講演 1「自分の立ち位置はどこで、自分は何をすべきか」 早川　浩之（岩手大学研究交流部・地域連携主幹） 講演 2「私の経歴書 －大学職員としての SD 体験を通して－」 高橋　豊（仙台白百合女子大学・会計課長） 講演 3「階層別に見る大学職員の能力形成と SD の実質化について －期待に応える大学職員となるために－」 船田　正幸(東北大学・法務課長) ワークショップ「大学職員のための成長レシピ」 東北地域職員有志メンバー 能登　竜一（秋田大学人工学資源学研究科） 其田　雅美（東北学院大学学長室事務課） 石沢　友紀（岩手大学研究交流部国際課） 堤　大輔（岩手大学財務部 財務企画課） 佐藤　恵（東北学院大学図書部図書情報課） 佐藤　司（尚絅学院大学進路就職課） 杉本　和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 稲田　ゆき乃（東北大学高等教育開発推進センター・教育研究支援者） 参加者数: 27 名(学内: 10 名・学外: 17 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
22	11/18	**IDE 大学セミナー「現代を担う教養と教養教育を求めて」** 日時：2013 年 11 月 18 日（月）13:00～17:25 場所：仙台ガーデンパレス 2F 鳳凰 講演 1「教養と日本の教養教育：その誤解を解く」 吉田　文(早稲田大学教育・総合科学学術院・教授) 講演 2「グローカル化時代における教養と大学教育の役割」 藤田　英典(共栄大学教育学部長) 講演 3「3.11 以後の科学技術と教養」 野家　啓一(東北大学教養教育院・総長特命教授) 講演 4「企業は人なり～社会から見た教養教育～」 河本　武(株式会社ユーハイム・代表取締役社長) 参加者数: 83 名(学内: 30 名・学外: 53 名)	
23	12/21	**「大学の教育マネジメントをどう進めるか –新・大学管理運営論–」** 日時：2013 年 12 月 21 日（土）10:00～12:00 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A101 講師：羽田　貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授/大学教育支援センター長） 参加者数: 37 名(学内: 12 名・学外: 25 名)	
24	12/21	**「データに基づく教育改善」** 日時：2013 年 12 月 21 日（土）13:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A101 講演 1「データに基づく教学改革をどのように進めるか -アセスメントの 5 ステップ-」 山田　剛史(愛媛大学教育・学生支援機構・准教授) 講演 2「IR を活用した教育改善へのステップ」 鳥居　朋子(立命館大学教育開発推進機構・教授) ワークショップ「IR のためのリサーチ・クエスチョンの導き方」 川那部　隆司(立命館大学教育開発推進機構・准教授)・鳥居　朋子 参加者数: 41 名(学内: 12 名・学外: 29 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
25	1/11	「SDP 私のなりたい東北大学職員」 日時：2014 年 1 月 11 日（土）13:15～17:20 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 ワークショップ： 東北大学職員有志メンバー 工藤　淳平（東北大学法学部・法学研究科教務係） 半田　智秋（東北大学病院総務課人事係） 水野　貴江（東北大学金属材料研究所経理課経理係） 結城　峻一（東北大学歯学部・歯学研究科教務係） 杉本　和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 稲田　ゆき乃（東北大学高等教育開発推進センター・教育研究支援者） 参加者数: 22 名(学内: 22 名・学外: 0 名)	
ランチタイム FD			
26	6/12	ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 17 回　Student Learning Adviser(SLA)の実践紹介 ―学生の力を“学び”に活かす― 日時：2013 年 6 月 12 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C 棟 C103 講師：足立　佳菜（東北大学高等教育開発推進センター・助手） 鈴木　学（東北大学高等教育開発推進センター・助手） 参加者数: 24 名(学内: 24 名・学外: 0 名)	
27	7/10	ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 18 回　グローバル人材を育てる ～FD・SD の視点から～ 日時：2013 年 7 月 10 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C 棟 C103 講師：水松　巳奈（東北大学グローバルラーニングセンター・助手） 参加者数: 17 名(学内: 17 名・学外: 0 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
健康科学セミナー			
28	10/22	2013 年度第 1 回健康科学セミナー　「食物アレルギーの話」 日時：2013 年 10 月 22 日（火）16:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2F ゼミナール室 講師：木内　喜孝（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 16 名(学内: 10 名・学外: 6 名)	
29	11/26	2013 年度第 2 回健康科学セミナー　「睡眠障害とその対処」 日時：2013 年 11 月 26 日（火）16:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2F ゼミナール室 講師：山崎　尚人（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 15 名(学内: 11 名・学外: 4 名)	
30	12/17	2013 年度第 3 回健康科学セミナー　「若年肥満における血圧上昇の病態とその対策」 日時：2013 年 12 月 17 日（火）16:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2F ゼミナール室 講師：小川　晋（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 16 名(学内: 11 名・学外: 5 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
31	1/28	2013 年度第 4 回健康科学セミナー　「若年者の突然死」 日時：2014 年 1 月 28 日（火）16:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2F ゼミナール室 講師：佐藤　公雄（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 18 名(学内: 12 名・学外: 6 名)	
その他			
32	5/7	平成 25 年度東北大学新任教員研修 日時：2013 年 5 月 7 日（火）13:30～16:45 場所：東北大学百周年記念会館川内萩ホール 「東北大学の学生とは」 花輪　公雄（東北大学・理事） 「大学教員の役割とキャリア・ステージについて」 羽田　貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授/大学教育支援センター長） 「教育者としての倫理・ハラスメントについて」 吉武　清實（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 「研究者としての倫理・ミスコンダクトについて」 伊藤　貞嘉（東北大学・理事） 「新任教員への期待―未来を創造する東北大学の力へ」 里見　進（東北大学・総長） 参加者数: 414 名(学内: 414 名・学外: 0 名)	
33	7/2	東北大学院生キャリアセミナー「大学院生が将来をきりひらくために」 日時：2013 年 7 月 2 日（火）16:00～18:00 場所：東北大学青葉山キャンパス総合研究棟 110 講演「大学院生の進路―求められるもの」 長井　裕樹（株式会社アカリク　取締役） 参加者数: 45 名(学内: 44 名・学外: 1 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
34	8/3	2013 1st RIEC Seminar on “University Globalization: Towards Better Quality University Education and Graduates” 日時：2013 年 8 月 3 日（土）13:00～18:00 場所：東北大学片平キャンパス片平さくらホール 参加者数:　名(学内:　名・学外:　名)	
35	10/22	2013 2nd RIEC Seminar on “University Globalization: How to Improve Students and Education Quality of Universities” 日時：2013 年 10 月 22 日（火）10:30～17:50 場所：東北大学片平キャンパス片平さくらホール 参加者数:　名(学内:　名・学外:　名)	

2013 年度 PD プログラム参加者総数

計 1,941 名（学内 1,034 名・学外 907 名）

3-2-3. PD セミナーアンケート結果

高等教育のリテラシー形成関連　コード：L（Literacy）

No.2: 国際シンポジウム「教育から学習への転換を支えるもの」(2013.6.1)

Dee Fink（ディー・フィンク＆アソシエイツ・コンサルティング・サービス），松下佳代（京都大学）山内祐平（東京大学），沖裕貴（立命館大学）

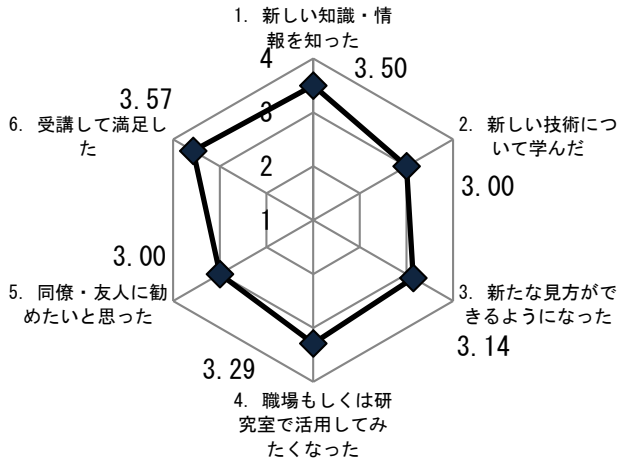
回答者属性(N=14)

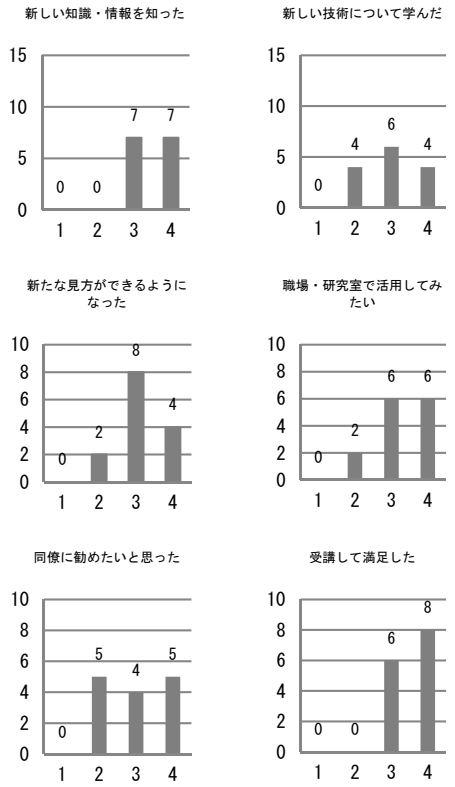
【職階】教授(2)／准教授(4)／講師・助教(1)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(2)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(2)／その他(2)／無回答(1)

【性別】男性(7)／女性(4)／無回答(3)

【学校種】東北大学(6)／東北大学外(6)／無回答(2)

1. 参加した感想　(1. 当てはまらない～4. 当てはまる)





このテーマを継続して提供すべきだと思った：12 名（85.7%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - オンライン授業を取り入れること。将来、教育に関わろうと思っているが、その際に授業設計に重きを置いて授業を展開していきたいと思った
   - MOOC をチェックしてみたい
   - 「受講者に各々異なった例を考え、Team で帰納させる」という方法を試すべきか
   - Fink 先生の話はお話しを直接伺ったことで、より実際の活用性のイメージがつき、できる
   - 授業設計のためのプロセス、教授から学習への転換に対する、具体的アプローチとその成果
   - ３つの報告
   - コースデザインに集中し、良く設計すること
   - feedback の大事さ、教えるだけではなく、feedback をすることで、自分が学生を評価することもできるし、学生も自ら評価できるのではないのか。そして会話もできる
   - MOOC を知って、使い方で、学生の学力向上がはかれると思った
   - 学習成果への転換に向かって、現状を把握と方向性の確認
   - 自主学習、自主 seminar が活発にできるようなラーニングコモンズの環境作りが大事になっていくと思った
   - NSA でのとり組み
3. わかりにくいと思ったこと
   - 成績評価の方法、Plagiarism などの free-ride を Team learning で防止するか。防止できなければ、教養の意味がグロテスクに変化する。「盲信できる目立った人間に近づき、要領を競うゲームを勝ち抜くことが、教養である」ということになる
   - 現在の日本の（特に国における）方針等の説明がもっとあれば良かった
   - 基調講演の途中の質問

・MOOC の Pros, Cons
・何を目指しているのか(goal ではなく、goal に至るための各小さい目標)
・カリキュラムに関する内容がもう少し具体的な例があるとわかりやすいと感じた

4. セミナーに関しての意見・感想

・今回のような内容は学生のぼくでも十分理解することができましたし、自分自身の学業に対する姿勢をあらためて考える良い機会にもなりました。ですから、今後学生がもっと参加できるようにすると良いと思いました
・教養教育実を現にやっている人の意見をもっと聞きたかった。教育，社会学的議論は PD の目的にあまり合致していないかも
・定期的にこのようなセミナーをやっていただきたく思います
・もう少しを長く

No.3: Planning and Managing Active Learning in English (2013.7.5-6)

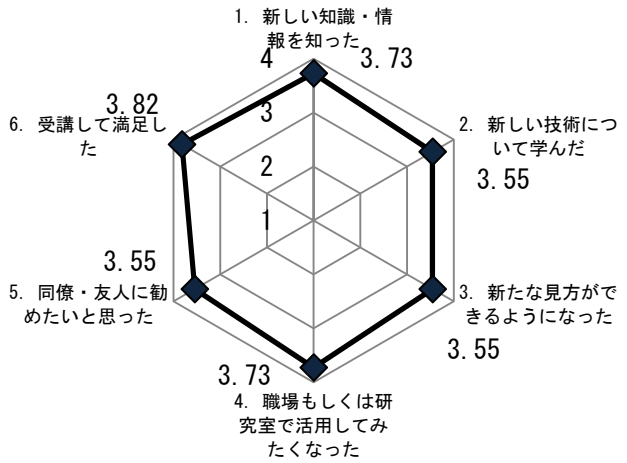
Laura HAHN（イリノイ大学），Todd ENSLEN（東北大学高等教育開発推進センター）

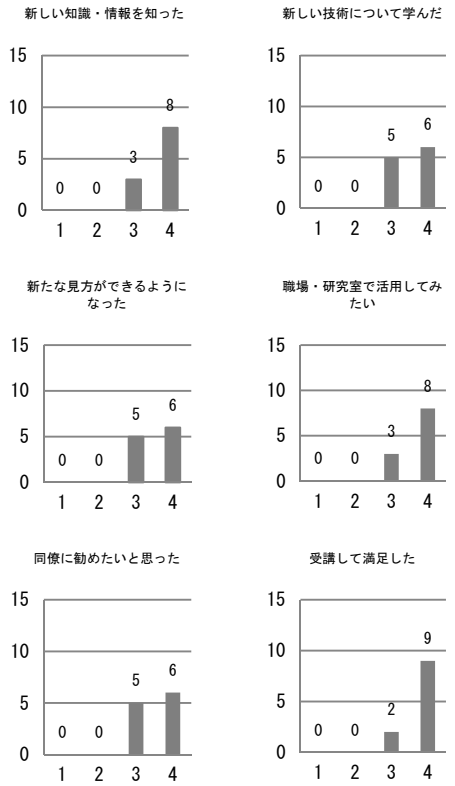
回答者属性(N=11)

【職階】教授(4)／准教授(3)／講師・助教(1)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(0)／その他(2)／無回答(1)

【性別】男性(5)／女性(4)／無回答(2)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(3)／無回答(3)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：11 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・学生達を如何にして，自発的に（ACTIVE）な学習者にするかの観点からの非常にきめ細かで，具体的な助言が多く，勉強になりました
・新しく学んだ①Flipped classrooms ②Bloom's Taxonomy，実際に使うのは難しそうですが
・Active learning strategies list
・"Active learning"について，より多様的な授業法を学べること
・様々なバックグランドを持った人の中で，授業をコントロールすること
・学生が教師個人に興味があるらしい
・changing opinions on Japanese students
・いろいろあった
・我々が大学院を通じて，大学教員になるためのこととして学んでいないことをしっかり学べる
・Active Learning の基本的な考え方と具体的な実践法がよく分かった

3. わかりにくいと思ったこと

・Flipped，Clickers が分かりにくかった
・Active learning の定義，具体的な例，たくさんありましたが，はっきりと分かりませんでした

・特 1：英語で Active Learning をマネですることの注意点
・講師の方が短時間でころころ変わる意味がよく分かりませんでした
・英語についていけないことがあった
・それゆえ問題が多岐にわたることを重んじる（特に大学が今後国際化と目指すにあたり，想定すべき問題など）

4. セミナーに関しての意見・感想

・極めて良く準備されているという印象を持ちました。講師の先生の人選も適切でした。
・ポスターで講師の略歴を見て，もっと語学に焦点をあてるのかと勘違いしてしまった。
・具体的な know how についてもう少し詳しく取りあげる
・MIT など他大学の最新技術（ex. flipped class）を詳細に紹介していただければと思います
・このようなセミナーを英語でもっとやって下さい，科目によって教え方が変わるので，科目ごとにやってもよいかもしれません
・講師の質がとても高いと思った
・大学が英語の授業をふやしていければ英語にするセミナーをもっとふやすべき。

No.4: 授業づくり：準備と運営 (2013.7.19)

邑本 俊亮（ 東北大学災害科学国際研究所）

回収率 =100.0%(20/20)

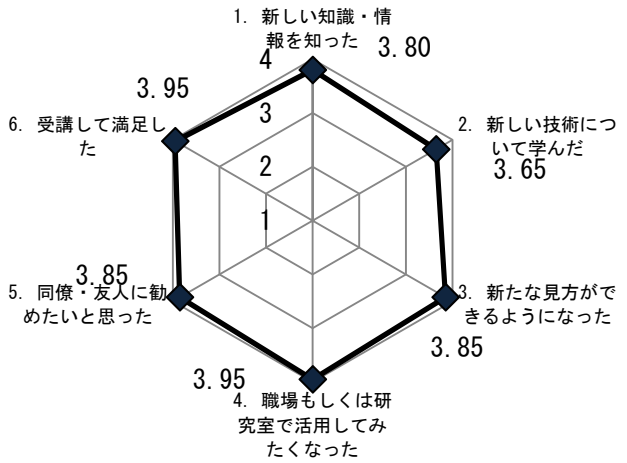
回答者属性(N=20)

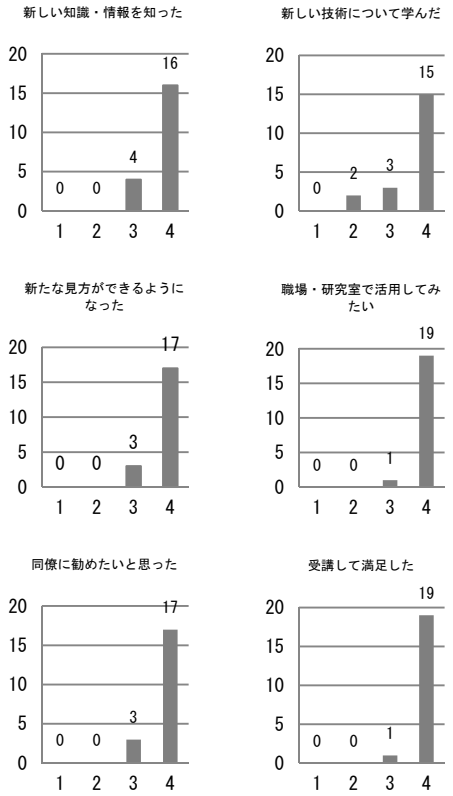
【職階】教授(3)／准教授(4)／講師・助教(6)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(3)／職員＜部長・課長以上＞(1)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(0)／その他(2)／無回答(1)

【性別】男性(8)／女性(9)／無回答(3)

【学校種】東北大学(12)／東北大学外(5)／無回答(3)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：20 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・模擬授業を通して，先生がどのように授業運営，準備されたのか，内面的なことを知ることができた
・人間は知識の関係を結び付けたがらない
・理解について，コミュニケーションについて
・音も使えるということ
・予想外の効果を使うことにより，眠さを防ぐそうだということ
・講義の課目や学生の対応にも，よって，教える側対応も異なってくると思いますが，教える側の努力も必要だと思いました
・準備で考えられたこと，全般
・授業で使うスライドの構成（組み立て方）
・話し方，生徒の巻き込み方
・先生がどのように授業の準備を進めていったかというお話がとても参考になった。ありがとうございました

・学生も一緒に授業を参加すること。わかりやすい例をあげること
・授業準備のやり方と授業に関するテクニック
・教育心理学について
・授業の構成について
・大変有意義な lecture でした
・「理解のプロセス」をどう支援するかという視点が非常に参考になりました
・講義の進め方，PPT スライドの作り方，非常に参考になりました。先生のような授業ができるよう今後努力したいと思いました
・理解の心理プロセス
・準備で考えたことは日常の授業に何気に意識していたことではわかりますが，それがひとつの模擬授業の中でうまく（すばらしく）実現して，パフォーマンスの具体例として学ばせていただきました。模擬授業の内容も実に役立ちそうです
・知識の活性化や精緻化などこれまで漠然としていた考え方を言葉として捉える事ができた
・授業づくりのしかた，手順，注意点がわかるようになったと感じました。授業＝コミュニケーション＆生徒との信頼関係を築く。
・授業運営で意識された内容，項目
・理解についての誤解を再確認

3. わかりにくいと思ったこと

・信頼関係の築き方について，もうすこし具体的に解釈してほしいです
・学生との Interaction の取り方は授業の内容によって異なるものと思うが，その辺をもう少し議論できればよかった
・専門科目など教える分量が多いときに，どうすればよいか，量のコントロールの考え方など教えてもらいたいと思いました
・内容についてはわかりました。具体的に自分がどうすればよいか，という点については，これから考えていきたいと思います

4. セミナーに関しての意見・感想

・今後も継続を希望する
・模擬授業が大変有効で分かりやすかったです
・大学教育として，1 年目ですが，このようなセミナーを開催していただきとてもありがたく思っています
・先生の授業すごくおもしろいでした。このような講義をぜひ続けてほしいと思います
・すばらしいと思いますので，もっと積極的に告知してほしい
・なかなか，このような専門的でありながら，実際に役立つセミナーを受講する機会がないので，今後もいろいろと企画していただきたいと思います
・（授業はある意味”ショービジネス”ですね，歌手のショーとほとんど同じ要素でうまくいくようですね。）ずいぶん授業作りの方法論が頭の中で整理できました。楽しい授業を頭で考えながら（想像しながら）準備してみます

No.5: 授業デザインとシラバス作成
(2013.7.26)

串本 剛(東北大学高等教育開発推進センター)

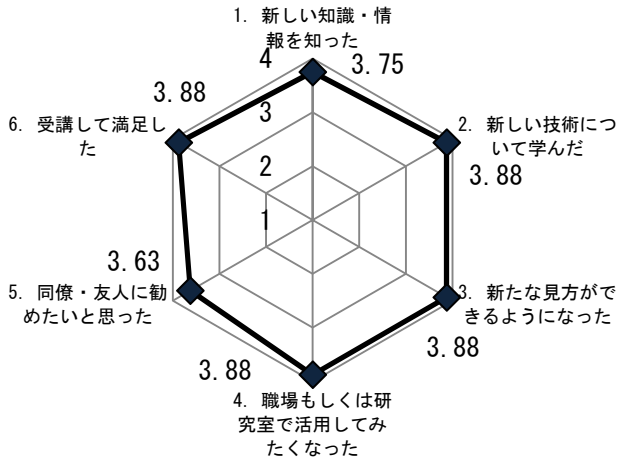
回答者属性(N=16)

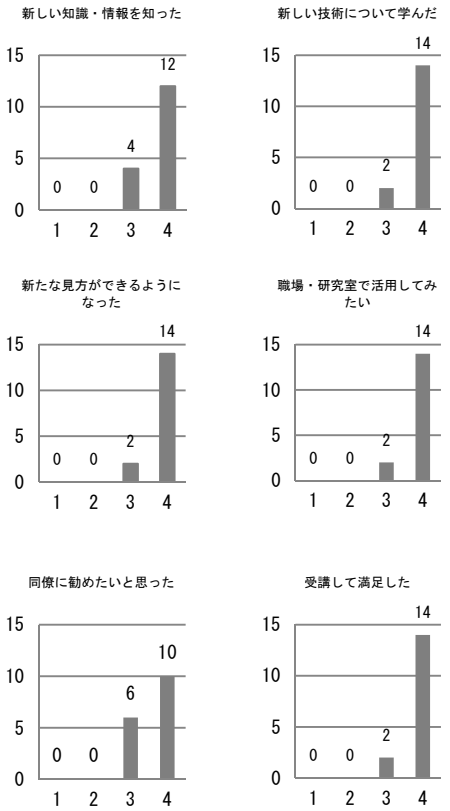
【職階】教授(1)／准教授(8)／講師・助教(4)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(1)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(0)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(10)／女性(4)／無回答(2)

【学校種】東北大学(3)／東北大学外(11)／無回答(2)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：16 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 合計学習時間や学習時間配分率を用いて目標との整合性について検討するということ
- 授業デザインワークシート，串本先生の授業で使用されている規準（別紙参考資料④）
- 今まであやふやなまま計画していた授業をどのような考えのもと組み立て評価したらよいかわかった。
- 授業時間と学生の学修時間を目標別に割りふることが授業進行の可視化につながった
- 授業外学習の位置付け←学習課題に対して授業外学習時間をどのように設定するのか？　知識・能力・態度の授業における目標設定と妥当性のチェック
- 説明と演習を講義内で展開すること。学習時間を考慮すること。知識だけでなく能力・態度を含めること。時間外学習の検討方法
- シラバスにおける目標設定，成果配分
- 授業外の時間，評価方法をもっと考えたい
- 漠然としていたシラバスの本質を知る事ができた。私の場合，特に「内容」で能動的学習を持たせるアイデアが浮かんできたように思う
- 授業デザインの具体的方法が学べた
- 成績評価の仕方はとても参考になりました
- シラバスの枠組みと，授業の位置づけ，考えるプロセスの有意義な学びになった
- 1 単位＝45 時間を本当に真剣に考えていなかったことに気づかされました。数値だけでは見えないところもありますが，こうやってみることで授業の内容・評・価を相対的にみることができました
- 目標に基づいて授業を構成する／評価することの重要性がよく分かりました
- 目標と評価，内容の配分を考えて，作成すること

3. わかりにくいと思ったこと

・授業の改善作業と現在の授業の確認作業が混乱したので（自分の中で）整理に時間がかかってしまった
・目標の妥当性の検証が難しい
・この PD は最後まで集中して参加すれば授業計画をしっかりと顧みる事ができる。「始めの時間帯にくじけないように！」と思う
・裏面の教育学習活動と時間配分の表の計算はエクセル等で簡便にできた方がよい。
・総時間は学生の負担を考えると現実的にはムズかしい（工学部）

4. セミナーに関しての意見・感想

・非常に分かりやすく，かつ充実したセミナーでした。ありがとうございました
・パワーポイントの要点だけでもハンドアウトにしていただけるとメモの時間がとられずにすむのですが
・昨年度とちがい，4 人グループでの作業はお互いに意見を共有できてよかったと思います。　ただし，Power Point については資料として配布した方がよろしいかな（笑）
・進め方，内容ともに大変有意義なセミナーでした
・自身が漠然と考えていた（感じていた）項目についての目標化や評価化の方向性をつかむことができ，よかったです
・ワークシートの「授業内容」の時間外部分が予習と復習にわけられたら良いと思います
・ワークシートの記入。計算の方法もう少し分かりやすく説明して欲しかったです
・ワークシートについて，「教育学習活動と時間配分」のワークシートですが，内と外のセルがずれていますが，こうなっている時，「外」が復習のみのイメージがついてしまいました。予習の意味も含めて，同じ列のほうがわかりやすかったです
・理系／文系別にこのようなプログラムがあると問題点を参加者と共有しやすいと思いました

No.6：大学教育論：教養と専門の二項対立を越えて (2013.8.3)

小笠原正明（北海道大学）

回収率 ＝52.2%(24/46)

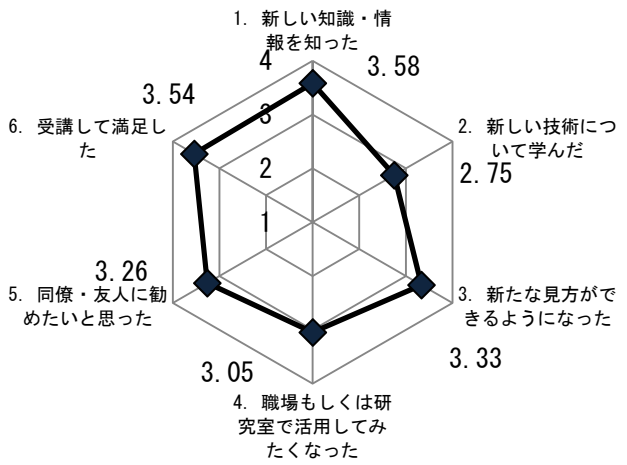
回答者属性(N=24)

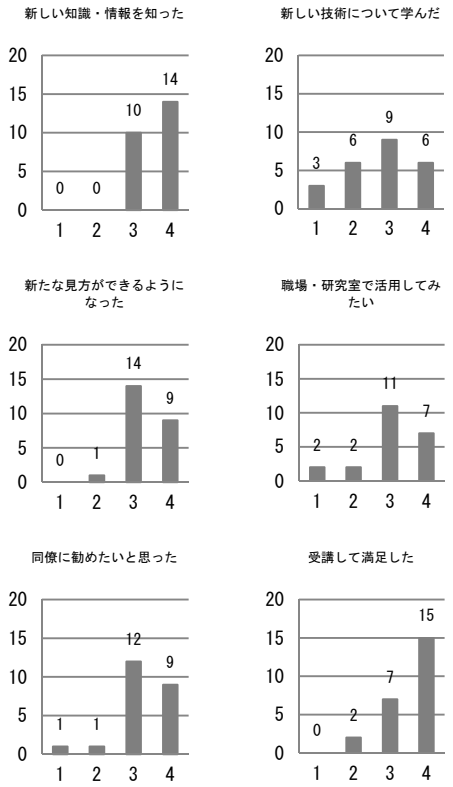
【職階】教授(9)／准教授(3)／講師・助教(0)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(1)／職員＜部長・課長以上＞(2)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(4)／無回答(3)

【性別】男性(13)／女性(8)／無回答(3)

【学校種】東北大学(7)／東北大学外(13)／無回答(4)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：24 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・カリキュラムを考える上での参考になった。高等教育の課題を今後の方向性ついて知ることができたが，根本的には，先生方ひとりひとりの閉鎖性が全体に影響しているのではないかと感じた。また，卒業生だけではなく先生方も決められないシステムな

のだと感じた。声の大きい男性教授に負けない女性の先生方が発想豊かに教育を実践していけるように大学も変化しようとしていることは伝わって来たし，このようなプログラムがあるのもそのためなのかと感じた。女性の先生方には男性教授の女性版にとどまらず，女性の発想をもって活躍してほしい

・教養と専門のバランス，カリキュラム構築の考え方，アクティブ・ラーニングの視点
・日々の教育で感じている教育的諸問題がなぜ起こっているのかを考える上で，整理して考えられるようになった
・教養教育と専門教育のインターフェイスの重要性
・大学教養と専門教育の歴史
・統合科目を開設する試み。文系理系こえて身につける力をどのように展開するか
・海外の大学に関しての知識
・教養と専門の混乱の歴史がよくわかった
・入門時モジュールと総合的モジュールの教え方
・入門モジュール，総合モジュール
・学生教育に役立ちそう（特に「相対化」は学生に理解してほしい）
・「学士課程に生じた構造的ゆがみ」で他のものも見ることで，何が問題かを改めて考えたり，見ることができた

3. わかりにくいと思ったこと

・スクールとデパートメントの違い
・東北大固有の話はわかりにくかった
・なぜこういう場でもめるのがわかりにくい話である
・教員にどう分かってもらうか
・用語の説明がなかったので，すっきりしない。　区別（違い）を明確にするために必要だと思います

4. セミナーに関しての意見・感想

・コミュニケーションできないのは，子どもから大学の先生まで同じなのではと感じました
・東北大の教職員向けセミナーを一般開放しているだけなのならそれは明記してほしい
・議論の時間をもっと長くした方がいい
・（今日に関しては）東北大の先生方のやり取りが多かったので，学外の人間としては（面白かったけど）議論に入りづらかったです。今日だけかもしれませんが

No.7: 認知科学と学習の原理・応用 (2013.10.8)

佐伯 胖（信濃教育会教育研究所長）

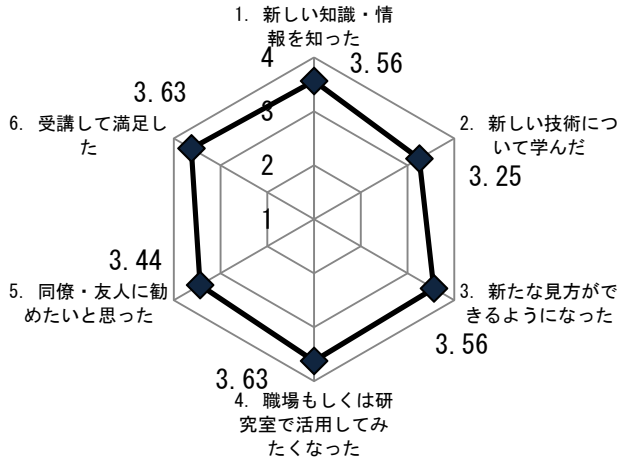
回答者属性(N=16)

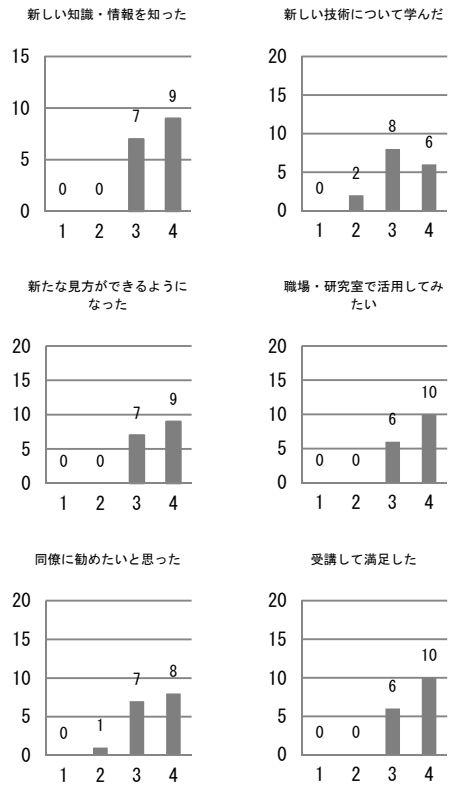
【職階】教授(5)／准教授(2)／講師・助教(3)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(1)／職員＜部長・課長以上＞(1)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(8)／女性(5)／無回答(3)

【学校種】東北大学(4)／東北大学外(10)／無回答(2)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：15 名（93.8%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 以前から佐伯先生の講演や著書に触れていて，とても共感するところが多く，自分の仕事中でも役立てたいと思っているところです。しかし，やはりむずかしい。ただ，今日先生から「ゲリラ的にいろいろあちこちでやってみては？」ということばがあったので，私にできそうなことでちょっと頑張ってみようと思いました。でも 2 時間ではやっぱり時間が短かったように思います
- You モードから THEY モードの以降が印象的でした
- 佐伯先生の理論については実習等に生かしていけると思います
- LPP の考え方，you 的な存在を研究の場で作ることの大切さ
- 教員と学生の you 的関係性
- 教育の肥え方が時代とともにどのように変化してきたか，今後の方向がどうあるべきか
- 学習の理論（社会文化含め）
- ここに書ききれないくらい多くのことを学びました。ありがとうございます。考え方，原理だけでなく，具体的にやってみようと思うアイデアも思いつきました
- 学習：you 的関係を通じて行うことが大事
- 「おかしい」と思ったことを感情的にならないで，論理的に証拠を出して言えること，その強さを学びました。今日，本当に最高の lecture でした。ありがとうございました
- you 的なかかわり

3. わかりにくいと思ったこと

- 渡部先生の質問に関連しますが，大学である知識を理解させなければいけないことが多いときに，そのたくさんの知識をどういやって増やさせようとするのか，そこが知りたいと思ったが，佐伯先生はそんなことしなくてよい，というかんじでしょうか
- 専門職育成のための大学ではやはり何かできることを証明するのも社会的責任です。学習方法として LLP は以前より有効だと思っていますが，それが教育目標とどうつなげられるかが課題です
- 職場で何でも自由に話せる環境の重要性は理解できるが，それを表現することの困難さも実感している
- 教師と学生の差異はそれでも存在すると思われますが，特に説明はなかったです
- CCSS の講義での活かし方
- 制約された時間の中での知識の詰め込みは全く必要ないのか？

4. セミナーに関しての意見・感想

・セミナーの紹介文にあった「簡単に新しい事実をのみこめない学生の気持ち」にたった学習方法，教授方法がわかるようなセミナーがあるとよいと思った
・予定があわず，セミナーに参加できないこともあります。そんな時，動画配信がると助かります
・わかりやすい講義でよかったです，ありがとうございました

No.8: 世界の高等教育政策 (2013.11.20)

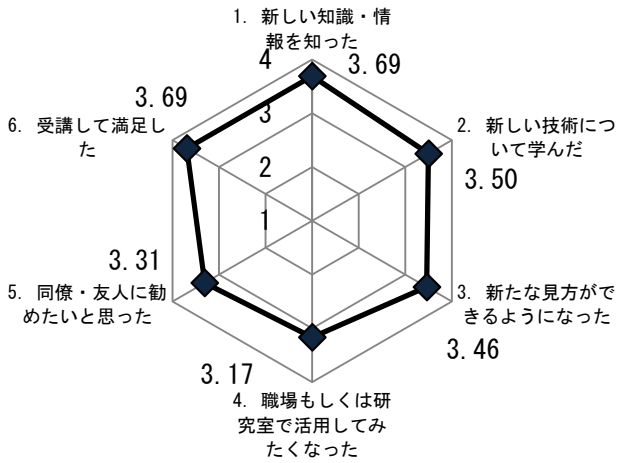
杉本和弘（東北大学高等教育開発推進センター）

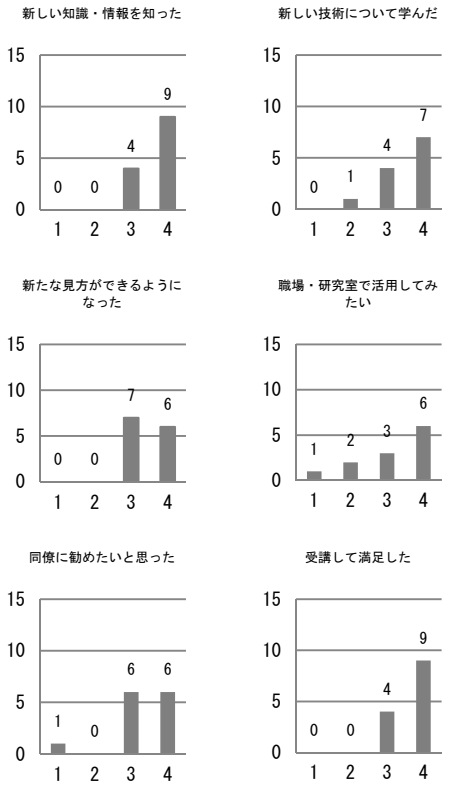
回答者属性(N=13)

【職階】教授(4)／准教授(0)／講師・助教(2)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(4)／無回答(2)

【性別】男性(6)／女性(5)／無回答(2)
【学校種】東北大学(7)／東北大学外(4)／無回答(2)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：13 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・現在の教育の質保証についての幅広い考え方を表面的にではあっても学ぶ事が出きた点
・特に日々の業務で外国の大学とやりとりをしている方に有益だと思いました。私も面白く学ばせていただきました
・①比較教育の視点。②総合的把握の図
・大きな展望と個別の知識
・①高等教育を比較的なアプローチでとらえられる機会になった。②日本の大学の現状や立ち位置を専門家の視点で見ることができた
・高等教育の質保証と国際比較教育の視座
・国際動向
・世界的に質保証や学習成果が注目されており，今後日本の大学もますます力を入れていく必要があると感じた
・オーストラリア，マレーシア等で進展している高等教育機関がダイナミック変化している様子を理解した

3. わかりにくいと思ったこと

・各国，各機関の具体例を挙げていただくともっと分かりやすくなるのではないかと思った
・日本と比較した際の違い
・日々，日本人，留学生の修学支援をしています。マレーシア人学生の指導に役立つコンテンツを期待していました

4. セミナーに関しての意見・感想

・内容が幅広く良く理解できる内容でした
・20 分に 1 回討議時間を入れると良い。75 分続けて講演より，途中途中討議時間を入れる方式が良い
・大変に素晴らしかった

・セミナーの動画配信場所がわかりにくい気がします
・もう少し講演内容について，事前に情報提供していただくと良いと思いました。ありがとうございました
・大学のグローバル化に際して，留学生支援として，「大学→労働」の動きをスムーズにする必要があると思うが，日本がオーストラリアから学べる点はあるか？貴重なお話しありがとうございました
・①この内容は，大学経営のスタッフに伝えてください。②ある NPO が UAE からの要請で，日本の大学紹介をやった（11 月 20 日頃）。東北大学にも誘いをかれたそうですが，応答なしだったそうです。これも見識だったのかな，と本日の講演を聴いて理解しました

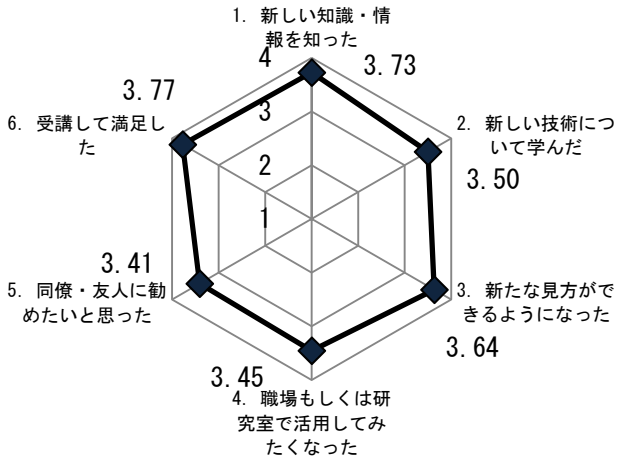
専門教育での指導力形成関連（各専門分野）　コード：S（Specialty）

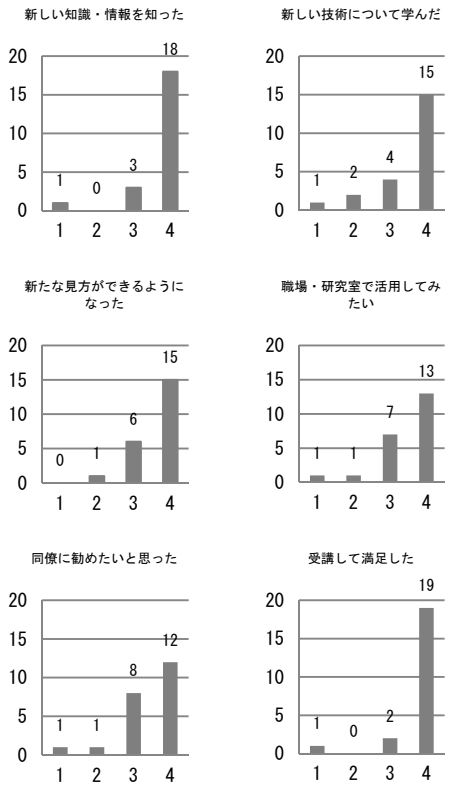
No.10: PBL の原理と応用ー公募制・教養教育 PBL 同志社大学プロジェクト科目を中心にー
(2013.9.6)

山田和人（ 同志社大学）

回答者属性(N=22)
【職階】教授(3)／准教授(3)／講師・助教(6)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(1)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(2)／その他(3)／無回答(3)
【性別】男性(7)／女性(11)／無回答(4)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(13)／無回答(4)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：21 名（95.5%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・ポートフォリオの重要性
・PBL の公募制，生徒評価の方法
・アウトプットの機会を何回か持つ
・実践に基づいたお話しで沢山のノウハウを教えていただく事ができました
・speech がクリアで，スライドも見やすく，かつ，ワークさせていただき，良かったです
・①自己評価の精度を上げる為の仕掛け（エビデンスの集め方等）②授業展開を支援する為の仕掛け（リーダー講習会等）
・①PBL 教育を専門と教養にどう位置づけられるのかを分かりました。②経験の話だったのでとても役立ちそうです
・実践を通しての話でしたので基本的で関心が持てる内容でした
・学生に自己評価をさせるシートなどが参考になった
・学生の自己評価項目
・①学生「自ら選択して取り組んでいる」という意識にさせる重要性。②ポートフォリオ＝再現性＝適切な評価
・①地域からテーマを募って教員として採用する点。②振り返りの実施
・具体的な例が多く，大変役に立った

・PBL の大学での位置。山田先生の実践例（「忠臣蔵」と「能楽」）
・具体的な授業デザインについて知れたのがよかった
・短時間でのグループワーク（評価する時のポイントが有効），参考になりました
・文系の専門科目での実践例を紹介していただいたことで，PBL やアクティブラーニングに関心の薄い文系の学部教員に勧めてみることができるかもしれない，との感触を得ることができた

3. わかりにくいと思ったこと

・監督としてどこまで監督するか？
・デジタルを活用したポートフォリオの作成の箇所をもっと知りたかった
・あまりありません。３時間いっぱい勉強させていただきました！！！
・ポートフォリオ評価が本来の学生主体のポートフォリオではないように思い，PBL とどのように関連しているのかがわかりにくかった
・教育界で言われているポートフォリオ評価　と同志社大で実施している，e－ポートフォリオとの関係について言及していただけるともっと理解できると思いました
・一定期間の中で社会の課題（プロジェクトの吟味が難しい）を解決するとは難しい

4. セミナーに関しての意見・感想

・大変勉強になりました。実践者のお言葉は，とても強いメッセージですね。新幹線の時間の都合で，直接お礼が言えずに申し訳ありません
・素晴しい！
・ありがとうございます。大変勉強になりました
・貴重な講義，ありがとうございました
・今後ともよろしくお願いいたします

No.11: Classroom English：Pronunciation and Expressions (2013.12.12)

Todd Enslen・Vincent Scura（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 =87.5%(21/24)

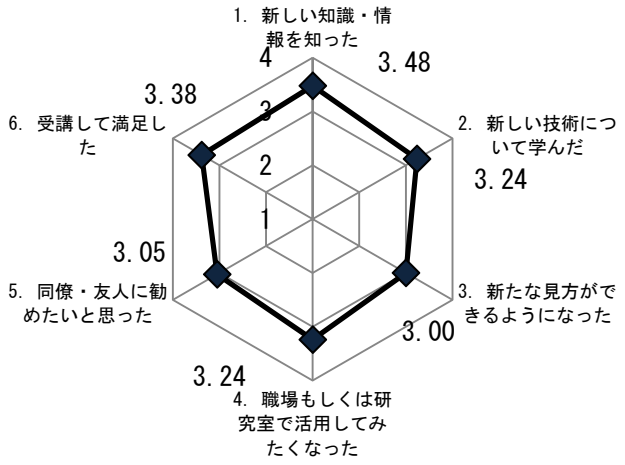
回答者属性(N=21)

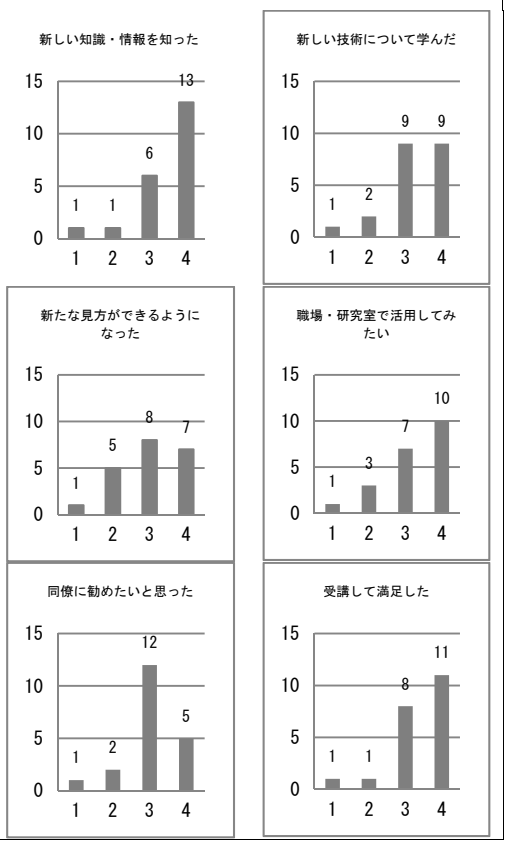
【職階】教授(2)／准教授(1)／講師・助教(7)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(7)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(2)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(13)／女性(6)／無回答(2)

【学校種】東北大学(18)／東北大学外(2)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：19 名（90.5%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・シラバスの重要性
・発音の違い
・シラバスの重要性認識
・概要を知ることができた
・シラバスの内容や単語
・発音方法（特に Rhythm），授業の 1 回目で何を説明すればいいのか。
・英語で講義するのにならず，学生に対する態度。（英語と日本語では異なるようですから・・・。）
・発音，シラバス
・日本人の英語が通じないのは，発音もさることながら，リズムも問題だとわかりました
・発音の仕方
・英語での講義におけるシラバスの書き方について学んだが，これまでほとんど使ったことがないワード（成績に関してなど）を学ぶことができた。　英語での講義で気をつけるポイントを知ることができた。
・シラバス項目の英語表現
・シラバスをつくるときの心がけ，書くべき内容など。ここまできちんとシラバスを作ってあれば実際の授業も内容が濃くなると思う
・発音法。いつも発音記号や舌の使い方（図）ばかり見せられてきたけど，今回「身体で覚える」という方法をすすめてくれたので発音への苦手意識が消えそうと思った
・Syllabus vocabulary と　Positive reinforcement により表現の幅が広がった
・英語のリズムに注意して文を発話することの大切さを知った
・シラバスで使われる用語：キーワードでも何が必要なのか，知ることが出来た
・シラバス作成：プレゼンテーション，発音の練習もポイントがつかめてよかった
・様々な feedback のし方や物の考え方，とらえ方をペアワーク等できけたこと
・シラバスの outline については生徒に何を学んで欲しいかという視点で説明するということが英語で少し上手く伝えられるように気がします
・シラバス作成の際の専門用語
・シラバスのつくりかたがとても参考になりました。I learned how to develop syllabus, Thank you!
・英語にはリズムがあり，リズムよく話すことが大切であることを学べたこと
・英語の講義に関して，言語能力だけでなく，カルチャーや教え方の能力が必要であること
・英語は１つ１つの発音よりも，流れが大切で，特にシラブルに沿った話し方をしないと相手に伝わらない
・シラバスに必要な単語を更に学ぶ必要がある

3. わかりにくいと思ったこと

・シラバスの内容などでもっと例を示して解説してほしかった
・ポスターから今回の内容をイメージできかなった。シラバスを口頭で説明するとは思わなくて，語学力のない自分は動揺した（けど，出てみてよかったです！）
・講義において使える表現についてもっと実例を示して頂けると嬉しかった。そこで学んだ表現を使って実演をしたがった
・Syllabus が少し難しかったです。リズムといっても日本人にはカウントできないリズムであると感じました。逆に native にはリズムでとらえているという別の感覚があると気付きました
・発音はフォニックスを実践したらよいのでは？と思いました。As for pronunciation, I recommend "phonics" for Japanese
・自分の英語力，語彙力が低いため，先生が使っている単語や説明している事柄が分からず，理解できなった部分が多くあった

4. セミナーに関しての意見・感想

・内容が多すぎるのではないか
・さらに考えるための，良い資料，文献を知りたい。文献等具体的に知る方法を提示とほしい
・実践練習は，緊張したが，タメになったと思う
・授業で有用なフレーズをもう少していねいにせつめいしてもらい，それを使ってプレゼンするような形式が良いと思う
・集中講義のような形で，2-3 日行ってもよいように感じました。これから，英語の勉強方法を少し変えてみようなど，良いきっかけになると思います
・初めて英語の授業を持つ人（でしたっけ？）対象，と聞いていたのですが，受講生の皆さん，英語に関して特に問題のない方ばかりで驚きました。私は英語の Speaking, Listening はまだまだ勉強しなければならないレベルです。←このような私のような人たちにとって魅力的なプログラムをようしてないと，東北大のグローバル化はすすまないと思います。（周囲が「できる」人たちだと，参加申し込みしにくい）
・周りの受講生が多く，恐縮してしまった。自分のように語学力のない人対象やそういう人でも来やすい企画をしてくれたらもっと参加したい。先生たちの授業も WS も面白くて，楽しかったし，もちろん勉強になったので，参加して本当によかった。
・アクティビティーがあるのはとてもよいと思います。参画意識を高くもって，体得できたように思います。楽しく受講しました。
・もう少し時間があればよかった
・Thank you very much! I really enjoyed

No.12：ライティング支援者を育成する（講演）(2014.3.12)

佐渡島紗織（早稲田大学），片山晶子（東京大学），佐藤勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 ＝74.5%(41/55)

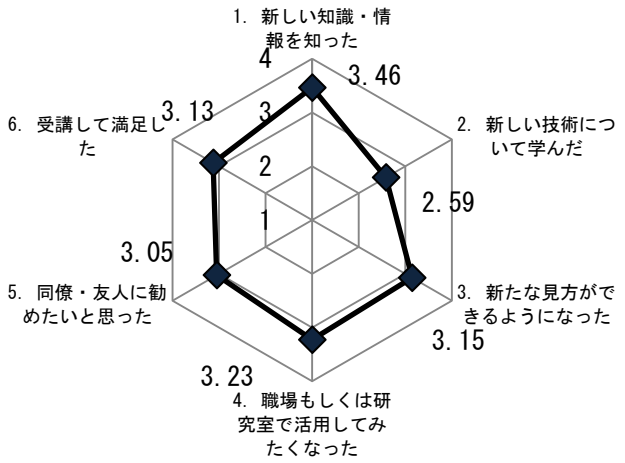
回答者属性(N=41)

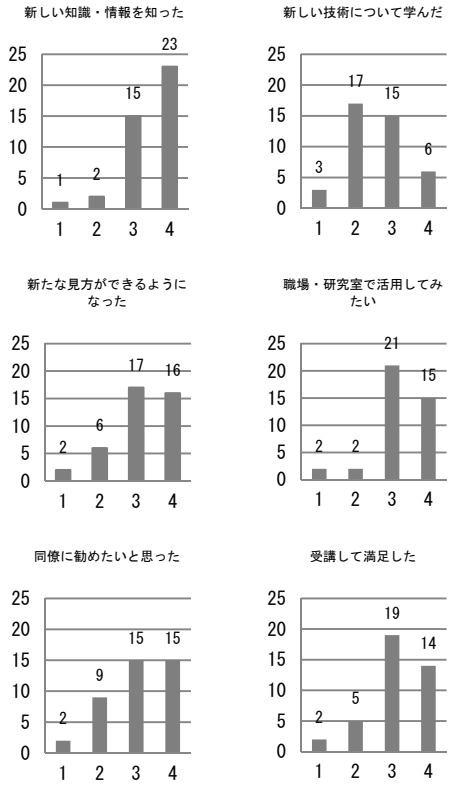
【職階】教授(1)／准教授(1)／講師・助教(19)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(10)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(4)／その他(2)／無回答(4)

【性別】男性(18)／女性(18)／無回答(5)

【学校種】東北大学(24)／東北大学外(11)／無回答(6)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：35 名（85.4%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・自立した書き手を育てるための指導のやり方
・佐藤先生：論文の構造→横断的な分析の箇所
・指導をする際に書き手に考えさせて直せるという方針に長期的にみて，よい書き手を育てることになると思う
・ライティング指導の考え方について，知ることができた
・理系学生への指導に文系チューターを導入することができるという点
・writing 指導
・論文を書くためのストラクチャーである。「型」について，先に教えていただきたかった
・アカデミック・ライティングの指導法それ自体についての知識を様々な指導者が共有することができ，それぞれが有様的につながることができれば，より総合的な指導が展開されると感じた
・自分から教えるのではなく，相手を引き出すこと
・書き手の独り立ちを目指すという理念
・ライティング支援という事自体，あまり良く理解していなかった。単純に良い論文を自分が書ければ良いというものでなく，客観的な視野，姿勢が必要なことを知りました。自分自身論文力があるわけではないが，後輩の育成には今日学んだことを活用していきたいと思います
・ライティング支援者の育成方法
・佐渡島先生の話にあった３つの理念
・ライティングセンターの定義/考え方。チューター指導
・「添削するのではない」ということ
・早稲田のライティングセンターについて調べていたので，新たな情報が得られたと思いました
・「書かれたものをなおすのではなく，書き方を育てる」→添削ではない，という点は役に立ちそうと思いました。ただ各大学によって異なるので，実際に使えるかどうかはわかりませんが，理念としてはいいかと思います
・佐藤先生の講義は大変参考になりました。授業にとり入れられる工夫したいと思います
・佐渡島先生のご講演
・支援者としてのあり方
・未整理です，いろいろ出てきそうですが・・・
・TA の役割
・専門性は必ずしも問わないということ。
・早稲田の事例。支援者の姿勢。
・理念・運営についてはイメージでまた
・KWS の３者チュートリアル
・添削しないこと
・チューターによる支援の方法，工夫

3.　わかりにくいと思ったこと

・何度も同じ間違いを繰り返したり，修正しなかったりする学生に対して，どう対応するべきか？
・上記について，３名が３様の見解で，アカデミックライティングの基礎的構造が明確に分からないままでした
・各大学の特性の上に成立しているが，これが他大学で実現可能かどうか不安に感じた
・佐藤先生のレジュメが所々示された部分が反映されておらず，書きとりに手間どってしまったのが残念でした
・具体的な教育の仕方
・ライティング支援というものが，申し込み時によくわからなかった。東北大学として，ライティング支援のシステムをもっとしっかり作ってほしい
・佐藤先生の活動について情報が少なく，シラバスについて理解できませんでした
・論文の構造が分野によって異なるという点では，分野横断的なアカデミック・ライティングの指導が可能かどうか，疑問に思いました
・私の今の精神状態があちこち飛んでますので・・・
・組織の中でどのように実践していくか
・３つ目の講演
・ライティングセンターが必要，作るというところにもっていくまでの取り組みなどもいかがいたかった
・わからん相手に具体的にどうするべきか

4.　セミナーに関しての意見・感想

・とてもためになりました。ありがとうございました
・小保方晴子が早大に博士論文を提出したそうですが，早大ライティングセンターを利用したのでしょうか？（笑）
・ぜひライティング支援の取組事例や体制比較に関する内容を企画して頂きたい。本日はたいへん参考になりました。ありがとうございました
・もう少し質問時間を取ってもらいたかったです
・今日は新しい可能性を多くの方々に開くであろう。機会をほんとうにありがとうございました

No.12-1：ライティング支援者を育成する（2014.3.12）
ワークショップ1：書き手を尊重するライティング支援

佐渡島紗織（早稲田大学）

回収率 ＝81.8%(18/22)

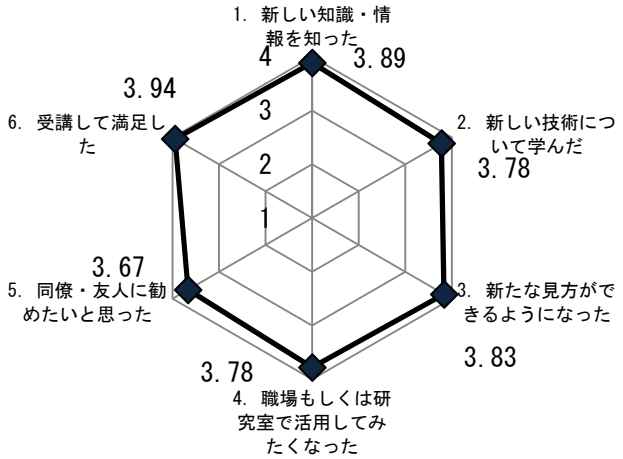
回答者属性(N=18)

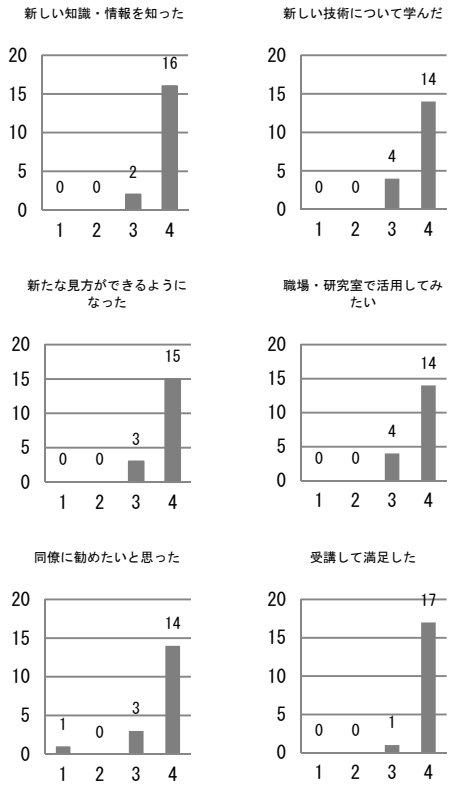
【職階】教授(0)／准教授(1)／講師・助教(8)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(3)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(2)／その他(0)／無回答(4)

【性別】男性(4)／女性(10)／無回答(4)

【学校種】東北大学(8)／東北大学外(6)／無回答(4)

1.　参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：18 名（100%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・話の聞き方，相手ののばし方
・支援することと単に教えることとの違い，難しさを実感でき，とても勉強になりました。今後の糧としたいと思います
・どこまでしっかり「聞」けばいいのかということ。つい指導したくなりが，書き手が指導を求めてきても，まず書き手自身に考えさせ，気付かせるのが大事だということ
・学生が気付かせるということは，教育自身がそのことをしっかりと目覚し，そうできる「skill」が必要であることが理解できました。今後のとりくみの中で教員自身もトレーニングが必要であり，そこに他者評価の視点も考えました
・チュータリング，実際やってみると難しかったです。うまく引き出せる力を身につけたいと思います
・チューターや支援者の心がまえや必要な資源のようなことを検討する機会となった
・気付きを促す対話や書き込み作業など，どのような視点で支援すればよいかが明確になった
・ライティング支援者としての立ち位置や考え方等を学ばせていただいた
・気付きを促すポイントが明文化されていること
・文章を書いて相手に対するコミュニケーションの取り方。（書き手に気づかせたり，引き出したりすること）
・実際に行っているのをみて，大変難しいものだった。どうしても，口を出して，手を出してしまいがちで，帰ってからの指導を考えなおしたいと思った
・着付きを促す，発問方法について役立ちました
・ライティング支援のあり方

相手を引き出すコミュニケーション，音読ピアレビューの重要性

3. わかりにくいと思ったこと

・具体的なやり方
・目標をどう設定するかという点がわかりにくかったです
・支援者育成のために，具体的にどの部分を生かしたらよいのか
・「想」

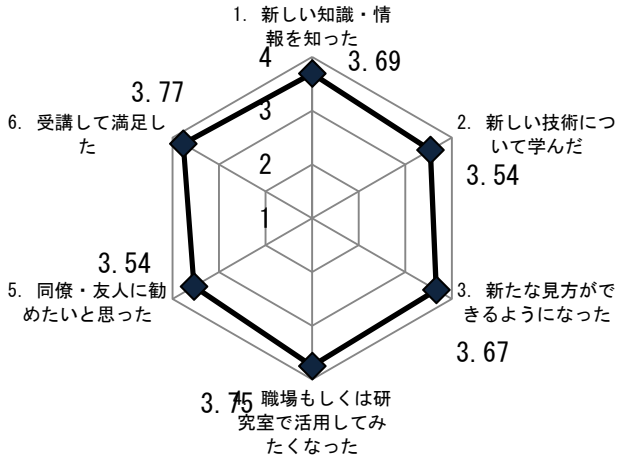
4. セミナーに関しての意見・感想

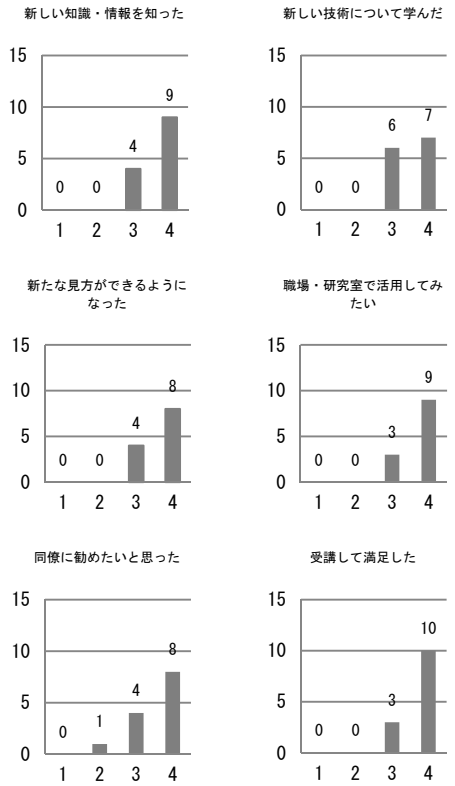
・体験という形で学び，学生の気持ち，チューターの気持ち，それぞれの立場に立つことで，私自気付きをえた。
・とても楽しいワークショップでした。支援者もしくはそれらを育成する立場の方々が同じような目的意識，問題意識を持っていることを知ることができ，モチベーションが上がった
・出来れば一日ワークショップで体験させていただきたいです
・ワークショップの時間にもう少し余裕があった方が良かったと思います
・もう少し時間があると良かった

No.12-2：ライティング支援者を育成する（2014.3.12）
ワークショップ2：IMRD の英語科学論文を指導して（WS）　　片山 晶子（東京大学）
みよう-- 実践チューター訓練

回収率 ＝100%(13/13)
回答者属性(N=13)
【職階】教授(2)／准教授(0)／講師・助教(7)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(2)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(0)／無回答(1)
【性別】男性(6)／女性(5)／無回答(2)
【学校種】東北大学(8)／東北大学外(1)／無回答(4)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：13 名（100%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- まだ検証に始まっていません，存分に楽しみました
- 今日，始めて人の論文の支援を行うことができ，本当に勉強になりました。特に，2 つ目の課題に関しては，自分自身のレベルとおそらく変わらないであろうもので，かわりにくいと思っていたが，自分の気づかない部分にミスが多くあることがわかりました
- 実際の英語論文執筆における各項目の指導法
- 人が自分で気付くような伝え方。研究分野によってスタンダードはことなるが，ペーパーの書き方の支援はおなじように行えるという点
- 演習形式
- 実例を用いて論文の構成について考えさせる方法は実践したいと思った。添削ではなくて，自主的に書き直せるように指導したいと思った
- 今後指導するために役に立つ知識だけでなく，自分が論文を書くために必要な知識を学べた
- 英語ならではのポイント
- アブストのまとめ方など

3. わかりにくいと思ったこと
- それほどありませんでした

4. セミナーに関しての意見・感想
- ワークショップがためになった
- 指導法について，直せるスタンス（自分で気付かせる）考え方が興味深かった
- 前半部分は全く不要と思いますので，本ワークショップの時間を長くできたら良かったと思います

No.12-3：ライティング支援者を育成する（2014.3.12）
ワークショップ3：論文の展開パターンを見出し、使ってみよう

佐藤 勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 ＝80.0%(12/15)

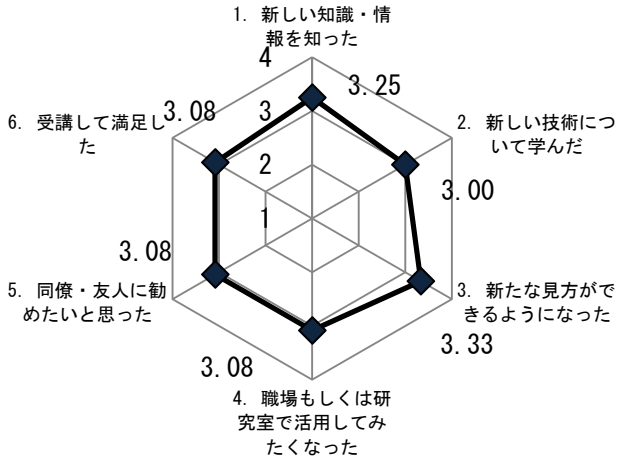
回答者属性(N=12)

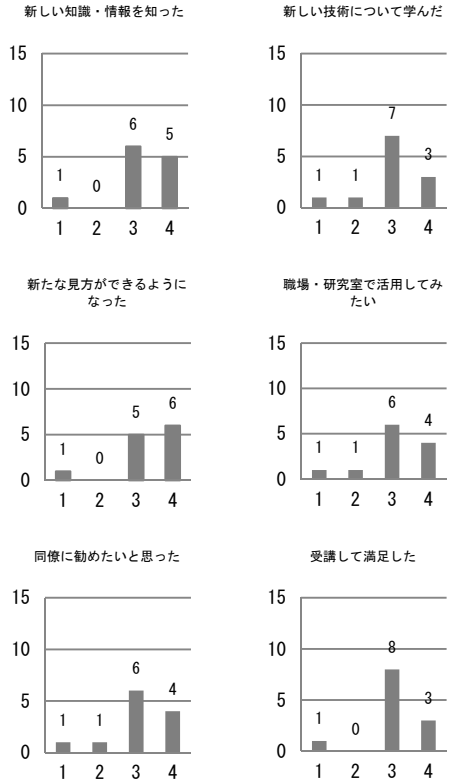
【職階】教授(0)／准教授(0)／講師・助教(0)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(8)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(3)／無回答(0)

【性別】男性(5)／女性(6)／無回答(1)

【学校種】東北大学(9)／東北大学外(2)／無回答(1)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：12 名（100%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・「ライティング」「自律した」というキーワードが心に刺さった。答えを教えるのではなく，「育てる」視点の大切さを改めて認識した
・WS でもらった論理展開テンプレ。わかってはいたが，教えるときに役に立ちそう
・論文の書き方
・展開パターンのワークで様々なヒントを得ることができた
・様々な分野の方からの意見が新鮮でした
・序論に絞った内容でしたが，いろんなパターンがあることが知ることができた
・論文の書き方支援をする際に論理的な書き方を考えるだけでなく，分野によってスタイルが異なることも改めて意識する必要があることを認識した
・文章の全体的な構成を実践的に学ぶことができた
・サンプル論文から構成要素を抜き出し，パターンをあてはめる
・論文の構成
・わかっているつもりではいるけれど，改めて体系を教わると，多角的に論文を読めるようになると思った

3. わかりにくいと思ったこと

・具体的なライティング室の様子（ライティング指導）が少しわかりづらかった。指導の様子などムービーがあると良いかもしれない
・内容が多かったと思いましたが，楽しく学べました
・ワープショップで具体的に何の作業，議論をすればよいのがわりにくかった
・分野ごとの論文の構成
・分類規準が不明確で余計に混乱した
・先行研究と研究背景の違い

4. セミナーに関しての意見・感想

・もうすこしワープショップの時間が長くても良いと思う。前半の講義の時間はもっと短くて良い

・ワークが多く，全てできなかったのがもったいない
・ありがとうございました
・もう少し，時間がゆっくりとれるとより理解が深まったと思います

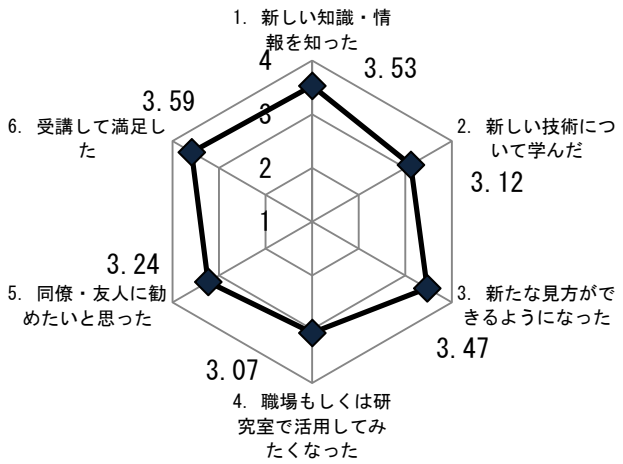
学生支援力形成関連　コード：H（Health & Welfare）

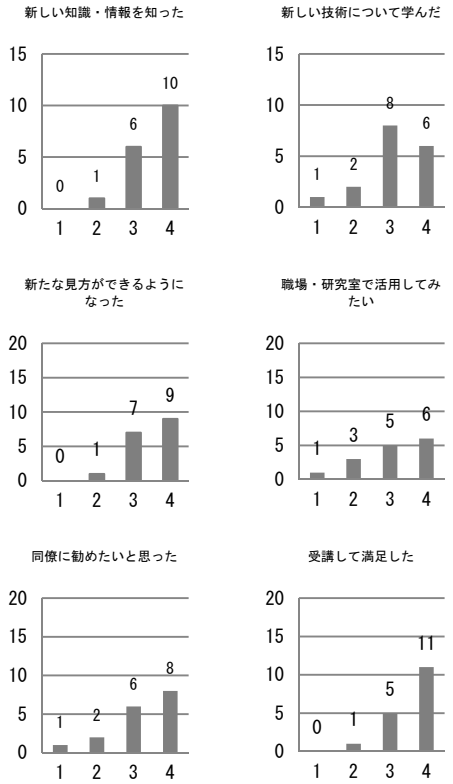
No.13: キャリア指導の理論と実践 (2013.10.17)

船津静代（名古屋大学）

回収率 ＝68.0%(17/25)
回答者属性(N=17)
【職階】教授(0)／准教授(4)／講師・助教(2)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(6)／その他(3)／無回答(2)
【性別】男性(7)／女性(7)／無回答(3)
【学校種】東北大学(7)／東北大学外(7)／無回答(3)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：16 名（94.1%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・軸を持って行うこと。覚悟で決めて，社会に送り出す最後のとりでとして，そんな意識の部分でハッと気づかされることがあった
・今の学生の話が聞けて，分かってよかったです
・キャリア指導の際に，大学全体の中での自分の役割を意識すべき，という点は大変参考になった。正課と課外の比較は非常に興味深かった
・キャリア教育，名大の事例
・「キャリア」についてあらためて考えるきっかけになった
・実践に役立ちそうな本
・大人から見た若者の印象を聞けたこと
・「キャリア」「支援」のキャリアのあとにある「どうするか」「誰が」「何を」という部分が大事であるということ。大学側や個人の意志によって変わってくるということ
・Ⅲ．キャリア指導の方策　1.正課教育と正課外教育　　2.それぞれの強み，弱み
・現代の学生の質について深く認識する事が出き，感謝しています
・改めてキャリア指導している自分について考えるきっかけとなった点
・キャリアの定義，４視点，キャリアに対する意識
・「キャリア」という定義は個人の意志ではなく，高等教育機関としてのポリシーを下に共有しなくてはいけないという点
・キャリア指導：正課教育，課外教育について

3. わかりにくいと思ったこと

・実践の話が多い分，理論の話しが少なかったのが残念でした。価値観などの話が足りなかった
・キャリア指導の具体的な活動がよく分からなかった
・スライド資料が手持ち資料として配付されていなかったので，メモを取るのが大変だった。持ち帰って復習するためにも資料を配付して欲しかった
・実践を裏づける理論情報（出典など）がほしかった点
・マスに向けての講義の際にどこまで深堀した教育をするかとう話について具体的にどこまで行えば良いのかが明確にならなかった，本学の課題であったので，ヒントを欲しかった

4. セミナーに関しての意見・感想

・初めて参加しました。参加できて，ほんとうに意味ある時間になりました。いろいろ考えました
・講演だけでなく，発言や討論等の参加を捉されたのが楽しかった
・時間が短い
・実践的なノウハウを知りたかった
・参加者との討論時間をもう少し増やしてもらえると有意義なセミナーになったように思う
・個人対応，マスでの対応，正課と正課外の具体例やシラバス等実践例を知りたいと思います。学生の未来を案じる想いも，悩みも一緒であることに安心し，「相談は教育の一環」は名言だと思います
・貴重な機会を提供いただきありがとうございました。次回もぜひキャリア開発のセミナー開催を期待しております
・現代若者の事情について，個人的にはこれに特化したものを聴講したいと思いました

No.14: 発達障害のある学生と大学教育 ーアスペルガー障害と注意欠如・多動性障害（AD/HD）を中心としてー (2013.11.26)

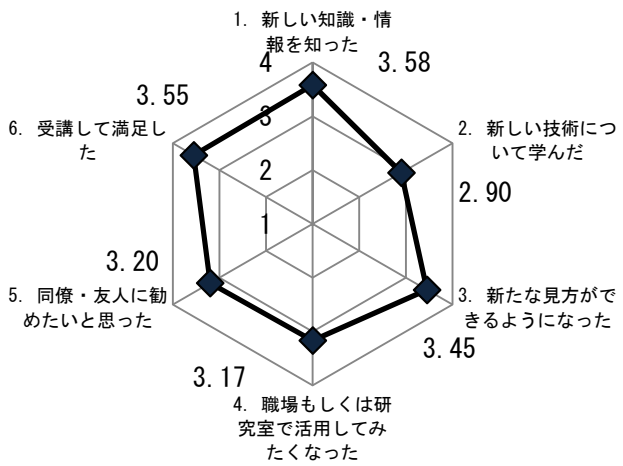
川住隆一・田中真理（東北大学大学院教育学研究科）

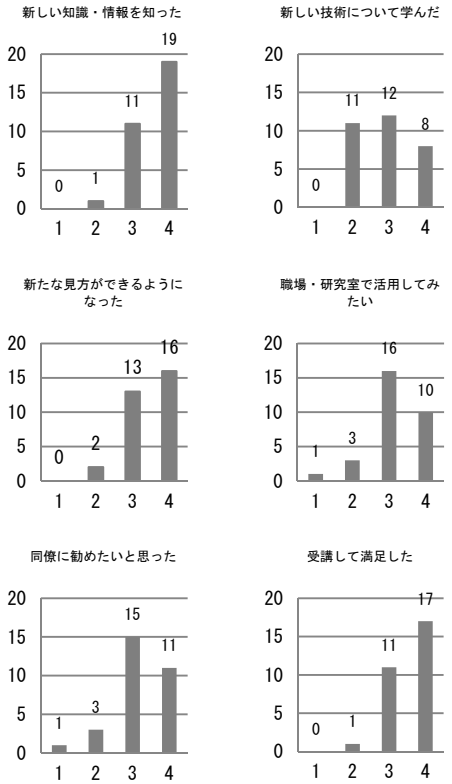
回答者属性(N=31)

【職階】教授(3)／准教授(3)／講師・助教(3)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(2)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(10)／その他(8)／無回答(2)

【性別】男性(16)／女性(13)／無回答(2)
【学校種】東北大学(12)／東北大学外(16)／無回答(3)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：31 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・学習障害に該当しそうな学生を数年わたり指導した経験がある。後からであるが，よく理解できた
・①高校での実績があれば，大学入試時に配慮がされるということ。②事例 1 の中から，作業を依頼する際は，細かく丁寧にするということ
・「障害のわかりにくさ⇒多様な支援の流れ」の資料はたいへんわかりやすく
・AD/HD の方々への対応

・田中先生の事例が大変参考になった。とても具体性に富む内容であり，本人に告知するかしないか，本人のニーズ，保護者のニーズ，診断書のある or なし，など，興味深い内容であった。本人に知らせたくない，保護者の心情もわかる
・本人，保護者，周囲のニーズに応じた支援の難しさがあり，診断ではなく，成長モデルが大事であると改めて感じた
・教員が困っても学生相談所に相談できると初めて知った
・発達障害への支援
・発達障害の事例のお話しから，具体的にイメージできるようになった
・障害それぞれの特徴をあらためて知ることができ，本学の学生の中で，今まで”もしかして”と考えていた学生があてはまることが分かり，今後の支援の方法を改める必要があることが役に立ちそうです
・「発達障害」という診断にこだわらず対応を考えるべきということ
・特に新しく知ったことはなかったが，漠然と知っていた「セレター試験での配慮」が 95 名だとかその内容とか，そして合理的配慮の義務とか「やはり現実に具体的な対応を求められる事態になっているのだ」ということが実感できた。(「多用した支援の流れ」のところで「本人のニーズ」「保護者のニーズ」「診断者」「障害告知」を確認して場合わけすることは　こちら（学校側）がやること，やれることを考える上で有効と思いました
・発達障害学生への具体的な対処法
・新しいデータもあり，参考になりました
・発達障害に対する視点を詳しく，はっきり，しょうじきにわかるようになった
・最後の質問タイムや田中先生での事例がよかった。現場では理論通り，一筋縄でいかないことも多いと思うので，困ったり悩みつつ当事者に関わっている方の話は参考になりました
・集団で役割分担をする
・資料やご講演いただいた内容すべて役立ちそうですが，川住先生の発達障害学生への支援の根拠のご説明，田中先生の事例による具体的支援のお話しは大変参考になりました
・支援が必要であり，”診断がありき”ではないという考え
・障害を持つ，持たないは，生徒への対応に関係ないという根本的なことを再確認させていただきました

3. わかりにくいと思ったこと

・田中さんの講演でスライド配布物がなかったのは，準備不足のように思われる
・「授業外の支援」の具体的な様子が，もっと知りたいと思いました。例えばですが，動画等で配信して頂けましたら，方法論を学ぶことができとても有難いです
・告知をどのように行っていくのか（どのように導いて行くのか）
・ばくぜんと理解はできるが，実践となるとまだまだ戸惑う部分があると感じた。先生達の水準までのひらきを支援にどうつなげていくのか課題が多い
・講演２の方で，少しスピードが早く感じた。別途資料がほしかった
・発達障害の内容
・就労した後までかかわることは難しいと思われるので，どこまで大学側や教員側ができるのが悩みそう
・①「発達障害」の定義　②”特性”はわかったが，結局ケースバイケースで対応するしかないのかというか
・討論の時，話が出たことでありますが，事例の発表の時，発達障害者の話，何が困っているかなど聞けたらよかったと思います
・田中先生が行っていたこと（学生をアルバイトにつなぐなどの）支援は個人的に行われている支援なのか気になりました。教員が気になる学生を見つけた場合，どこにつなげばよいのか，どう関わっていけばいいのかのシステムができているのかなど気になりました
・支援は多きにわたるため，はやり周囲との共有，協力が絶対必要であり，むしろ難しさでもある

4. セミナーに関しての意見・感想

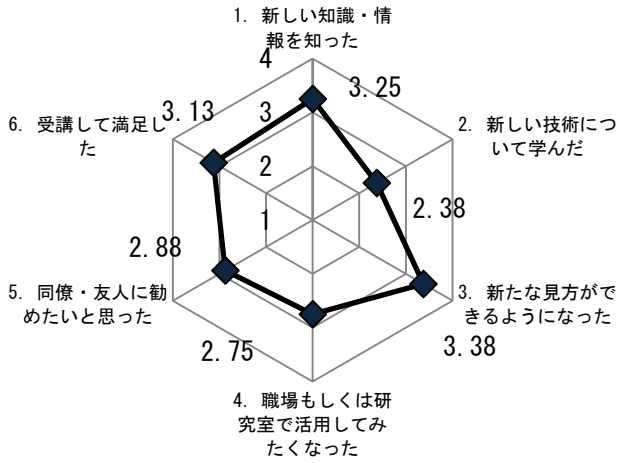
・最後に田中さんがおっしゃったように，具体的な事例を共有する場を増やしていくことはとれもいいと思いました
・発達障害，学習障害についての学生支援の在り方について，今後も継続して行っていただけると幸いです
・いろいろなプログラムを用意していただき，いつも参考にしています。ありがとうございます
・昨年にひきつづき参加しましたが，やはり普段とはちがう学問的な見地から発達障害をとらえることができて新鮮です。こころで昨年覚えて帰った「見守り」「配慮」「支援」の三段階の考え方は学校の現実の中でとても役に立っています。たぶん，今日の段落であまり考えていないことも　あとで資料を見返して現場で使っていくことになると思います
・東北大学には該当者は少ないでしょうが，ディスレクシアのお話も聞きたいです
・具体的なお話もあり，分かりやすく，大変参考になりました。ありがとうございました
・実際の支援は本当に難しいな，と感じました。学生の時に比較的にまわりのサポートや理解も得られやすいと思うのですが，社会人となるとやはり友人，教師等とのかかわりと違い，職種によっては他人とのかかわりも多くなるのでむずかしいですね
・(感想)ケースごとの話については，断定的なことが言えませんが。内容を聞いた限りにおきましては，周囲の心ない一言が目立つように感じます。そういったことを踏まえますと，全ての人に対してのコミュニケーション（対応）の質を大学教育で上げていくことを取り組むと，もっと障碍など関係ない，より良い社会を築けるような形に，大学から発信できるかと思いました
・大変勉強になりました，現在通信教育部で学ぶ学生の中にも発達障害の学生がおり，今回のお話を伺い，今後積極的に支援していく思いを新たにすることができました
・なんらかの形で議事録を配信していただけると，多くの方の勉強になると思います

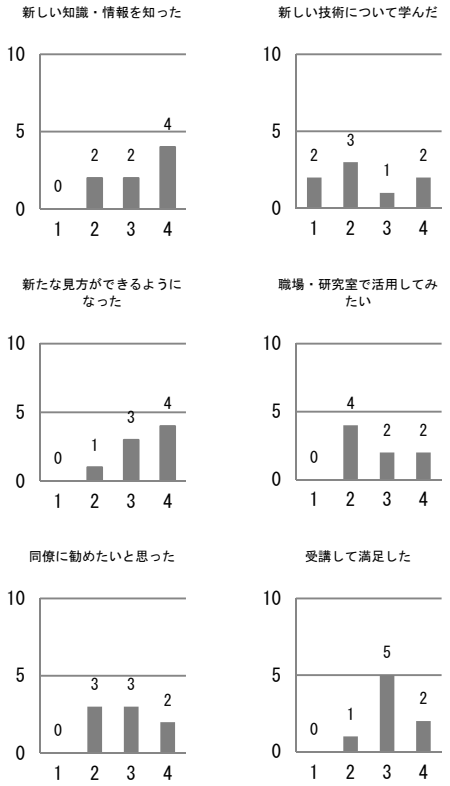
No.15: 学生支援の動向　ー修学支援とキャリア支援ー (2014.2.4)

沖 清豪（早稲田大学），望月由起（お茶の水女子大学）

回収率 =57.1%(8/14)
回答者属性(N=14)
【職階】教授(1)／准教授(2)／講師・助教(2)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(1)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(1)／無回答(0)
【性別】男性(8)／女性(0)／無回答(0)
【学校種】東北大学(1)／東北大学外(6)／無回答(1)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：7名（87.5%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - データに基づいた分析であった点
   - 現状と課題が端的に整理されていた点
   - 大学の規模ごとに体制作りの特徴があるとのお話は興味深く思いました
   - 学生のキャリア支援について，大学サービスの向上（対学生）
   - 客観データによる実態把握
3. わかりにくいと思ったこと
   - 調査結果は必要かも知れないが，個々の大学の取組みが必要ということであれば，講演者の大学ではどうなっているかを知ったほうが具体的でわかりやすかったと思う
   - 概括的なお話で，具体的な中味が良く分からないところもありました。時間の関係上，やむをえないでしょうけれども
   - データが白黒（レジュメ）
   - 理念や大学以前の学校家庭状況の変容との関連
4. セミナーに関しての意見・感想
   - 資料はカラーにしてほしい
   - 高等教育機関に入ってくる学生の（様々な観点からの）変化を把握し，大学入校以前の段階に対しての働きかけについて考えることも有用と思う

マネジメント力形成関連　コード：M（Management）

No.16：米国高等教育における学習成果の診断の実際ー米国での IR 実務経験からー (2013.4.5)

本田　寛輔（メイン大学）

回収率 ＝70.4%(19/27)

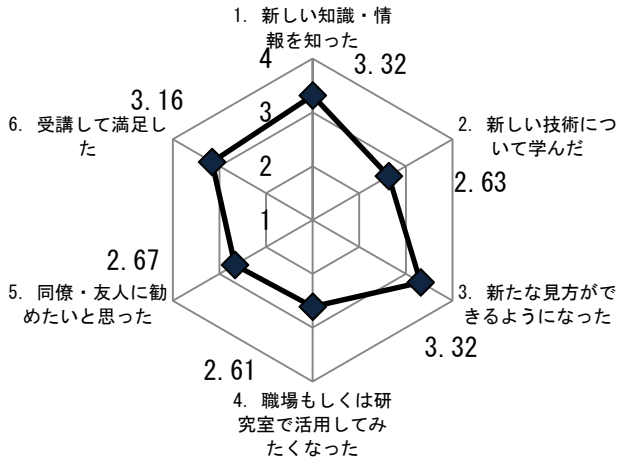
回答者属性(N=19)

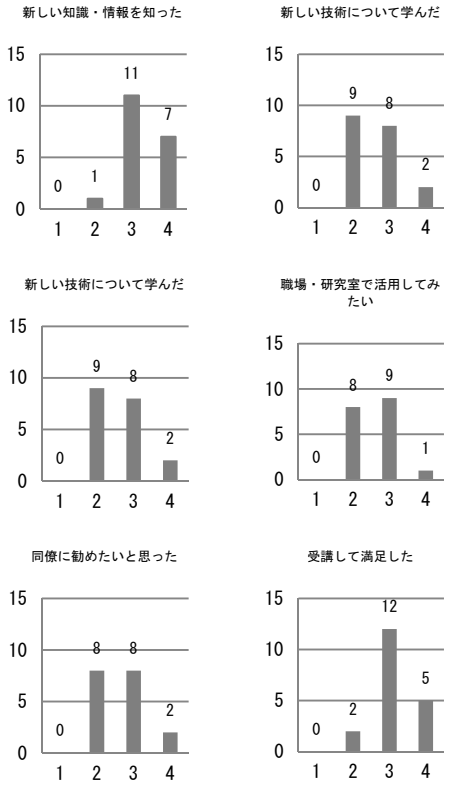
【職階】教授(3)／准教授(1)／講師・助教(1)／管理職教員＜学長～学部長＞／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(1)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(5)／その他(7)／無回答(1)

【性別】男性(4)／女性(14)／無回答(1)

【学校種】東北大学(8)／東北大学外(7)／無回答(4)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：17 名（89.5%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 定義の明確化，学内の意思疎通が米国でも不可見。必ずしもうまくいっているわけではないという事実
- 外国と日本の関係
- 米国の先進事例は単に模倣するのでなく，自分なりの価値判断が重要だと思った
- アメリカの事情について，理想と現実はどの国もあるとわかった
- ルーブリックの活用法
- たくさんありました
- IR の領域の理解
- ルーブリック

3. わかりにくいと思ったこと
- 講師の方がどういう方法で業務を進められているか，十分には理解できませんでした
- 私個人の理解が，授業するレベルに達していなかった。職務と関係があまりなかった
- ルーブリックの予備知識を持たすに来たので理解が不足した
- 分野が違って，概念がわかりにくい
- IR の目的
- 具体的な成功例（現状で測定と改善の関係がうまくいっている事項）
- 学習成果の対象は知識なのか，人なのか，もし「人」ならばどうして測定／評価/改善するのか，できるのか
- 大学の人材養成の目的は何か？
- GPA ではなければ，どのように成績評価しているのか
- IR の定義

4. セミナーに関しての意見・感想
- セミナー自体はとても勉強になりました
- ありがとうございました

No.17: SDP 若手職員のための大学職員論 (2013.7.13)

石沢友紀（岩手大学），佐藤 恵（東北学院大学），亀谷純（宮城学院女子大学），杉本和弘・稲田ゆき乃（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 =100.0%(18/18)

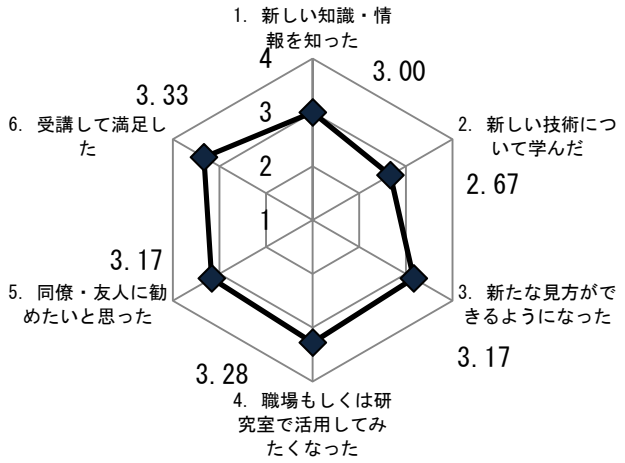
回答者属性(N=18)

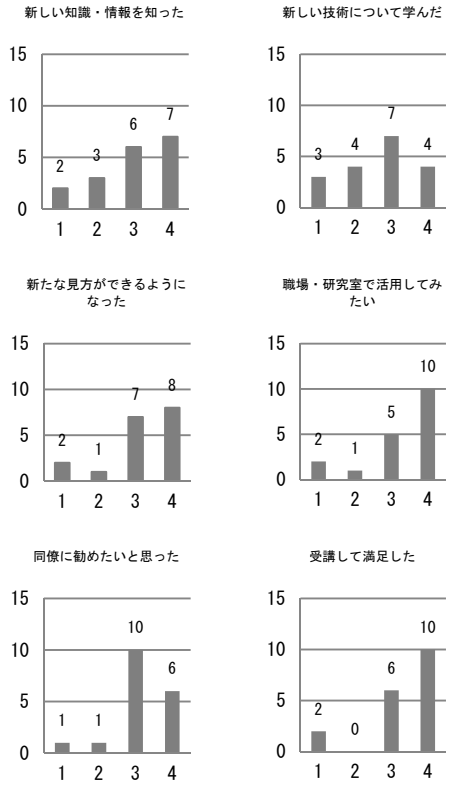
【職階】教授(0)／准教授(0)／講師・助教(0)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(18)／その他(0)／無回答(0)

【性別】男性(8)／女性(9)／無回答(1)

【学校種】東北大学(5)／東北大学外(12)／無回答(1)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：16 名（88.9%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 中堅職員による若手職員への講演（多様な職員の話を聞くこと）
- 先輩方のキャリア講演
- 自分自身も学び知識をつけることで，教員・上司とも対等な立場で意見交換できるということ
- 教職協働について，深く考えたことが今までなかったが，具体的な数字を提示してもらい，今後の活動に役立ちそうだと感じた
- 職員の専門知識の有用性
- 複眼的な思考を持つということ，日々業務に没頭するがあまり，主観的に考えがちだが，多方面から考えることが大事だと思った
- 意識の持ち方
- 学生を想定して議論したこと，何回かやるうちに新たな方策が生まれると思った
- 講演を開いて自身のモチベーションの工場に役立ちました
- 考えを視覚化することの重要性を再認識しました
- ワークショップ内で他の大学が行っている取り組みについて聞くことができて，アイデアをいただくことができた
- 常に HOW で考える，10 年を見て働く
- 色々な大学の職員が集まったが，共通の問題を抱えていることがわかった。面白い取り組みがあったので，持ち帰って検討してみたいと思った
- 同じような考えや意見をもった人たちがいることをしりました
- 教職協働
- 自分が普段，問題をしていない事柄が他のセクションでは問題となっていることがわかってよかった
- キャリア形成，協働について
- 石沢さんのキャリア

3. わかりにくいと思ったこと
- ディスカッションのゴール地点
- 学生支援の在り方について
- ワープショップテーマの１つ，議論の落としどころが・・・
- 講義がもっと実体験にフォーカスした方がいいかなと思った，一般的な話ではなく
- 上述したこが逆の意味でわかりづらいものであった
- ワークショップが深まらない。タイムスケジュールが分かりにくい。各自，大学で取り組んでいることや，実施していることを知ってから参加してほしい。大学の代表という意識がないと，学びあえない

4. セミナーに関しての意見・感想
- とても良い経験の機会になりました，ありがとうございました
- まとめる用紙のサイズ・・・・・・模造紙サイズ&もう少し付箋がコンパクトなサイズだとありがたいです
- とても参考になりました，ありがとうございました
- 大変参考になりました，ありがとうございます

・非常に面白かったです
・ワークショップの進行が少し速かったです
・他大学の職員の方と生で触れあえたことが一番良かったことです，今後もこのようなワークショップに参加したいです
・グループワークはどうしても時間が足りなくなってしまいますね，それでも，他大学の方と議論する時間をいただけるのはとても貴重な機会です，ありがとうございます
・座学の時間が少し長く感じました，ワークだけでも有意義でした
・時間が足りなかったが，時間を意識することがたのしかったです
・うまくしゃべれなくて残念でした
・企画いただきありがとうございました
・ワークショップがやりにくい，ファシリテーターの力が必要だと思う

No.18: 大学マネジメントに求められるもの－期待される能力と人材育成－ (2013.7.27)

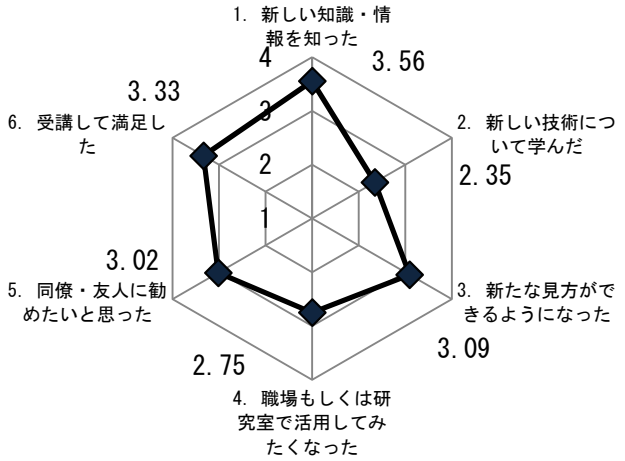
羽田貴史（東北大学高等教育開発推進センター），大塚雄作（京都大学），両角 亜希子（東京大学），夏目達也（名古屋大学）山田剛史（愛媛大学），山本眞一（桜美林大学），杉本和弘（東北大学高等教育開発推進センター）

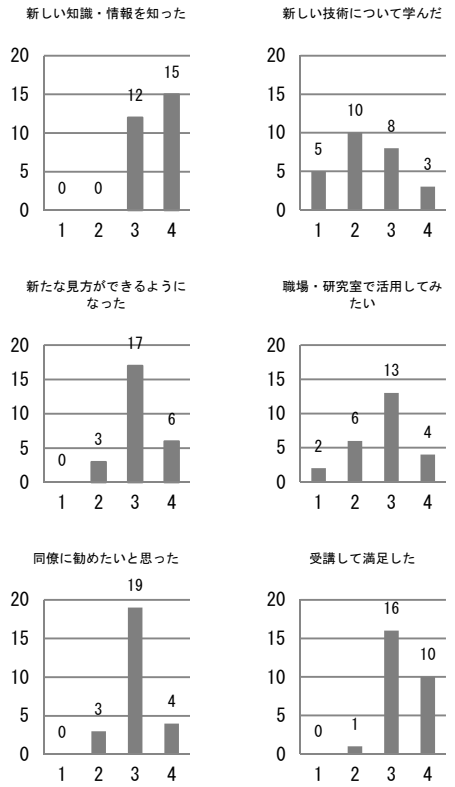
回答者属性(N=27)

【職階】教授(5)／准教授(4)／講師・助教(4)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(6)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(5)／その他(0)／無回答(2)

【性別】男性(21)／女性(3)／無回答(3)
【学校種】東北大学(7)／東北大学外(17)／無回答(3)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：27 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・管理職の思考の傾向を知ることで，ボトムアップによる提案で効率的な展開ができそうだと思った
・山本先生のお話はたいへんわかりやすかった
・各調査の内容
・教学マネジメントを教員のマネジメントへの関心などから調査から視ること
・教員に対する調査結果
・同僚研究者の研究動行を理解できたこと
・管理職の意思決定と運営の現状を報告内容と日頃感じている部分が明確になったので，活用していきたい
・両角先生，山田先生の分析は興味深かった
・大学（学園）における意思決定と運営に関すること
・データや実例が多く，学内でたとえ話などに活用できること
・両角先生の問題意識

3. わかりにくいと思ったこと

・「組織」をどう捉えて議論されているのかという点
・管理職の養成および資格や，任用制度についてどのように研究会では考えているのか見えない
・私学でのマネジメントにどう活用できるのか？私学に市場主義に則っているので今回の研究会では充足できませんでした
・実際には意思決定現場においてはもう少しややこしいことが多く，例えば話が迷走しているときにどうすればよいのかという点はわかりにくかった

4. セミナーに関しての意見・感想

・遠方から，或いは予算，日程の都合がつかなくて来場できない人への対応として STU などの動画配信（オンタイム，録画）を検討いただければ幸いです。資料も東北大学などの機関リポジトリに掲載して広く利用できるようにしてほしい。
・大学マネジメントに求められるもの－期待できる能力と人材育成－このタイトルについてどう考え，どう捉えていくのかを議論してほしかった。統一的な話は難しいのかもしれないが
・もう少し国際的な視点が加われば一層議論が深まるかと思いました。今日は貴重な機会ありがとうございました
・多様な報告があり，短時間で大変興味のある話を聞くことができたが，総括討論が中途半端になってしまった感じがあるので，報告を 2 回に分けて討論時間を増やすと，もっと内容を深められたのではないかと思われた。
・パネル時間をより長く
・討論の方向性が見え出せなのか，少しものたりなかった。
・大学経営人材の育成について，これだけの事例が集ったのは，初めてのことと思います。貴重な研究会でした。可能であれば，職員のマネジメントに関する発表・報告があって欲しかったと思いました。
・理論を解読するようなセミナーがあるとありがたいと思った。討論はどくとくのふんいきでおもしろかったです（ここだけの話的で）

No.19: リーダーシップと意思決定 (2013.8.3)

吉武博通（筑波大学）

回収率 ＝65.1%(28/43)

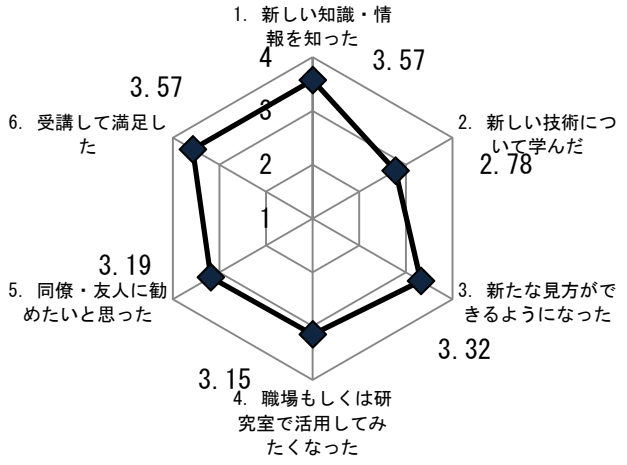
回答者属性(N=28)

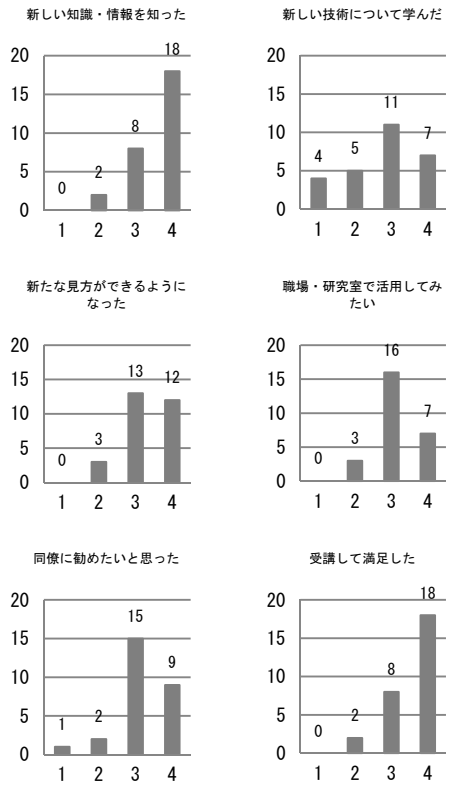
【職階】教授(7)／准教授(4)／講師・助教(1)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(2)／職員＜部長・課長以上＞(2)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(5)／その他(2)／無回答(2)

【性別】男性(21)／女性(3)／無回答(3)

【学校種】東北大学(7)／東北大学外(17)／無回答(3)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：28 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・管理職の思考の傾向を知ることで，ボトムアップによる提案で効率的な展開ができそうだと思った
・山本先生のお話はたいへんわかりやすかった

・各調査の内容
・教学マネジメントを教員のマネジメントへの関心などから調査から視ること
・教員に対する調査結果
・同僚研究者の研究動行を理解できたこと
・管理職の意思決定と運営の現状を報告内容と日頃感じている部分が明確になったので，活用していきたい
・両角先生，山田先生の分析は興味深かった
・大学（学園）における意思決定と運営に関すること
・データや実例が多く，学内でたとえ話などに活用できること
・両角先生の問題意識

3. わかりにくいと思ったこと

・「組織」をどう捉えて議論されているのかという点
・管理職の養成および資格や，任用制度についてどのように研究会では考えているのか見えない
・私学でのマネジメントにどう活用できるのか？私学に市場主義に則っているので今回の研究会では充足できませんでした
・実際には意思決定現場においてはもう少しややこしいことが多く，例えば話が迷走しているときにどうすればよいのかという点はわかりにくかった

4. セミナーに関しての意見・感想

・遠方から，或いは予算，日程の都合がつかなくて来場できない人への対応として STU などの動画配信（オンタイム，録画）を検討いただければ幸いです。資料も東北大学などの機関リポジトリに掲載して広く利用できるようにしてほしい。
・大学マネジメントに求められるもー期待できる能力と人材育成ーこのタイトルについてどう考え，どう捉えていくのかを議論してほしかった。統一的な話は難しいのかもしれないが
・もう少し国際的な視点が加われば一層議論が深まるかと思いました。今日は貴重な機会ありがとうございました
・多様な報告があり，短時間で大変興味のある話を聞くことができたが，総括討論が中途半端になってしまった感じがあるので，報告を２回に分けて討論時間を増やすと，もっと内容を深められたのではないかと思われた。
・パネル時間をより長く
・討論の方向性が見え出せなのか，少しものたりなかった。
・大学経営人材の育成について，これだけの事例が集ったのは，初めてのことと思います。貴重な研究会でした。可能であれば，職員のマネジメントに関する発表・報告があって欲しかったと思いました。
・理論を解読するようなセミナーがあるとありがたいと思った。討論はどくとくのふんいきでおもしろかったです（ここだけの話的で）

No.20: オーストラリアにおける研究倫理政策と実践 (2013.10.8)

Marc FELLMAN（豪州ノートルダム大学）

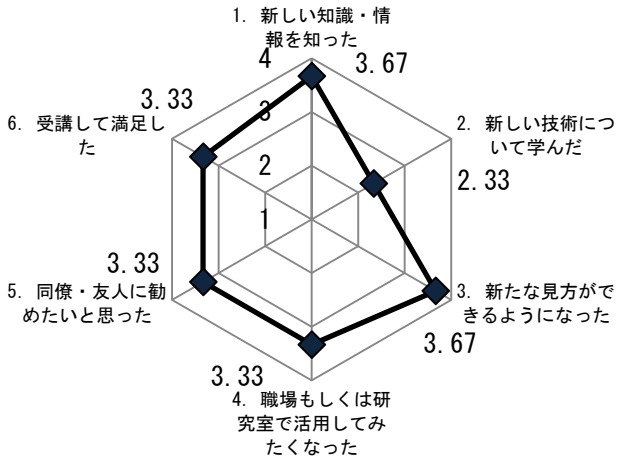
回答者属性(N=3)

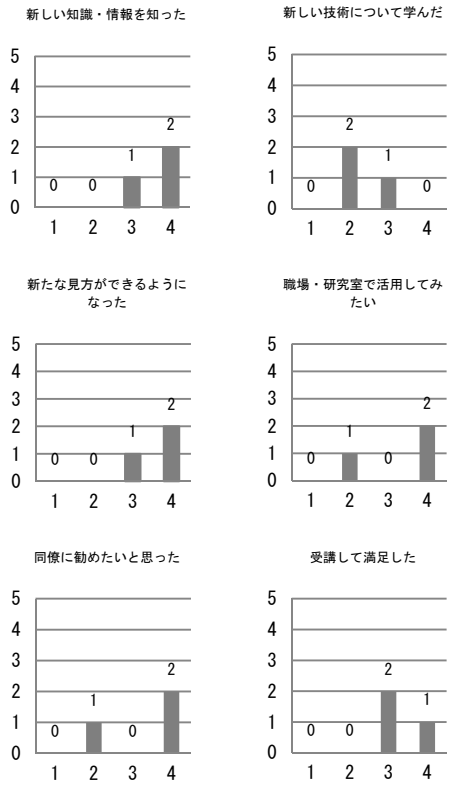
【職階】教授(0)／准教授(0)／講師・助教(0)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(1)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(1)／その他(1)／無回答(0)

【性別】男性(3)／女性(0)／無回答(0)

【学校種】東北大学(1)／東北大学外(1)／無回答(1)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：3 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - オーストラリアにおけるリサーチマネジメントの取り組み
   - 研究者にとって有効に利用できる相談システムは不可欠である
3. わかりにくいと思ったこと

4. セミナーに関しての意見・感想
   - 興味深いテーマであり，また，今ホットな話題であった。もっと参加者が集るテーマと思った

No.21: 若手職員のための大学職員論（２）～先達からのメッセージ～ (2013.10.26)　**早川浩之（岩手大学），高橋豊（仙台白百合大学），船田正幸（東北大学法務課）**

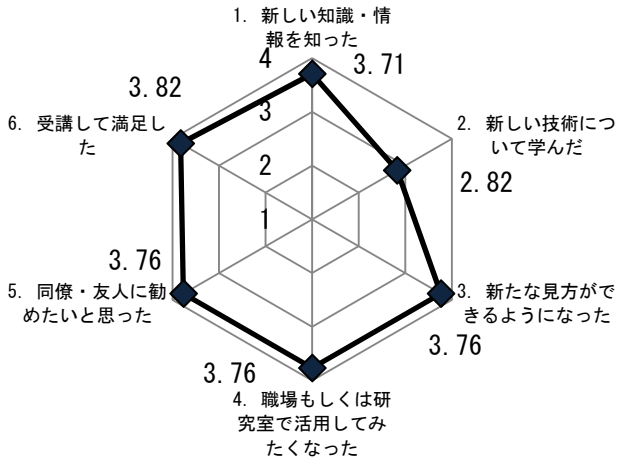
回答者属性(N=17)

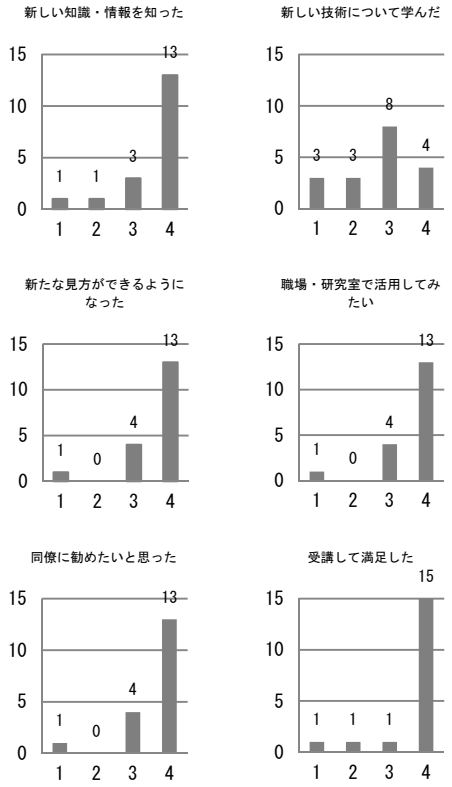
【職階】教授(0)／准教授(0)／講師・助教(0)／管理職教員＜学長～学部長＞(0)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(0)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(16)／その他(0)／無回答(1)

【性別】男性(10)／女性(5)／無回答(2)

【学校種】東北大学(6)／東北大学外(10)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：17 名（100.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 3 人の講師の方のお話はとても印象的だった
- ①自己啓発の重要性②10 年後 20 年後を見据えた行動をする　課長のみなさんの体験談から
- 他大学の経験豊富な課長さんのお話しを聞いたこと
- 上司の経験をふまえて，係員のうちにやっておくべきことについての気付きを得られた
- 「当事者意識を持つ」というワード
- 自分だったらどう対応するか，問題を自分のこととして，考えるということを，今後自分の職場でも，実践していきたいと思った。ほかにも内容がもりたくさんでとても濃いセミナーでした
- 船田課長のおっしゃっていた，「課長目線で考えてみること」
- できない理由よりできる理由を考えること
- 当事者意識，スペシャリスト，ゼネラリストの考え方
- 当事者意識をもって業務に当たることが大切だと感じた
- 自己研修の方法として，大学院に行くという手段があったこと
- 必要な能力とそれを身につけるための方法，マインド
- 物事をポジティブに考えること。前例に捉われずに物事を考えること
- 上司に自分を置き換えて，自分ならどうするかとシミュレーションをすること
- シミュレーションを常にすること。ポートフォリオ（職員版）を作ること
- 課長お三方の講演。ワークショップ

3. わかりにくいと思ったこと
- グループワークをする必要性

4. セミナーに関しての意見・感想
- アイスブレイクの時間をもう少し取ってほしかった。初対面同士全然打ちとけられず議論がテンポ良く進まなかったので
- ワークの時間がもう少しほしかった
- 非常に勉強になりました。ありがとうございます
- 課長クラスの方のお話は大変説得力があり，心にひびいたと思います。また，参加された課長のみなさんも今後も様々な形でご

支援いただけると思うので，双方にとっても良い機会だと感じました
・大変よい刺激となりました

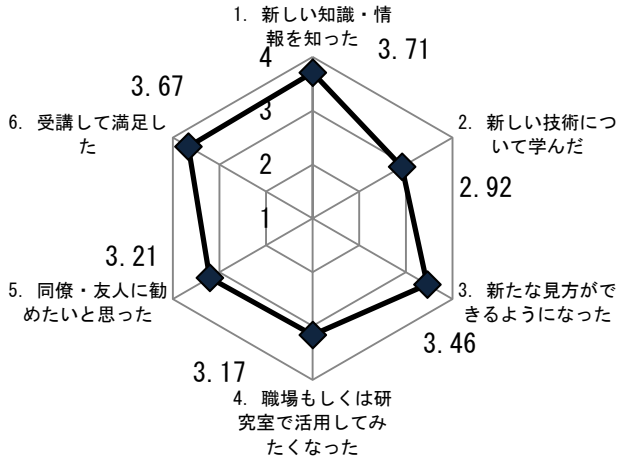
No.23: 大学の教育マネジメントをどうすすめるかー新・大学管理運営論(2013.12.21)

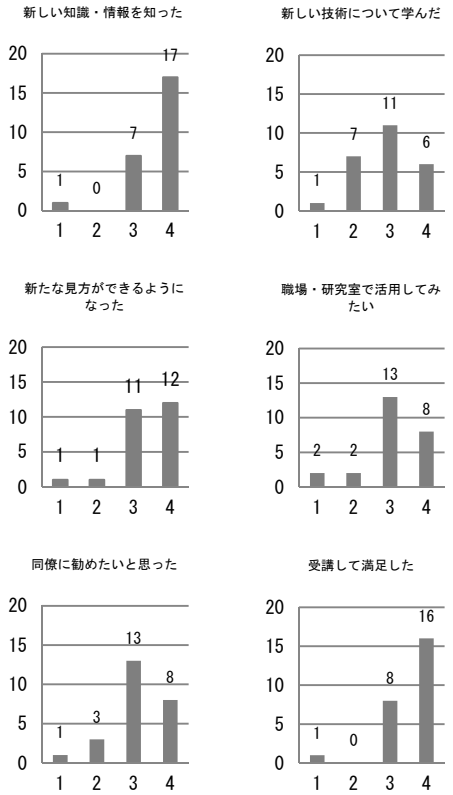
羽田貴史（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 =86.2%(25/29)
回答者属性(N=25)
【職階】教授(4)／准教授(3)／講師・助教(1)／管理職教員＜学長～学部長＞(2)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(5)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(4)／その他(6)／無回答(0)

【性別】男性(16)／女性(9)／無回答(0)
【学校種】東北大学(2)／東北大学外(21)／無回答(2)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：24 名（96.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・大学における”自由”の意味，定義を成員の中で共通理解をつくっていかいないといけないと感じました。本当のガバナンスをめぐる議論の中でぬけているところを思います
・Decision Support をよい効果的に行うことができるような気がした
・大学の組織構造。　大学マネジメントがうまくいかない理由
・大学におけるマネジメント及びガバナンスの定義，あり方について明確に学ぶことができる
・マネジメントの考え方について，とくに H.サイモンの指摘は，授業デザインやカリキュラムデザイン等にも通じると感じました
・法令を関連づけて考えるという方法
・大学組織と組織文化，企業における経営とを比較の視点ができたこと
・ガバナンスとマネジメントの整理
・判例，法令解釈
・現状の整理
・教育小六法やその他の持つべき基本書籍（法律や解釈について）について知ることができた。これらをふまえて論理的に考え，議論すべきだと思った
・改革を行う場合，効果を伝える必要があるが，メンバーが同じ価値観を共有しているとは限らないので，改革の前提などもわかりやすく説明することが大切
・法体系と大学運営
・認知的限界の件
・法令
・研究に効果のある資料を教えていただいた
・大学の歴史とマネジメント論

・基礎的な概念の理解ができた。
・教育の自由，研究の自由についての議論

3. わかりにくいと思ったこと

・大学マネジメントの何が問題なのかがわかりにくかった。大学マネジメントを効率的に推進するにはどうしたらよいか
・文科省は通達が少ない。そのへんが現場で混乱を生む，例えば 15 日の根拠，90 分の根拠，そのあたりの事情なども知りたかった。　ガバナンスとボードの関係
・教授会の役割
・法にかかる部分の関連
・法的解釈
・時間がなかったせいもあるが，21～24 ページの大学運営の方向のグラフから導かれた部分
・最終的にどうするのか？
・P.7 私立大学の図，理事長＝学長の表現？
・教育評価や GPA の導入→教育内容、質に変遷、影響は与えるのではないか？
・2005 答申についての言及はどうでしょうか
・経営
・結論がよくわからない

4. セミナーに関しての意見・感想

・質問したいと思ったが，録画されていて何に使うのがよくわからないのは不安である
・PPT の最後の部分の教員に求められる能力だけでなく，職員に求められる部分も学びたかった
・興味深い文献を紹介頂き参考になりました
・本日は，たいへん勉強になりました。ありがとうございました。ただ，「最後のまとめ」の時間が少なく，残念でした
・遠方からおいでになっている方がいて感動しました

No.24: データに基づく教育改善 (2013.12.21)

山田剛史（愛媛大学），鳥居朋子（立命館大学），川那辺隆司（立命館大学）

回収率 =80.6%(25/31)

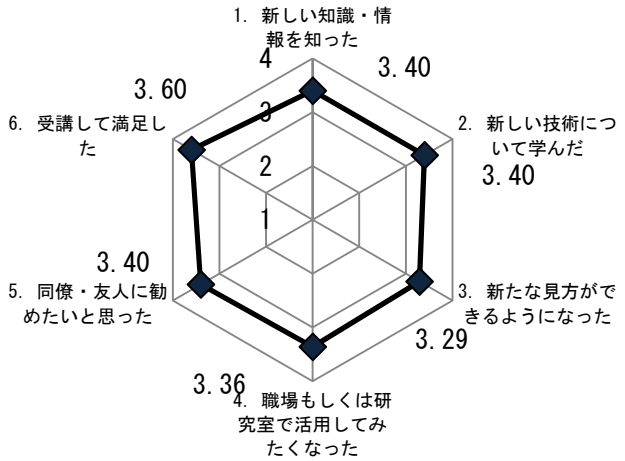
回答者属性(N=25)

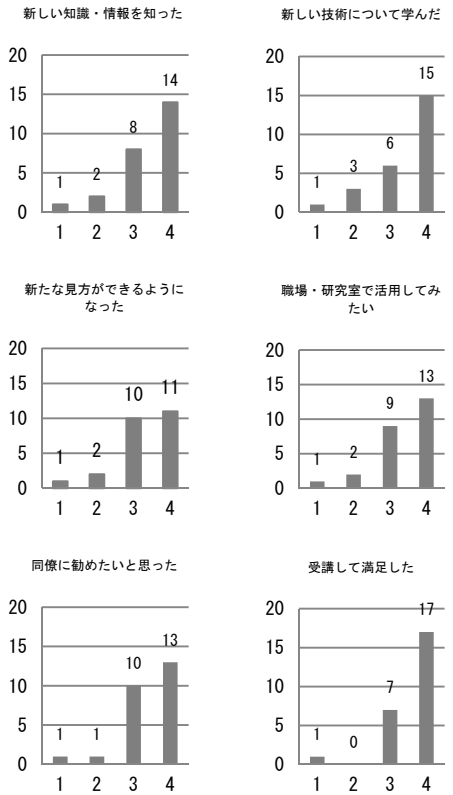
【職階】教授(5)／准教授(2)／講師・助教(3)／管理職教員＜学長～学部長＞(1)／博士課程(0)／職員＜部長・課長以上＞(2)／職員＜係長・主任・一般職員等＞(4)／その他(3)／無回答(5)

【性別】男性(10)／女性(9)／無回答(6)

【学校種】東北大学(2)／東北大学外(18)／無回答(5)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：24 名（96.0%）

2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・具体的な手順とチェックリストがよかったです（WS）。　話が具体的で理論とハウトゥーがわかってよかった（講演）
・立命館大学の事例，ワークショップ
・リサーチ，クエスチョンの導出の方法がわかったこと。　とくに「必要なデータを考える」のシートが便利。　→これを使って関係者で議論の場がつくれればよい（理想）
・グループによりワークショップの実施ができました
・IR の入門編として，考え方，Research Question の導き方，実施のための大事なポイント
・リサーチクエスチョンの作成手法
・リサーチクエスチョンから調査項目設定までのプロセス
・リサーチクエスチョンの作り方
・アンケートの際の有効な問いの立て方，また，それまでの道筋
・IR の枠組みと実際の方策を学習したこと。ワークショップを自分の所でも使えるかもしれないと思いはじめた
・「問い」の作り方（複数でやるべきということ）
・講義もワークショップも具体的であったこと
・IR ワークショップはレクチャーと組み合わせて，本学でもやっていかなければと思いました（すでに実施しているかもしれません）
・学習ポートフォリオについて，自分が考えていることが誤っていないことが確認できた

3. わかりにくいと思ったこと

・ポスターにしたほうがよかったかもしれませんね
・「アセスメントの 5 ステップ」の「説明」プレゼンがむずかしかった
・ポイントとしてはまとまっていたが，具体的事例についてもっと知りたかった
・仮説とリサーチ，クエスチョンの組みたての関係性
・わかりにくくはないが，もう少し単純化して方が良い

4. セミナーに関しての意見・感想

・グループに IR の専門家の方が見えたので，詳しいお話がうかがえて勉強になった
・IR の位置付けや活用方策がまだ大学によってバラツキがあることや，大学組織文化のちがいを考慮する必要性をあらためて感じることができた
・大変楽しかったです。ありがとうございました

PD＃24: 東北大 SDP「私のなりたい東北大学職員」(2014.1.11)	工藤淳平・結城峻一・水野貴江・半田智秋（東北大学），杉本和弘・稲田ゆき乃（東北大学高等教育開発推進センター）

回収率 ＝100.0%(16/16)

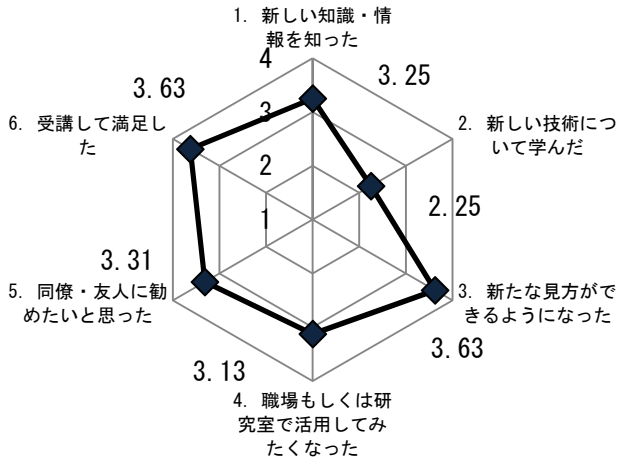
回答者属性(N=16)

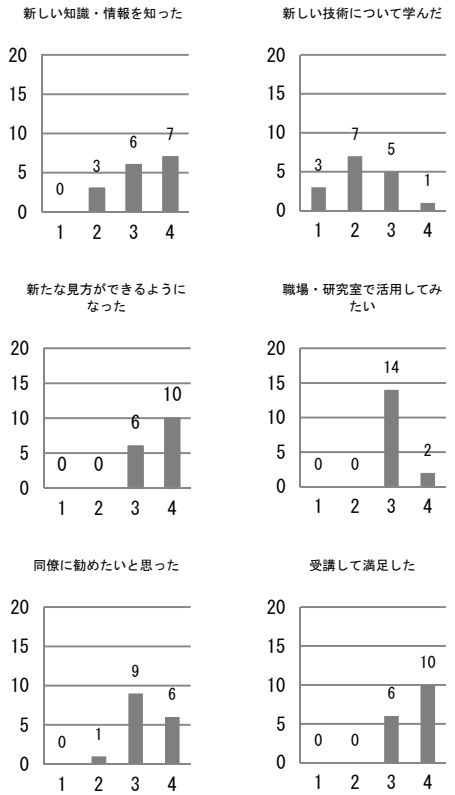
【職階】教授(0)／准教授(0)／講師・助教(0)／職員(16)／その他(0)／無回答(0)

【性別】男性(7)／女性(6)／無回答(3)

【学校種】東北大学(16)／東北大学外(0)／無回答(0)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





このテーマを継続して提供すべきだと思った：16 名（100%）

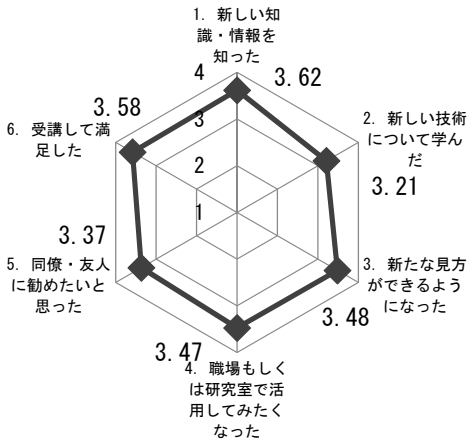
2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- ぼんやりしていた理想像が具体的になり，考えの及ばなかったことを教えてもらえました
- 理想的な職員像を具体化できたこと
- 自分一人で考えているだけでは思いつかないことが多くでてきたので参考になった
- 理想をディスカッションで考えて個人で落としこむのが宿題というスタイル
- 他の方々の仕事の考え方
- 理想の職員になるために必要なこと
- 知らない人と出会った事
- 対話だけでなく，フィードバックを目に見えるかたちで頂けること。みんなモチベーションが上がったと思います
- 「他の職員も自分と同じよう問題意識をもっていた」ということ
- 部局・係を超えたコミュニケーションを取ることができた
- 皆様の経験談を拝聴出来た
- 各種意見交換

3. わかりにくいと思ったこと
- 当初のテーマ設定（事前に考えてくること）の補足説明がもう少しあると良いと思った
- 現状の課題を解決する方法
- グループワーク変更した後，メンバーの名前を覚えるのに苦労したので簡単な自己紹介を・・・
- 事前の課題準備

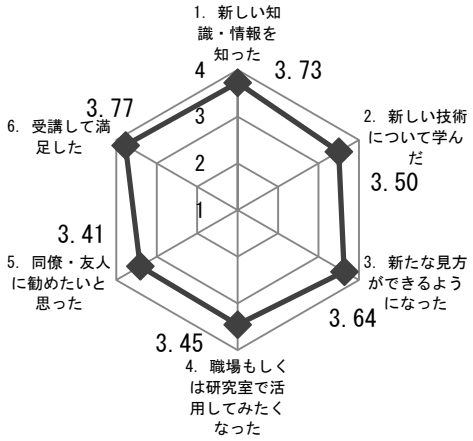
4. セミナーに関しての意見・感想
- 開催回類や規模を大きくしてほしいです
- 部局を超えた，様々な方と意見交換できる機会はとても貴重でした。今後も，今日のつながりを大事にしていきたいと思います
- 有志のファシリテーターの皆様，通常業務の傍らの企画・運営お疲れ様でした。貴重な場をありがとうございました

シリーズ別集計結果

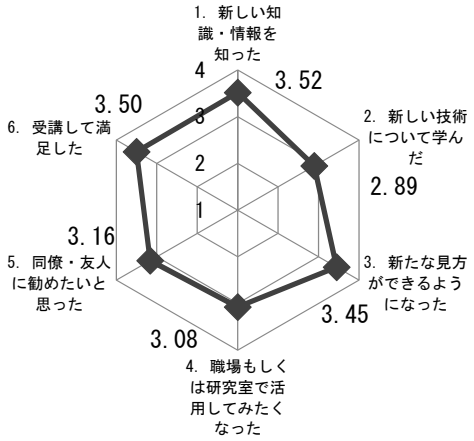
高等教育のリテラシー形成関連（コード：L）



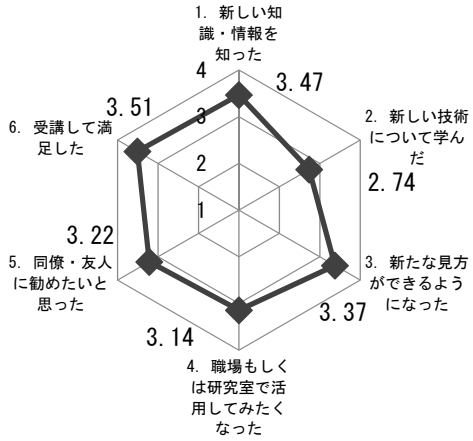
専門教育での指導力形成関連（コード：S）



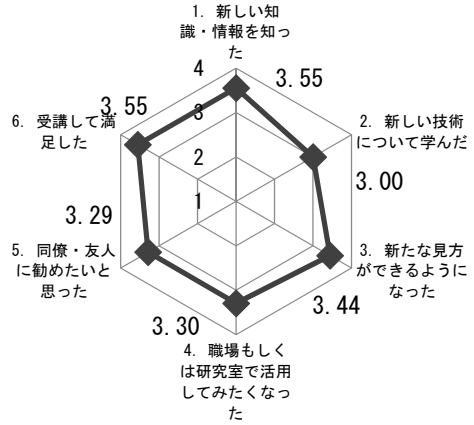
学生支援力形成関連（コード：W）



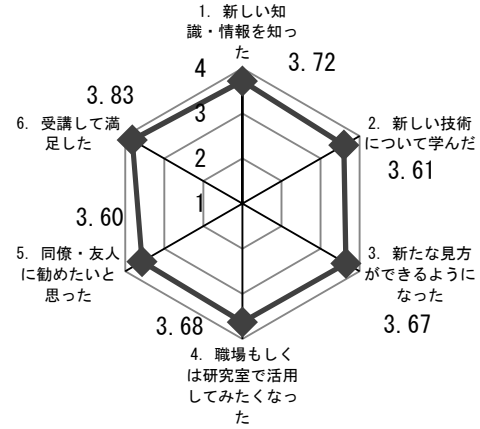
マネジメント力形成関連（コード：M）



全体



全体（技術系のみ抜粋：No.3, 4, 5, 7, 10, 12-01, 12-02, 12-03, 24）



3-3. CPD 教職員一覧

2013 年 4 月 1 日付

役職	氏名	所属
大学教育支援センター長	◎羽田　貴史	高度教養教育・学生支援機構副機構長，教授（高等教育開発室）
同　副センター長	◎杉本　和弘	同　准教授（高等教育開発室）
同　調査研究部門長	（兼任）杉本　和弘	
同　プログラム開発部門長	◎北原　良夫	同　准教授（言語・文化教育開発室）
同　プログラム実施部門長	◎芳賀　満	同　教授（人間総合科学教育開発室）
高度教養教育・学生支援機構　高等教育開発部門長	◎関内　隆	同　教授（高等教育開発室），高等教育開発部門長
同　研究開発員	◎今野　文子	同　助教（高等教育開発室）；調査研究等
同　研究開発員	葛生　政則	同　准教授（高等教育開発室）；プログラム実施
同　研究開発員	○串本　剛	同　講師（高等教育開発室）；調査研究
同　研究開発員	足立　佳奈	同　助手（高等教育開発室）；プログラム実施
同　研究開発員	鈴木　学	同　助手（高等教育開発室）；プログラム実施
同　研究開発員	○橘　由加	同　准教授（言語・文化教育開発室）；プログラム開発
同　研究開発員	○ENSLEN Todd	同　講師（言語・文化教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	SHEARON Ben	同　講師（言語・文化教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	EICHHORST Daniel	同　講師（言語・文化教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	○藤本　敏彦	同　准教授（人間総合科学教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	木内　喜孝	同　教授（臨床医学開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	吉武　清實	同　教授（臨床教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	上原　聡	同　教授（言語・文化教育開発室）；プログラム開発・実施
同　研究開発員	○猪股　歳之	同　助教（キャリア開発室）；調査研究
同　研究開発員	佐藤　勢紀子	同　教授（言語・文化教育開発室）；プログラム実施
同　研究開発員	菅谷　奈津恵	同　准教授（語学教育室）；プログラム実施

同　研究開発員	中川　学	同　講師（人間総合科学教育開発室）；プログラム実施
同　研究開発員	中島　平	教育情報学研究部・教育部准教授；プログラム開発・実施
同　研究開発員	三石　大	教育情報基盤センター准教授；プログラム開発・実施
同　研究開発員	浜田　良樹	情報科学研究科講師；プログラム開発・実施
同　研究開発員	邑本　俊亮	国際災害科学研究所教授；プログラム開発・実施
同　研究開発員	佐俣　紀仁	法学研究科助教；プログラム開発・実施
同　共同開発員	藤村　正司	広島大学；大学教員調査
同　共同開発員	加藤　かおり	新潟大学；イギリスの大学教員養成
同　共同開発員	土持　法一	帝京大学；ポートフォリオ開発
同　共同開発員	渡部　芳栄	岩手県立大学；管理職調査
同　共同開発員	丸山　和昭	福島大学；大学教員調査
同　共同開発員	鳥居　朋子	立命館大学；大学教育マネジメント，IR
同　共同開発員	Sophie Arkoudis	メルボルン大学；NFP
同　共同開発員	Chi Baik	メルボルン大学；NFP
同　共同開発員	Laura Hahn	イリノイ大学；英語で授業
同　共同開発員	Linda von Hoene	カリフォルニア大学バークレー校；PFFP
教育研究支援者	◎稲田　ゆき乃	拠点事業運営全般，SDP，PD セミナー等
教育研究支援者	和田　由里恵	EMLP，PD セミナー，出版物等
事務補佐員	齊藤　ゆう	拠点事業運営補助，PD セミナー等
事務補佐員	朱　嘉琪	ICT 全般，動画撮影編集等
事務補佐員	鎌田　裕子	拠点事業広報等

◎部門長・コア会議メンバー，　○コア会議メンバー

3-4．CPD 共同利用運営委員会 委員一覧

2013 年 4 月 1 日付

所　　属	職　名	氏　名
東北大学　高等教育開発推進センター	総長補佐	木島　明博
東北大学　高等教育開発推進センター	教　授	関内　　隆
東北大学　高等教育開発推進センター	教　授	羽田　貴史
東北大学　高等教育開発推進センター	准教授	杉本　和弘
東北大学　高等教育開発推進センター	教　授	関根　　勉
東北大学　高等教育開発推進センター	教　授	鈴木　敏明
東北大学　教育学研究科	教　授	柴山　　直
東北大学　理学研究科	教　授	花輪　公雄
東北大学　農学研究科	教　授	五味　勝也
東北大学　教育情報基盤センター	教　授	静谷　啓樹
岩手大学	教　授	後藤　尚人
山形大学	教　授	小田　隆治
東北学院大学	教　授	井上義比古
名古屋大学	教　授	夏目　達也
法政大学	教　授	川上　忠重

3-5．CPD 教職員の活動 （2013 年 4 月～2014 年 3 月の主な活動）

センター長・教授　羽田　貴史

〔研究業績〕

1. （単著）「大学組織改革の何が問題か」『IDE　現代の高等教育』No.550，2013 年 5 月，4-11 頁.
2. （単著）「教育マネジメントと学長リーダーシップ論」『高等教育研究』第 17 集，2013 年 5 月，45-63 頁.
3. （単著）「高等教育のガバナンスの変容」『シリーズ大学６　組織としての大学ー役割や機能をどうみるか』岩波書店，2013 年 8 月，77-106 頁.
4. （単著）「研究倫理で不正防ぐ」『日本経済新聞』2013 年 9 月 2 日号.
5. （単著）「アルカディア学報 534　大学教育における大学教員の役割と課題」『教育学術新聞』, 2013 年 10 月 9 日号.
6. （単著）「書評 : 吉田文『大学と教養教育』」『IDE　現代の高等教育』No.555,2013 年 11 月，72-73 頁.
7. （監訳）『FD ハンドブック』玉川大学出版部，2014 年 2 月，全 338 頁.
8. （単著）「巻頭言　高等教育研究者と大学教育の課題」『大学教育学会誌』第 35 巻第 2 号，2013 年 11 月，1 頁.
9. （単著）「1994-2007 年の RIHE と私」『広島大学高等教育研究開発センター40 年のあゆみ』, 2013 年 11 月，69-72 頁.

〔学会活動〕

1. 日本高等教育学会第 16 回大会自由発表「Academic integrity 保証に関する世界の動向と日本の課題」2013 年 5 月 24 日（広島大学）.
2. 日本高等教育学会第 16 回大会　課題研究報告「大学教師とは何か-授業・能力・文化-」2013 年 5 月 25 日（広島大学）.

〔各種活動〕

1. 愛知淑徳大学全学 FD 講演会「大学教員の教育能力開発」2013 年 7 月 9 日.
2. IDE 中国・四国地区セミナー講演「大学における教育マネジメントとは」2013 年 8 月 22 日.
3. 愛媛大学第 1 回教育コーディネーター研修会「学士課程教育における「教育と研究」の関係」2013 年 7 月 4 日.
4. 第 41 回研究員集会「大学のガバナンス～その特質をふまえた組織運営の在り方を考える～　コメント」2013 年 12 月 6-7 日.
5. 地域科学研究会研究倫理セミナー講演「研究倫理確立に向けた大学・学会の責務」2013 年 11 月 21 日.
6. 大学教務実践研究会第 1 回大会講演「教育改革のための武器」2014 年 3 月 9 日.
7. 大学教育改革フォーラム in 東海 2014 基調講演「勉強ができる人間は立派か？　大学教育が目指すべき人間像」2014 年 3 月 8 日.
8. 第 35 回大学教育学会大会主催，実行委員長，2013 年 6 月 1-2 日.
9. 大学教育学会課題研究集会司会，学士課程教育における共通教育の質保証，2013 年 11 月 29-30 日.

副センター長・教授　鈴木　敏明

〔研究業績〕

1.　（単著）「進学競争」（後藤宗理他編著「新・青年心理学ハンドブック」第 33 章），福村出版，2014 年 1 月 15 日.

〔学会活動〕

該当なし.

〔各種活動〕

1. マイナビ「マイナビ進学フェスタ 2013 仙台会場」，講師，2013 年 7 月 17 日.
2. 代々木ゼミナール仙台校「東北大学説明会」，講師，2013 年 7 月 27 日.
3. 青森県立五所川原高等学校「進路講演会」，講師，2013 年 7 月 30 日.
4. 秋田県立横手高等学校「あおくも講座」，講師，2013 年 8 月 1 日.
5. 東京大学主催「2013 主要大学説明会（仙台会場）」，講師，2013 年 8 月 17 日.
6. 青森県立田名部高等学校「大学説明会」，講師，2013 年 10 月 26 日.
7. 栃木県立小山高等学校「進路講演会」，講師，2013 年 11 月 12 日.
8. 東北大学／宮城県教育委員会主催「キャリア・フォーラム in 気仙沼」，企画実施担当，2013 年 11 月 13 日.
9. 大学教育支援センターPD プログラム「発達障害のある学生と大学教育 － アスペルガー障害と注意欠如・多動性障害（AD/HD）を中心として」，企画・司会，2013 年 11 月 26 日.
10. 青森県立青森東高等学校「東北大学進学説明会」，講師，2013 年 12 月 4 日.
11. 大学教育支援センターPD プログラム「学生支援の動向 － 修学支援とキャリア支援」，企画・司会，2014 年 2 月 4 日.
12. 大学教育支援センターPD プログラム「大学教育と青年期発達」，企画・講師，2014 年 3 月 28 日（収録）.
13. 宮城県教育庁生涯学習課登録講師
14. 大学入試センター「大学入試研究ジャーナル」査読委員

調査部門長・准教授　杉本　和弘

〔研究業績〕

1.　（単著）「地域研究からアプローチする豪州高等教育―我が国の実践課題とどう切り結ぶか―」，広島大学高等教育研究開発センター編『高等教育研究の未来を考える～RIHE への期待と今後のあり方～』高等教育研究叢書 124，129-140 頁.
2.　（単著）「ガバナンス―縮減期の大学経営に求められる意思決定システムの強化」，濱名篤・川嶋太津夫・山田礼子・小笠原正明編著『大学改革を成功に導くキーワード 30―「大学冬の時代」を生き抜くために―』学事出版，41-46 頁.
3.　（単著）「グローバル人材の育成―国際的に問われる大学の質保証と学生の成長」，濱名篤・川嶋太津夫・山田礼子・小笠原正明編著『大学改革を成功に導くキーワード 30―「大学冬の時代」を生き抜くために―』学事出版，82-88 頁.
4.　（単著）「学修支援環境の整備―大学教育のパラダイム転換に対応した環境作り」，濱名篤・川嶋

太津夫・山田礼子・小笠原正明編著『大学改革を成功に導くキーワード 30―「大学冬の時代」を生き抜くために―』学事出版，133-138 頁.

5. （共著）「第 1 部第 4 章　労働市場と第三段階教育」，青木麻衣子・佐藤博志編著（2014）『新版オーストラリア・ニュージーランドの教育―グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて―』東信堂.
6. （単著）「北里大学：強い個性化こそ受験生に訴えるブランド力形成の鍵」，リクルート編『カレッジマネジメント』No.182，30-33 頁，2013 年 9 月.
7. （単著）「麗澤大学：国際的な学びの空間での異文化体験が学生を育てる」，リクルート編『カレッジマネジメント』No.183，30-33 頁，2013 年 11 月.
8. （単著）「九州大学：『専門性の高いゼネラリスト』を育成する 21 世紀プログラム」，リクルート編『カレッジマネジメント』No.184，30-33 頁，2014 年 1 月.
9. （単著）「帝京大学：反転授業を使った入学準備教育で主体的学習者を育む」，リクルート編『カレッジマネジメント』No.185，24-27 頁，2014 年 3 月.
10. （翻訳）C・マキニス，P・ラムズデン，D・マコナキー著『高等教育における教育・学習のリーダーシップ』東北大学高等教育開発推進センターPD ブックレット No.5，2014 年 3 月.

〔学会活動〕

1. 杉本和弘「アジア太平洋地域における人材育成―日本の高等教育の課題―」，シンポジウムⅡ討論者，第 24 回オーストラリア学会全国研究大会，2013 年 6 月 9 日（名古屋商科大学）.
2. 杉本和弘「グローバル化がもたらす人の国際移動と教育の課題―豪州ヴィクトリア州の事例を中心に―」，日本比較教育学会第 49 回大会，2013 年 7 月 7 日（上智大学）.
3. 杉本和弘「世界のアカデミック・リーダー育成プログラムから見る日本の課題」，教育関係共同利用拠点及び広島大学高等教育研究開発センター共同開催研究会「大学マネジメントに求められるもの―期待される能力と人材育成―」，2013 年 7 月 27 日（東北大学東京分室）.
4. 杉本和弘「オーストラリアにおける第三段階教育の展開と質保証」，第三段階教育政策研究会，2013 年 8 月 30 日（筑波大学）.

〔各種活動〕

1. PDP「米国高等教育における学習成果の診断の実際」（東北大学）の企画・司会，2013 年 4 月 5 日.
2. 大学職員能力開発プログラム（SDP）「若手職員のための大学職員論」（東北大学），企画・運営・司会，2013 年 7 月 13 日.
3. 報告「世界のアカデミック・リーダー育成プログラムから見る日本の課題」，教育共同利用拠点合同研究会「大学マネジメントに求められるもの―期待される能力と人材育成―」（東北大学東京分室），2013 年 7 月 27 日.
4. 大学改革フォーラム「大学教育の未来を探る～大学改革支援プログラム（GP）の検証と展望～」（明治大学），第 6 分科会（グローバル化）コーディネーター，2013 年 8 月 9 日.
5. PDP「オーストラリアにおける研究倫理政策と実践―今後の展望を探る」（東北大学）の企画・司会，2013 年 10 月 8 日.
6. PFFP「比較の目を育てる」（東北大学），ワークショップの企画・実施，2013 年 10 月 19 日.
7. 大学職員能力開発プログラム（SDP）「若手職員のための大学職員論（2）～先達からのメッセー

ジ～」（東北学院大学），企画・運営・司会，2013 年 10 月 26 日.

8. PDP「世界の高等教育政策」（東北大学），講演，2013 年 11 月 20 日.
9. 講演「グローバル化に対応した高質な大学教育の構築（Building High Quality in University Education in Response to Globalisation）」，日豪高等教育セミナー（オーストラリア大使館），講師， 2013 年 12 月 3 日.
10. 大学職員能力開発プログラム（SDP）「私のなりたい東北大学職員」（東北大学），企画・運営支援，2014 年 1 月 11 日.
11. 広島大学外国語教育研究センターにおける外国語教育マネジメントに関する調査，2014 年 2 月 4-5 日.
12. 筑波大学外国語センターにおける外国語教育マネジメントに関する調査，2014 年 2 月 10 日.
13. 国際教養大学における教育マネジメント及び学習環境に関する調査，2014 年 2 月 13 日.
14. International Seminar: Japanese Mode of Tertiary Education and Globalization（福岡）においてコメント「資格枠組みモデルと日本的可能性（Qualifications Framework and its Applicability to Japan）」，2014 年 2 月 22 日.
15. 東北大学 履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム（EMLP）」，プログラム責任者.
16. 東北大学 大学職員開発プログラム（SDP），プログラム担当者.

プログラム開発部門長・准教授　北原　良夫

〔研究業績〕

1. （単著）「グローバルリーダー育成プログラムー平成 25 年度「TOEFL-ITP」実施結果分析」『平成 25 年度 TOEFL-ITP 実施報告書』，東北大学学務審議会外国語委員会英語教科部会編.
2. （翻訳監修）『高等教育における教育・学習のリーダーシップ』，東北大学高等教育開発推進センター編 PD ブックレット 6.
3. （単著）『TOEIC テストへようこそ』（ウェブ版），朝日出版社.

〔学会活動〕

該当なし.

〔各種活動〕

1. 学務審議会外国語委員会学習環境専門部会施設設備小委員会委員
2. PDP「世界の高等教育政策」（東北大学），司会，2013 年 11 月 20 日.

プログラム実施部門長・教授　芳賀　満

〔研究業績〕

1. （単著）「様々な教養，様々な教育～特に高度教養教育に係わる私見」『東北大学　全学教育広報曙光』36 号，9-12 頁，2013 年 10 月.
2. （単著）”Tyche as a Goddess of Fortune in “the Great Departure（出家踰城）” scene of Life of Buddha”，in Вопросы древней истории, филологии, искусства и материальной культуры. Альманах. vol. 3. К юбилею Эдварда Васильевича Ртвеладзе. Москва，145-151 頁，2013 年.

3. （単著）「チェルベテリとタルクィニアのエトルリア古代墳墓群」（pp. 25-38），「ヴェネツィアとその潟」159-207 頁，「ヴィチェンツァ市街とヴェネト地方のパッラーディオ様式の邸宅群」（pp. 239-253），「サヴォイア王家の王宮群」253-267 頁，「ヴェローナ市」267-275 頁，「ジェノヴァ：レ・ストラーデ・ヌオヴェとパラッツィ・ディ・ロッリ制度」275-284 頁，藤本強・青柳正規編『イタリアの世界文化遺産を歩く』2013 年 10 月，同成社.
4. （単著）「ゲニウス・ロキのデザイン，人間のデザイン，国のデザイン，文明のデザイン～災害モニュメントを考える」『EDplace』（日本デザイン学会 環境デザイン部会 機関誌）68 号，10-14 頁，2013 年 12 月.
5. （単著）「ガンダーラの出家踰城図における女神テュケーの図像–そのタイプ分類とヘレニズム時代ギリシアの視座からの新解釈」『佛教藝術』333 号，1-22 頁，2014 年 3 月.
6. （単著）「大災害と歴史学–我々は過去から未来のために学ぶことはできるのか，あるいは東日本大災害を記録する災害モニュメントの是非」『七隈史学』（福岡大学人文学部歴史学科紀要）16 号，1-42 頁，2014 年 3 月.
7. （共著）「震災後の環境デザイン一残すべきものとは（２）」『EDplace』（日本デザイン学会 環境デザイン部会 機関誌）69 号（シンポジウム記録），2-17 頁，2014 年 3 月.

〔学会活動〕

1. （招待講演，単独）「ゲニウス・ロキのデザイン，人間のデザイン，国のデザイン，文明のデザイン～災害モニュメントを考える」（日本デザイン学会 環境デザイン部会 , 2013 年 6 月 23 日（筑波大学）.
2. （招待講演，単独）「大災害と歴史学一我々は過去から未来のために学ぶことはできるのか，あるいは東北大震災を記憶する災害モニュメントの是非」，福岡大学人文学歴史学科　七隈史学会第 15 回大会　公開講演，2013 年 9 月 28 日（福岡大学）.
3. （招待講演，単独）京都ギリシアローマ美術館講演会「ローマ詩人ウェルギリウスと《トロイの木馬図》仏典ラリタヴィスタラと《出家踰城図》～ 東西の視線の交差」，2013 年 12 月（京都ギリシアローマ美術館）.

〔各種活動〕

1. 日本ユネスコ国内委員会 文化活動小委員会 ユネスコ記憶遺産選考委員会 委員.世界記憶遺産事業について調査・審議し，日本国からは「東寺百合文書」と「舞鶴への生還　1945～1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」の 2 件を日本ユネスコ国内委員会がユネスコに申請.
2. 日本学術会議 史学委員会「文化財の保護と活用に関する分科会」委員. 2014 年 6 月 24 日に提言「文化財の次世代への確かな継承 —災害を前提とした保護対策の構築をめざして—」を政府内外に発出.
3. 日本学術会議 史学委員会「歴史認識・歴史教育に関する分科会」委員
4. 日本学術会議 哲学委員会「哲学・倫理・宗教教育分科会」委員
5. 「高校生歴史フォーラム in 仙台　世界史の中の宮城」（2013 年 8 月 16 日，17 日，18 日）（主催：「高校生歴史フォーラム in 仙台」実行委員会，共催：宮城県社会科教育研究会歴史部会，東北大学高等教育開発推進センター，仙台市博物館，後援：宮城県教育委員会，仙台市教育委員会，東北大学大学院文学研究科歴史学専攻）において，「高校生歴史フォーラム in 仙台」実行委員会の委員として企画・実施.

6. 第 17 回ランチタイム FD「Student Learning Adviser（SLA）の実践紹介―学生の力を“学び”に活かす―」（講師：足立佳菜，鈴木学，SLA，2013 年 6 月 12 日），企画.
7. 第 18 回ランチタイム FD「グローバル人材を育てる～FD・SD の視点から～」（講師：水松巳奈・グローバルラーニングセンター・助手，2013 年 7 月 10 日），企画.

研究開発員・講師　佐藤　万知

〔研究業績〕

1. （共編著）『東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム 2012 年度報告書』，東北大学高等教育開発推進センター，全 192 頁，2013 年 6 月.
2. （単著）”Younger Faculty and Careers in Japan. ”In Gornall, L., Cook, C., Daunton, L., Salisbury, J., and Thomas, B., eds., Academic Working Lives: Experience, Practice and Change. Chapter 18, Bloomsbury Publishing. 2013 年 11 月.

〔学会活動〕

1. 日本高等教育学会第 16 回大会 SD・FD 部会司会（広島大学），2013 年 5 月 26 日.

〔各種活動〕

1. 東北大学 大学教員準備プログラム（PFFP），東北大学 新任教員プログラム（NFP），プログラム担当者（佐藤万知・今野文子）.
2. 専門性開発プログラム（PDP）「Planning and Managing Active Learning in English」2013 年 7 月 5 日開催，セミナー担当者.
3. 専門性開発プログラム（PDP）「ライティング支援者を育成する」2014 年 3 月 12 日開催，セミナー担当者.

研究開発員・助教・　立石　慎治（～2013 年 6 月）

〔各種活動〕

1. 東北大学履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム（EMLP），プログラム開発担当者（杉本和弘・立石慎治）.

研究開発員・助教　今野 文子

〔研究業績〕

1. （単著）『大学教員による授業準備に関する調査報告』，CAHE TOHOKU Report 53，東北大学高等教育開発推進センター，全 136 頁，2014 年 3 月.
2. （共編著）『東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム 2012 年度報告書』，東北大学高等教育開発推進センター，全 192 頁，2013 年 6 月.
3. （共著）Fumiko Konno, Takashi Mitsuishi, ”How University Teachers Design Their Courses”, *Proceeding of Humanitarian Technology Conference (R10-HTC), 2013 IEEE Region 10*, pp.292-297，Full Paper，DOI: 10.1109/R10-HTC.2013.6669058，2013 年 8 月.
4. （共著）Xiumin ZHAO，Noboru TOMITA，Fumiko KONNO，Jiaqi ZHU，Tadashi Inagaki，Yuichi Ohkawa，Takashi Mitsuishi，”Gateway to Chinese: Design and Development of Japan’s First Edition of Blended Learning Materials for Basic University-Level Chinese”,

Proceeding of the 3rd International Conference on Teaching and Learning of Chinese as a Second Language, pp.1-13(CD-ROM)，2013 年 9 月.

5. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大,「大学初級中国語を対象としたブレンディッドラーニングのための教科書の開発」『教育システム情報学会研究報告』28(3)，pp.75-80，2013 年 9 月.
6. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大,「非語学系学科を対象とした第二外国語としての中国語学習における 3 段階ブレンディッドラーニングの実践」『教育システム情報学会誌』30(4)，pp.237-242，2013 年 10 月.
7. （共著）今野文子, 大河雄一，田村吉宏，角彰人，二本柳咲子，山本頼弥，佐々井真嗣，佐々木瞬,「2013 年度第 24 回教育システム若手の会（FujiFuji2013）活動報告 －教育システム研究の交流と発信－」『人工知能学会研究会資料』，第 70 回 先進的学習科学と工学研究会 SIG-ALST-B303，pp. 11-16, Mar.，2014 年 3 月.
8. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大,「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングにおける e ラーニング教材設計指針の作成と実践」『教育システム情報学会誌』31(1)，pp.132-146，2014 年 3 月.

〔学会活動〕

1. 大学教育学会　第 35 回大会（東北大学），大会実行委員，2013 年 6 月 1 日～2 日.

〔各種活動〕

1. 東北大学 大学教員準備プログラム（PFFP），東北大学 新任教員プログラム（NFP），プログラム担当者（佐藤万知・今野文子）.
2. 東北大学 専門性開発プログラム動画配信サイト PDPonline 設計・開発担当者.
3. 専門性開発プログラム（PDP）「授業づくり：準備と運営」2013 年 7 月 19 日開催，セミナー担当者
4. 専門性開発プログラム（PDP）「授業デザインとシラバス作成」2013 年 7 月 26 日開催，セミナー担当者
5. キャリア・フォーラム in 気仙沼，パネリスト，2013 年 11 月 13 日.
6. 2013 年度第 24 回教育システム若手の会 プログラム幹事，2013 年 12 月 1～3 日.

PD コーディネーター　和田　由里恵

〔研究業績〕

1. （共著）和田由里恵・堀江薫・吉本啓「電子メールによる依頼行動におけるポライトネス意識の対照研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 8 号，pp49-61，2013 年 3 月.

〔各種活動〕

1. 東北大学履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム（EMLP），プログラム担当者（杉本和弘・和田由里恵）.
2. 専門性開発プログラム（PDP／EMLP）「大学教育論―教養と専門の二項対立を超えて」2013 年 8 月 3 日開催，セミナー担当者（杉本和弘・和田由里恵）.
3. 専門性開発プログラム（PDP／EMLP）「リーダーシップと意思決定」2013 年 8 月 3 日開催，セミナー担当者（杉本和弘・和田由里恵）.

4. 専門性開発プログラム（PDP／EMLP）「大学の教学マネジメントをどう進めるか―新・大学管理運営論」2013 年 12 月 21 日開催，セミナー担当者（杉本和弘・和田由里恵）.
5. 専門性開発プログラム（PDP／EMLP）「データに基づく教育改善」2013 年 12 月 21 日開催，セミナー担当者（杉本和弘・和田由里恵）.
6. 留学生の受け入れと派遣に関する取組に関する調査，2014 年 3 月 6～7 日，立命館アジア太平洋大学.
7. 大学教育改革フォーラム in 東海 2014（研修），2014 年 3 月 8 日，名古屋大学.
8. 大学教務実践研究会（研修），2014 年 3 月 9 日，名古屋大学.

コーディネーター　稲田　ゆき乃

〔各種活動〕

1. 東北大学 大学職員能力開発プログラム（SDP），プログラム担当者（杉本和弘・稲田ゆき乃）
2. 専門性開発プログラム（PDP／SDP）「若手職員のための大学職員論」2013 年 7 月 13 日開催，セミナー担当者，ファシリテーター.
3. 専門性開発プログラム（PDP／SDP）「若手職員のための大学職員論（2）～先達からのメッセージ～」2013 年 10 月 26 日開催，セミナー担当者，ファシリテーター.
4. 専門性開発プログラム（PDP／SDP）「私のなりたい東北大学職員」2013 年 1 月 11 日開催，セミナー担当者，ファシリテーター.
5. 愛媛大学 SD コーディネーター養成講座＠京都（研修），2013 年 10 月 4～5 日，キャンパスプラザ京都.
6. 教育・学習マネジメントに関する調査，2014 年 2 月 13 日，国際教養大学.

事務補佐員　齋藤　ゆう

〔各種活動〕

1. 留学生の受入と派遣・学修支援の取り組みに関する聴き取り調査，2014 年 3 月 6 日～7 日，立命館アジア太平洋大学.
2. 大学教育改革フォーラム in 東海 2014（研修），2014 年 3 月 8 日，名古屋大学.
3. 大学教務実践研究会第 1 回大会（研修），2014 年 3 月 9 日，名古屋大学.

事務補佐員　朱　嘉琪

〔研究業績〕

1. （共著）Xiumin ZHAO，Noboru TOMITA，Fumiko KONNO，Jiaqi ZHU，Tadashi Inagaki，Yuichi Ohkawa，Takashi Mitsuishi，”Gateway to Chinese: Design and Development of Japan’s First Edition of Blended Learning Materials for Basic University-Level Chinese”，*Proceeding of the 3rd International Conference on Teaching and Learning of Chinese as a Second Language*，1-13 頁(CD-ROM)，2013 年 9 月.
2. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大，「大学初級中国語を対象としたブレンディッドラーニングのための教科書の開発」『教育システム情報学会研究報告』28(3)，75-80 頁，2013 年 9 月.

3. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大,「非語学系学科を対象とした第二外国語としての中国語学習における 3 段階ブレンディッドラーニングの実践」『教育システム情報学会誌』30(4)，237-242 頁，2013 年 10 月.
4. （共著）趙秀敏・冨田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大,「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングにおける e ラーニング教材設計指針の作成と実践」『教育システム情報学会誌』31(1)，132-146 頁，2014 年 3 月.

〔各種活動〕

1. 大学教育改革フォーラム in 東海 2014（研修），2014 年 3 月 8 日，名古屋大学.
2. 大学教務実践研究会第 1 回大会（研修），2014 年 3 月 9 日，名古屋大学.
3. 大学連携 e-Learning 教育支援センター四国 事業報告シンポジウム 2013（研修），2014 年 3 月 17 日，JR ホテルクレメント高松.